

# 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ

- I 久宝寺遺跡 (第4次調査)
- II 小阪合遺跡 (第19次調査)
- III 小阪合遺跡 (第20次調査)
- IV 東郷遺跡 (第33次調査)
- V 東郷遺跡 (第35次調査)
- VI 八尾南遺跡 (第7次調査)

1993年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

## 正 誤 表

(II) 八尾市文化財調査研究会報告 41

頁	行	誤	正
162	28~29	堰	用途不明の木製品（堰？）
175	81	堰	用途不明の木製品（堰？）
176	8	SD-401	SD-402

## 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ

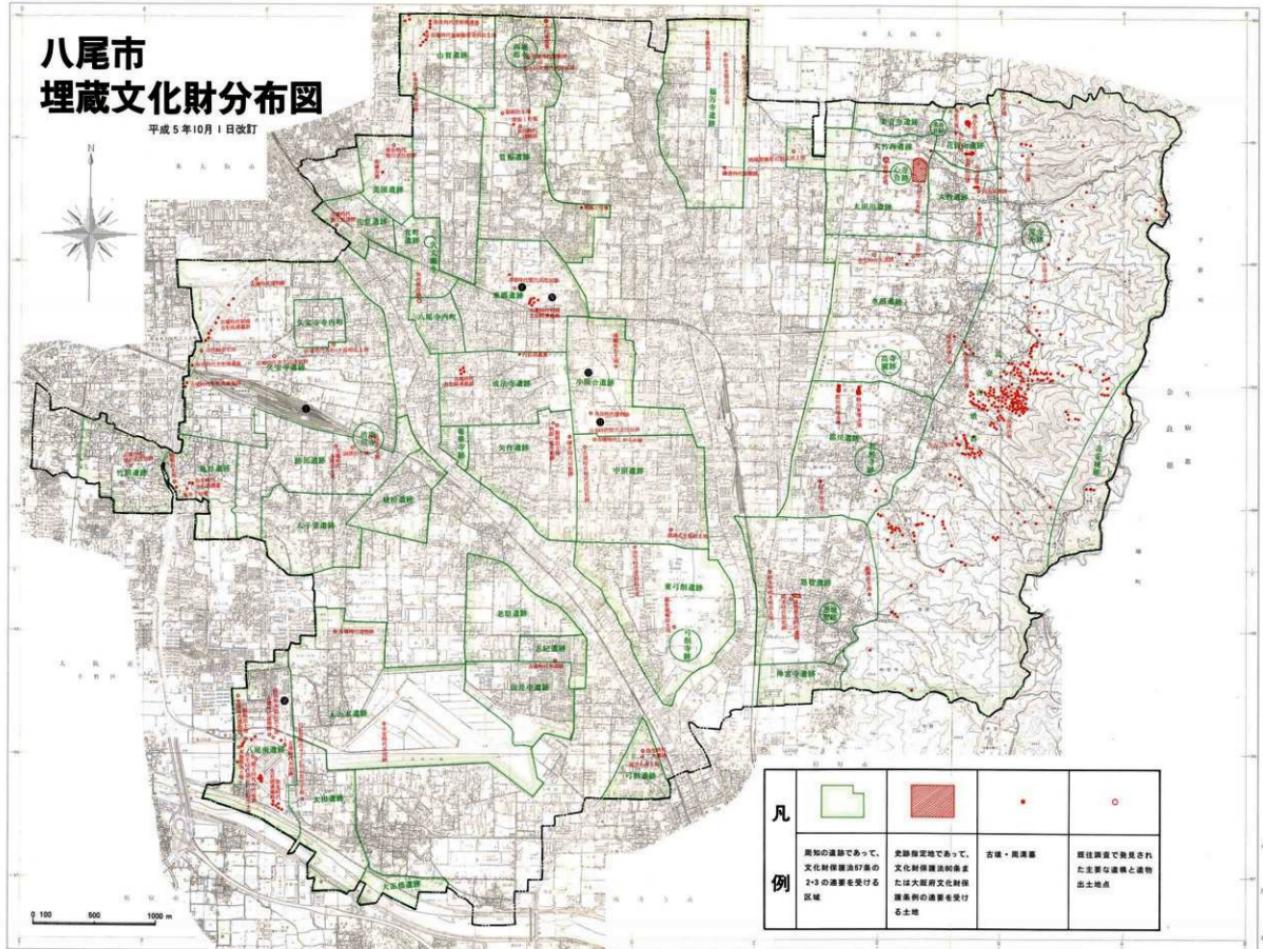
- I 久宝寺遺跡 (第4次調査)
- II 小阪合遺跡 (第19次調査)
- III 小阪合遺跡 (第20次調査)
- IV 東郷遺跡 (第33次調査)
- V 東郷遺跡 (第35次調査)
- VI 八尾南遺跡 (第7次調査)

1993年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

# 八尾市 埋蔵文化財分布図

平成5年10月1日改訂



## はしがき

八尾市の位置する河内平野は、古来より幾度となく伊大和川の氾濫を受けてながら、その自然環境のもと、豊かな土壤に育まれてきた地域であります。この平野部には古来より先人達が生活するうえで築いてきた貴重な文化遺産が数多く埋蔵されております。また同市の東部に連なる信貴生駒山系の西麓部にも平野部と同様、数多くの文化遺産が埋蔵されています。

近年八尾市では、大小様々な分野での都市開発事業が進められるようになり、21世紀に向け近代都市へと大きく変貌しようとしております。しかし、こうした都市開発は便利さや豊かさを与えてくれる反面、先人達の数々の足跡である文化遺産を破壊する危険な面を持っています。確かに一部の遺跡では整備され保存・保護されているとはいえ、そのほとんどは痕跡を止めず消滅していきます。そこで、私共では「開発の波」に呑まれ、失われていく貴重な文化遺産を後世の人々へ伝承することが責務であると認識し、破壊される遺跡については発掘調査を実施して記録保存に努めております。

今回、昭和61年度に実施しました八尾南遺跡（第7次）、平成元年度に実施しました東郷遺跡（第33次）、平成2年度に実施しました久宝寺遺跡（第4次）、小阪合遺跡（第19次）、東郷遺跡（第35次）、平成3年度に実施しました小阪合遺跡（第20次）の調査・整理が完了しましたので報告書を刊行する運びとなりました。本書が学術研究及び本市の地域史の資料として、さらに文化財保護への啓発普及に活用して頂ければ幸いであります。

末筆となりましたが、調査においてご協力いただきました関係各位の皆様方に深くお礼申し上げますとともに、今後ともより一層のご理解、ご支援を賜りますようお願いいたします。

平成6年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会

理事長 福島 孝

## 序

1. 本書は財團法人八尾市文化財調査研究会が昭和61年度・平成元年度・平成2年度・平成3年度に実施した発掘調査成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成業務は各現場終了後に着手し、平成5年度をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
  1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市市役所発行の2,500分の1（昭和57年11月1日）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成3年4月1日改訂）をもとに作成した。
  1. 本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。
  1. 本書で用いた方位は磁北及び国上座標の真北を示している。
  1. 遺構は下記の略号で表した。  
 竪穴住居-S I 挖立住建物-S B 溝-S D 井戸-S E 土坑-S K 小穴-S P  
 土器集積-S W 落込み-S O 自然河川-N R
  1. 遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した。  
 弥生土器・上師器・瓦器・埴輪・石類-白、須恵器・陶磁器-黒、木製品-斜線。
  1. 各調査に際して発掘調査、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

## 目 次

はしがき

序

八尾市埋蔵文化財分布図

I 久宝寺遺跡（第4次調査）	1
II 小阪合遺跡（第19次調査）	23
III 小阪合遺跡（第20次調査）	45
IV 東郷遺跡（第33次調査）	69
V 東郷遺跡（第35次調査）	101
VI 八尾南遺跡（第7次調査）	115

# I 久宝寺遺跡第4次調査（KH90-4）

## 例　　言

1. 本書は、八尾市龜井及び淡川で行ったJR久宝寺駅駅舎改築工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第91号 平成元年9月28日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が、日本国有鉄道清算事業団近畿文社から委託をうけて実施したものである。
1. 本調査は、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第4次調査である。
1. 現地調査は、当調査研究会 坪田真一を担当者として、平成2年4月2日に着手し、同年6月12日に終了した。調査面積は87.1m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、岡田聖一・坂下 学・浜田千鶴・若竹慶弘の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、岩木順子・田島和恵・都築聰子・山内千恵子の参加を得た。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表を田島・山内が作成した。

## 本 文 目 次

第1章 調査に至る経過.....	1
第2章 周辺の地理的・歴史的環境.....	1
第3章 調査概要.....	4
第1節 調査方法.....	4
第2節 基本層序.....	5
第3節 検出遺構と出土遺物.....	7
第4章 出土遺物観察表.....	20
第5章 まとめ.....	22

## 挿 図 目 次

第1図 久宝寺遺跡調査地位置図 (S = 1 / 15000).....	2
第2図 調査地位置図 (S = 1 / 2500) .....	3
第3図 調査区設定図 (S = 1 / 250).....	4
第4図 調査区北壁土層断面図 (S = 縦 1 / 40、横 1 / 160) .....	6
第5図 第1 ~ 4次面遺構図 (S = 1 / 200) .....	8
第6図 第5 ~ 7次面遺構図 (S = 1 / 200) .....	9
第7図 1区 第3層出土遺物 (S = 1 / 4) .....	10
第8図 1区 第3次面平面図 (S = 1 / 50) .....	11
第9図 2・3区 第3次面遺構出土遺物 (S = 1 / 4) .....	12
第10図 2区 第3次面平面図 (S = 1 / 50) .....	13
第11図 3区 第3次面平面図 (S = 1 / 50) .....	14
第12図 1区 第4次面SD1401遺物出土状況図 (S = 1 / 30) .....	16
第13図 1区 第4次面SD1401出土遺物① (S = 1 / 4) .....	17
第14図 1区 第4次面SD1401出土遺物② (S = 1 / 4 * 1 / 6) .....	18
第15図 NR1501出土遺物 (S = 1 / 4) .....	19

## 表 目 次

表1 久宝寺遺跡内当調査研究会発掘調査一覧表.....	2
表2 1区 第1次面溝 (SD1101~1106) 法量表.....	7
表3 2区 第1次面溝 (SD2101~2106) 法量表.....	7
表4 1区 第3次面溝 (SD1301~1305) 法量表.....	11
表5 1区 第3次面ピット (SP1301~1310) 法量表.....	12
表6 2区 第3次面溝 (SD2301~2304) 法量表.....	12
表7 2区 第3次面ピット (SP2302~2304) 法量表.....	13
表8 3区 第3次面溝 (SD3301~3303) 法量表.....	14
表9 3区 第3次面ピット (SP3301~3303) 法量表.....	14
表10 3区 第3次面ピット (SP3304~3308) 法量表.....	15

## 図版目次

図版一 調査地全景（西から）

1区 第3次面（東から）

図版二 2区 第3次面（東から）

3区 第3次面（東から）

図版三 1区 第4次面SD1401上層遺物出土状況（北から）

1区 第4次面SD1401（東から）

図版四 1区 NR1501遺物(40)出土状況（西から）

3区 NR1501遺物(42)出土状況（上が南）

図版五 2区 NR1501（西から）

2区 第6次面（東から）

図版六 出土遺物

図版七 出土遺物

## 第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画では、北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・龜井・北龜井町・渋川町がその範囲となっており、さらに西側の大阪市・北側の東大阪市に広がっている。

遺跡発見の契機は、昭和10年に行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことにさかのぼる。その後、昭和48年以降、(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道関連の調査(以下、近畿道調査)をはじめ、(財)東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が実施されており、当遺跡は2km四方にもおよぶ縄文時代後期～近世にわたる複合遺跡であることが確認されている。

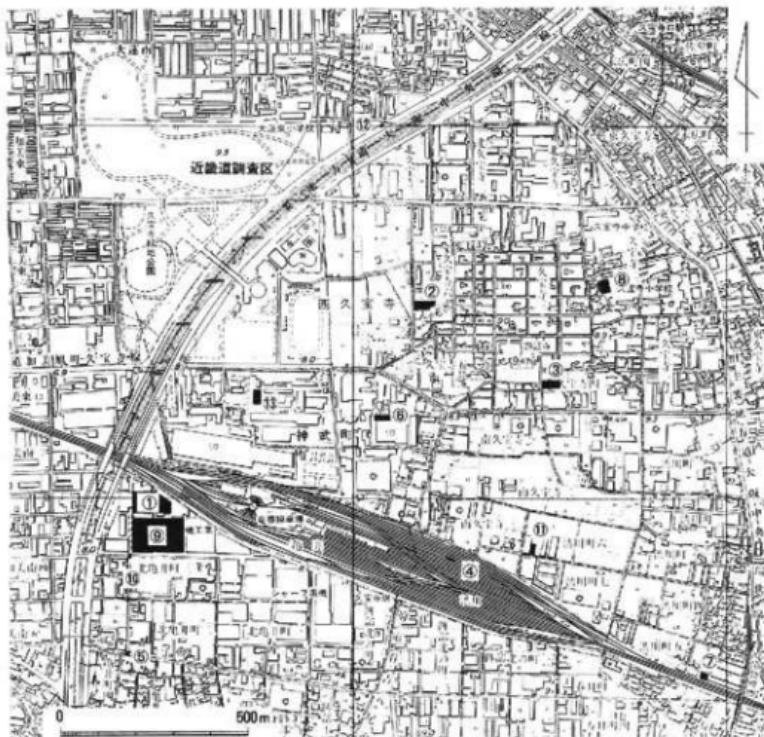
このような情勢下、日本国有鉄道清算事業団近畿支社より、八尾市龜井及び渋川の鉄道敷地内において、JR久宝寺駅の駅舎改築工事を行う旨の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあることから、昭和63年8月・11～12月、工事予定地内に5m×5mのグリッドを7箇所設定し、試掘調査を行った。<sup>註</sup> その結果同文化財室では発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、工事により遺構の破壊が予想される部分を対象に、発掘調査を実施することが両者で合意された。発掘調査にあたっては、事業者・同文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することとなった。

## 第2章 周辺の地理的・歴史的環境

久宝寺遺跡の位置は、地理的には伊太和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・龜井遺跡・太子堂遺跡が存在する。なお西側の大坂市域では加美遺跡として調査が行われているが、両遺跡は同一の遺跡として捉えられている。

当遺跡の西部から北部については、昭和55年～60年に実施された近畿道調査や、(財)大阪市文化財協会による加美遺跡の調査等により、遺跡の様相は解明されつつあるといえる。ここではまず近畿道調査の成果について簡単に述べる。

生活の痕跡が確認されるのは縄文時代後期からであり、後期・晩期の河川・遺物包含層があげられ、河川では足跡が検出されている。弥生時代では溝・ピット等の集落遺構の他、しがらみ・杭列を施した河川がある。中期では方形周溝墓も検出されている。後期には大規模な河川



第1図 久宝寺遺跡調査位置図 (S=1/15000)

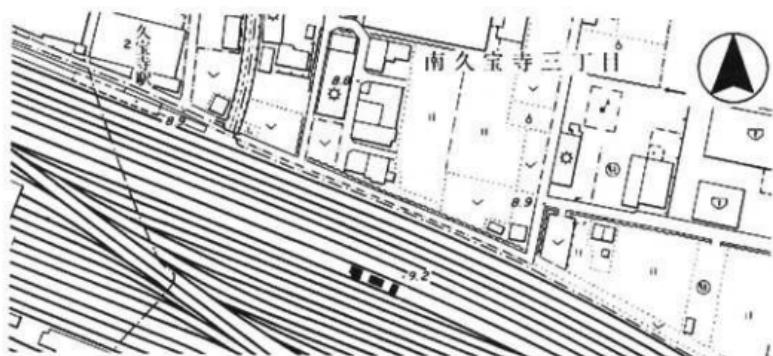
	第○次調査	調査地	調査期間
①	第1次	北龜井町3丁目1	昭和60年4月2日～6月25日
②	第2次	久宝寺6丁目226	昭和63年2月16日～2月29日
③	第3次	久宝寺4丁目74	昭和63年12月5日～12月28日
④	第4次	龜井町及び波川町	平成2年4月2日～6月12日
⑤	第5次	北龜井町2丁目地内	平成2年4月15日～4月22日
⑥	第6次	神武町17・20～27番地	平成2年9月3日～10月12日
⑦	第7次	波川町5丁目33番地	平成2年12月17日～12月21日
⑧	第8次	久宝寺2・2-33	平成3年6月20日～7月27日
⑨	第9次	北龜井3丁目1番72	平成3年8月1日～12月3日
⑩	第10次	北龜井町2・3丁目地内	平成3年10月2日～10月22日
⑪	第11次	波川町6丁目34・35番地	平成3年10月7日～10月19日
⑫	第12次	北久宝寺3丁目地内	平成3年11月29日～10月19日
⑬	第13次	神武町2番35号	平成3年12月16日～4年1月23日

表1 久宝寺遺跡内当調査研究会発掘調査一覧表（平成3年度まで）

堆積が確認されている。古墳時代前期では数か所の集落域と墓域が確認されている。また注目される遺物として準構造船の一部が出土している。中期では韓式系上器を多量に出土した集落が確認され、渡来系氏族あるいはそれに関連する集団の居住地と推定されている。飛鳥・奈良～平安時代では、ほぼ全域にわたって掘立柱建物群・井戸等の集落遺構、水田が検出されている。これらは現在の条里地割に一致するものである。中世以降は耕作地となっている。

これらの多大な調査成果に対して、遺跡の中央部や東部、また今回の調査地にあたる南部地域については、小規模な発掘調査が数件行われているにすぎず、遺構の広がり等を把握するまでには至っていない。次に、この地域で当調査研究会が行った調査の成果について述べる。

弥生時代では中期の遺物包含層が⑥で確認されており、遺存状況の良好な土器が出土している。付近に当時の集落が存在するのは確実であろう。後期では⑧で溝・土坑等の集落遺構が検出されている。古墳時代では前期の集落遺構が⑥・⑧で、また墓域では方形周溝墓が③で、前方後方墳が⑨で検出されている。この時期の遺構は、西部や北部の調査では数面の遺構面が確認され、また遺物面でも多大な調査成果が得られている。これに比して南部や東部では遺構・遺物ともに非常に希薄なものであるといえる。中期から後期・終末期の集落遺構としては、南部の⑩で土坑・溝等が検出されているのみであり、南東部の⑦では後期の遺物包含層が確認されている。中央部付近ではこの時期の遺構・遺物は確認されておらず、また西部でも遺構・遺物は減少しており、前期とは逆の様相が指摘できる。南部から東部では中期頃から土地が安定してゆき、居住域となっていたのであろう。奈良時代では②・⑥・⑦で遺物包含層が確認されている。平安時代では③で水田、⑪で耕作溝が、⑥で遺物包含層が確認されている。

第2図 調査位置図 ( $S = 1/2500$ )

## 第3章 調査概要

### 第1節 調査方法

今回の調査は建物基礎部分の調査であり、調査区は3か所に分かれており、東西方向に約3m間隔で並んでいる。地区名は西から1～3区とし、調査面積は1区-33.8m<sup>2</sup>・2区-29.8m<sup>2</sup>・3区-23.5m<sup>2</sup>で、計87.1m<sup>2</sup>である。

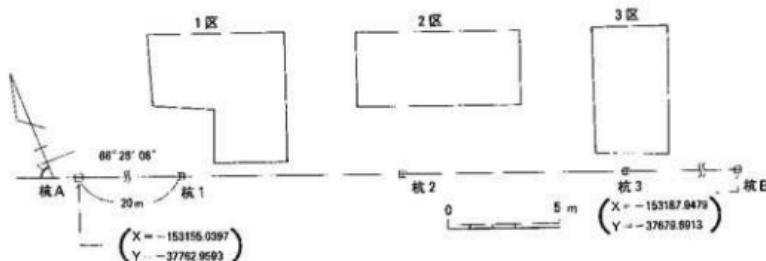
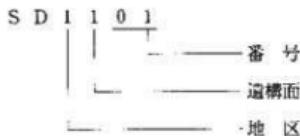
掘削に際しては、現地表ト約1.0mまでを機械掘削とし、以下の約5.0mを層理にしたがって人力掘削により調査を進めた。なお調査は1～3区を並行して行った。

平面図の基準については、調査区の南側に東西方向の任意の基準ラインを設けることとし、まず基準杭（杭A・B）を打設した。そして杭Aから東に20mと、さらに10m間隔で杭（杭1～3）を打設し、各調査区の基準杭とした。なお将来の周辺での調査との関係を考慮して、杭A・Bには岡土座標VI系の座標値を設け、この基準ラインが使用できるようにした。

杭A ( $X = -153155.0397$ )  
( $Y = -37762.9593$ )

杭B ( $X = -153187.9479$ )  
( $Y = -37679.6913$ )

造構名は下記のように、略号+四桁の数字に統一した。また複数区にまたがる造構については、最西の地区名を冠した。



第3図 調査区設定図 (S = 1/250)

## 第2節 基本層序

各調査区の北壁を基本層序とした。詳細な断面図は第4図に掲載したが、ここでは主に各遺構面間の土層を、上質を中心として基本層序とした。

第1層-盛土。主に機械掘削により除去した部分である。地表面の標高は約9.3mを測る。1区から2区には下部に旧耕土が遺存していたが、3区ではみられなかった。

第2層-黄褐色灰色系粘質土～砂質土。東部の3区では砂質土となっている。古墳時代後期～近世の遺物を含んでいる。この上面が第1次面であり、標高は8.2m～8.4mを測る。

第3層-灰褐色系砂混じり粘質土～砂質土。第2層と同様、東部ほど砂質になっており、また層厚が増している。古墳時代後期～中世の遺物を含んでいる。この上面が第2次面で、標高は7.7m～8.0mを測る。

第4層-灰黃褐色系砂混じり粘質土。1区から2区西部にみられ、古墳時代後期～平安時代の遺物を含んでいる。

第5層-灰黄色系粘質シルト。2区東部から3区にみられた。第4層・第5層の上面が第3次面であり、標高は7.5m～7.7mを測る。

第6層-黄灰褐色系粘質シルト～粘土。1区北部でのみ見られた。固くしまっており堅地層とも考えられる。この上面が第4次面であり、標高は約7.3mを測る。

第7層-青灰色～暗灰色系の粘土～微砂。東部ほどシルト質・砂質となる。古墳時代中期の遺物を含んでいる。

第8層-黄褐色系粗砂。弥生時代後期から古墳時代前期頃の遺物を少量含んでいる。第7層・第8層は、N R 1501の堆積土層で、河床面を第5次面とした。標高は5.9m～6.8mを測る。

第9層-暗灰青色系粘土。植物遺体が多く含んでいる。東部では上層部分が灰色系微砂との互層状を呈している。遺物は検出されなかった。

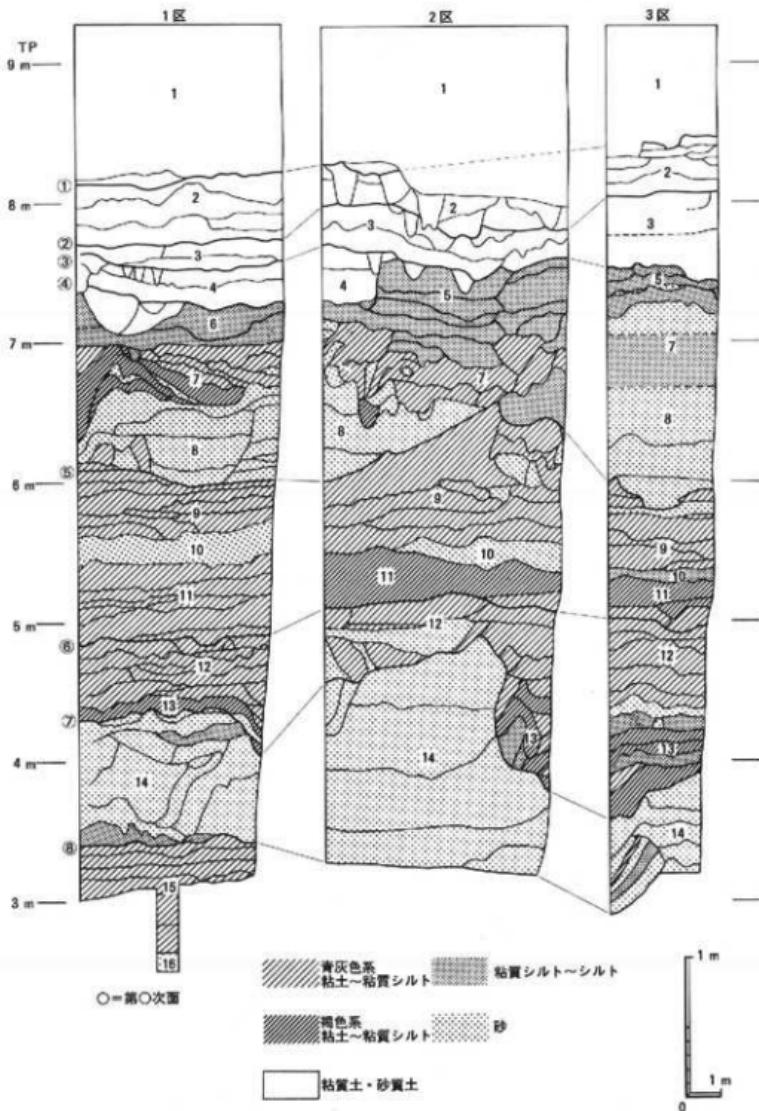
第10層-灰青色～灰黄色系の荒砂～細砂。西部ほど砂粒は荒くなっている。遺物は検出されなかった。N R 1501の下層部分とも考えられる。

第11層-暗灰青色～暗褐色系粘土。東部ほど褐色系となっている。

第12層-暗青灰色系粘質シルト。2区では暗灰色系の砂との互層状を呈する。この上面が第6次面であり、標高4.8m～5.1mを測る。

第13層-暗褐色～灰青色系のシルト～粘土の互層。植物遺体が多く含んでいる。弥生時代中期頃までの遺物を含んでいる。第12・13層がN R 1701の堆積土層で、河床面を第7次面とした。標高は3.6m～4.9mを測る。

第14層-暗灰黄色系荒砂。N R 1801の堆積土で、河床面の標高は約3.4mを測る。摩滅した繩文土器片を含んでいる。



第4図 調査区北壁土層断面図 (S=縦1/40、横1/160)

第15層—暗緑灰色系の粘土・粘質シルトの互層。植物遺体を含んでいる。以下からは遺物は検出されなかった。

第16層—灰緑色系細砂。固く結まっている。

### 第3節 検出遺構と出土遺物

調査により、河川の床面を含め8面の遺構面（第1～8次面）を確認した。

#### 〈第1次面〉

1区で溝6条（SD1101～1106）、2区で溝6条（SD2101～2106）、3区で落ち込み1基（SO3101）を検出した。

#### ・ SD1101～1106

1区北部で検出した南北方向に平行する溝群で、方位は北から東に約27度振っている。南部は削平されていると考えられる。断面皿状を呈し、埋土は暗灰黄色砂質土で、近世までの遺物を含んでいる。近世の鋤溝と考えられる。法量等は表1にまとめた。

S	D	1101	1102	1103	1104	1105	1106
検出長		0.8	2.1	2.1	2.3	2.3	2.3 (m)
幅	22		57	28	37	47	25 (cm)
深さ	5		5	3	3	3	3 (cm)
間隔		29	28	28	16	10	(cm)

表2 1区 第1次面溝（SD1101～1106）法量表

#### ・ SD2101～2106

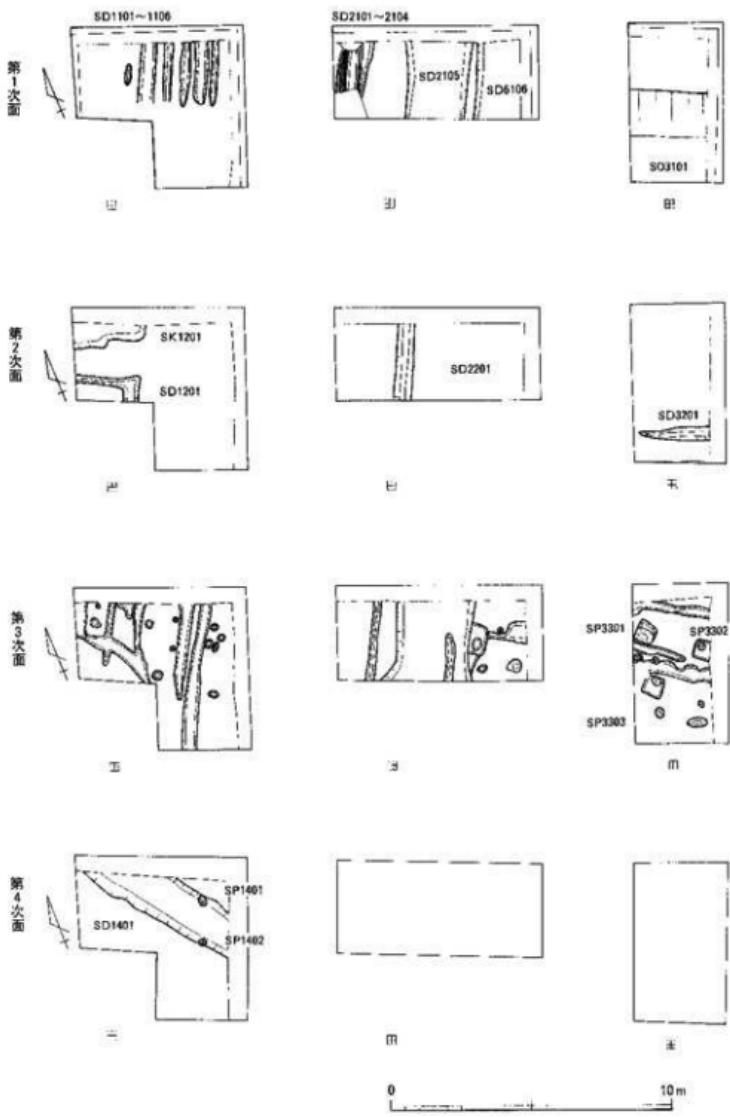
南北方向に平行して伸びる溝群で、西部のSD2101～2104は1区の溝群と一連のものと考えられ、埋土は同様である。法量等は表2にまとめた。

S	D	2101	2102	2103	2104	2105	2106
検出長		1.8	1.5	1.5	2.1	2.8	2.7 (m)
幅	—		16	44	47	220	— (cm)
深さ	5		5	3	3	3	3 (cm)
間隔		10	5	6	145	32	(cm)

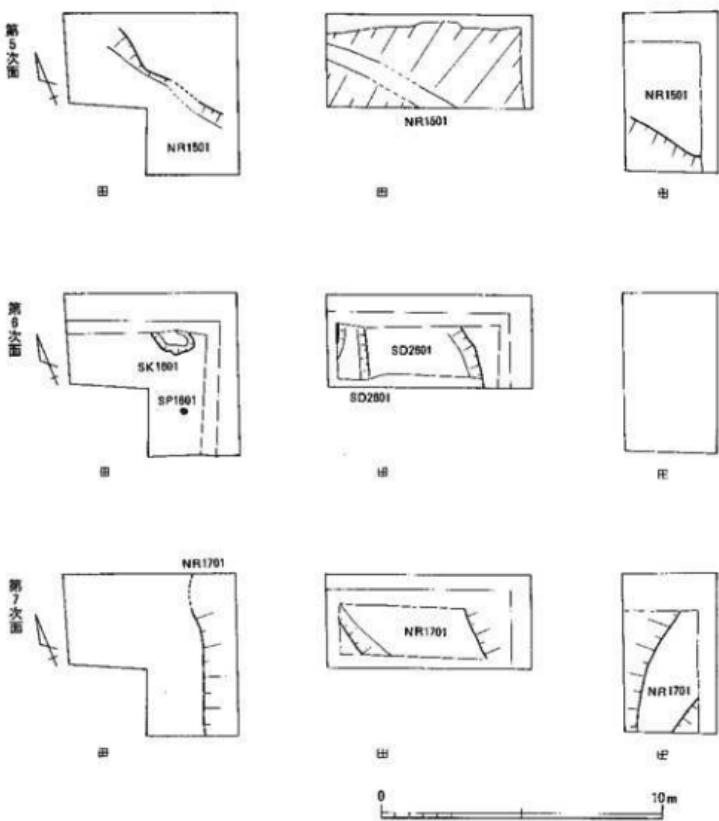
表3 2区 第1次面溝（SD2101～2106）法量表

#### ・ SO3101

3区の南半部を占め、北から南に落ち込んでいる。平面形は不明であるが、検出部分の掘形ラインは東西方向の直線的なものである。規模は南北3.3m以上、東西3.1m以上、深さ約0.5mを測る。埋土は上から黄褐色砂質土・灰色砂質土・灰褐色砂質土である。中世から近世頃の遺物が出土している。



第5図 第1～4次面造構図 ( $S = 1/200$ )

第6図 第5～7次面遺構図 ( $S = 1/200$ )

## &lt;第2次面&gt;

1区で七坑1基 (SK1201)・溝1条 (SD1201)、2区で溝1条 (SD2201)、3区で溝1条 (SD3201) を検出した。

## • SK1201

1区北西角に位置し、調査区外に統くため平面形は不明である。規模は東西2.6m以上、南北1.0m以上、深さ約10cmを測る。埋土は灰黄色細砂混じり粘質土で、出土遺物は細片のみで時期の特定できるものは無い。

• S D 1201

S K 1201の南側で検出した東西方向の溝で、東端で南方にほぼ直角に屈曲している。規模は幅26cm～55cm・深さ約10cmを測り、埋土は灰褐色粗砂混じり砂質土である。中世頃までの遺物を含んでいる。

• S D 2201

南北方向に直線的に伸びる溝で、検出長約2.8mで、方向は北から東に約26度振っている。幅約60cm・深さ約10cmを測り、埋土はS D 1201と同様である。遺物は出土していない。

• S D 3201

東西方向に直線的に伸びる溝で、検出長約2.5m・幅約45cm・深さ約8cmを測り、埋土はS D 1201と同様である。遺物は出土していない。

S D 1201・2201・3201は、その方向や埋土の状況から関連性が認められる。

〈第3次面〉

1区で土坑2基(S K 1301・1302)・溝5条(S D 1301～1305)・ピット10個(S P 1301～1310)、2区で溝4条(S D 2301～2304)・ピット4個(S P 2301～2304)、3区で溝3条(S D 3301～3303)・ピット8個(S P 3301～3308)を検出した。

• S K 1301

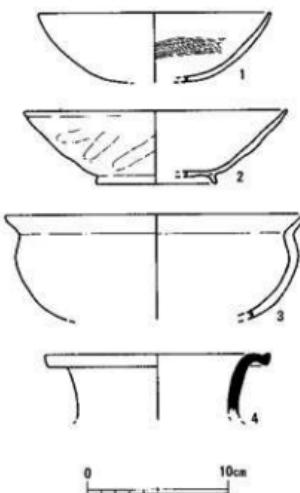
1区北西角に位置し、調査区外に続くため平面形は不明であるが、検出部分の形状は方形の角部にあたる。規模は東西0.45m以上、南北1.3m以上、深さ約5cmを測るが、調査区北壁部分では深さ約25cmと深くなっている。埋土は上層が黄灰色粗砂混じり粘質土、下層が灰黄色粘質土である。出土遺物は細片のみで時期の特定できるものは無い。

• S K 1302

平面不整形で、規模は東西0.6m、南北0.6m以上、深さ約5cmを測り、埋土は黄灰色粗砂混じり粘質土である。遺物は出土していない。

• S D 1301～1305

S D 1301～1304は南北方向に平行して直線的に伸びる溝で、いずれも断面逆台形を呈する。S D 1305は北西～南東方向に伸びる弧状を呈し、S D 1301・1302と合流している。西端はS K 1301によっ



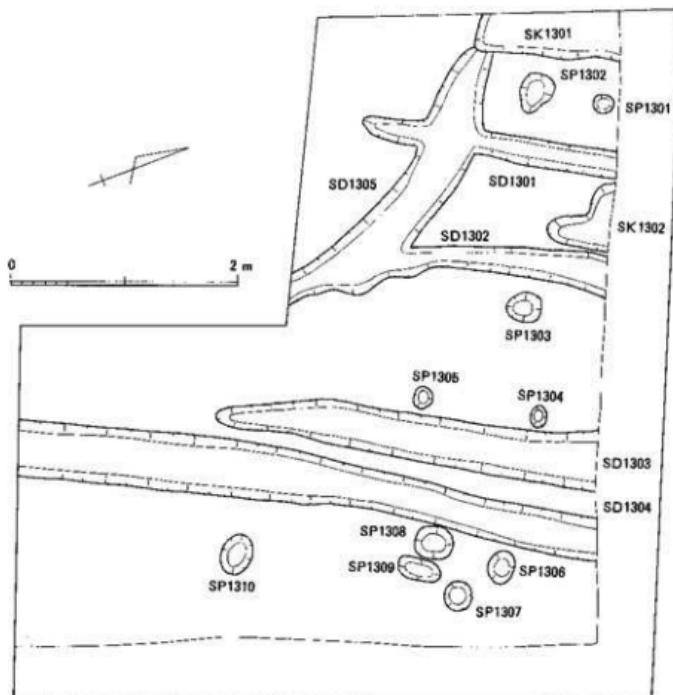
第7図 1区第3層出土遺物 (S=1/4)

て切られている。SD1301~1304から古墳時代後期~平安時代頃に比定される土器片が出土している。法量等は表4にまとめている。

S	D	1301	1302	1303	1304	1305	
検出長		2.3	1.9	3.4	5.2	2.8	(m)
幅	20~25	18~36	39~55	34~51	24~44	(cm)	
深さ	5~9	4~7	5~10	4~9	4~7	(cm)	
間隔		74	135	20	-		(cm)
埋土	①	②	②	②	②		率

※①淡黄褐色細砂混じり粘質土、②灰黃褐色細砂混じり粘質土

表4 1区第3次面溝(SD1301~1305) 法量表



第8図 1区第3次面平面図 (S=1/50)

#### • SP1301~1310

これらのピットからは規則性は見いだせない。またいずれも深さ約5cm程度の浅いもので、

建物を構成する柱穴とは考え難い。S P 1304～1308は、S D 1303・1304の縁辺に位置し、これらの溝との何らかの関連が考えられる。法量等は表5にまとめた。

	平面形状	長辺×短辺×深さ (cm)	埋 土
S P 1301	円 形	1 8 × 1 6 × 5	灰黄褐色細砂混じり粘質土
S P 1302	不整円形	3 7 × 2 7 × 5	"
S P 1303	楕円形	3 2 × 2 6 × 5	"
S P 1304	楕円形	2 0 × 1 4 × 6	"
S P 1305	円 形	2 1 × 1 7 × 9	"
S P 1306	円 形	3 0 × 2 3 × 5	"
S P 1307	円 形	2 7 × 2 4 × 5	暗灰黄色微砂混じり粘質土
S P 1308	円 形	3 4 × 3 0 × 4	灰黄褐色細砂混じり粘質土
S P 1309	楕円形	3 8 × 1 9 × 4	"
S P 1310	楕円形	3 7 × 2 7 × 6	"

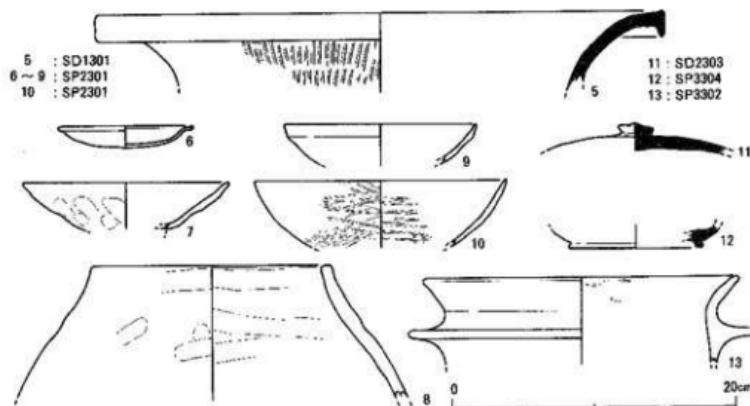
表5 1区 第3次面ピット (S P 1301～1310) 法量表

・ S D 2301～2304

S D 2301と2302は平行する南北方向の溝で、間隔は約2.4mを測る。S D 2304はこれらと直角方向の溝である。S D 2303は前者と同一方向の溝であるが幅が広く、S D 2302は当溝が埋没

	幅 (cm)	深さ (cm)	埋 土
S D 1301	2 4 ～ 3 0	3 ～ 9	灰褐色細砂混じり粘質土
S D 1302	2 7 ～ 3 7	3 ～ 5	灰褐色細砂混じり粘質土
S D 1303	2 7 0 ～ 3 2 5	1 0 ～ 1 8	淡灰黃褐色粘質シルト
S D 1304	2 0 ～ 7 3	3 ～ 5	灰色粘質土

表6 2区 第3次面溝 (S D 2301～2304) 法量表



第9図 2・3区 第3次面遺構出土遺物 (S = 1/4)

した後に上面に掘られている。SD 2303から飛鳥～奈良時代に比定される杯蓋(11)が出土している。SD 2304は東側で北側に広がり、幅が広くなっている。法量等は表6にまとめた。

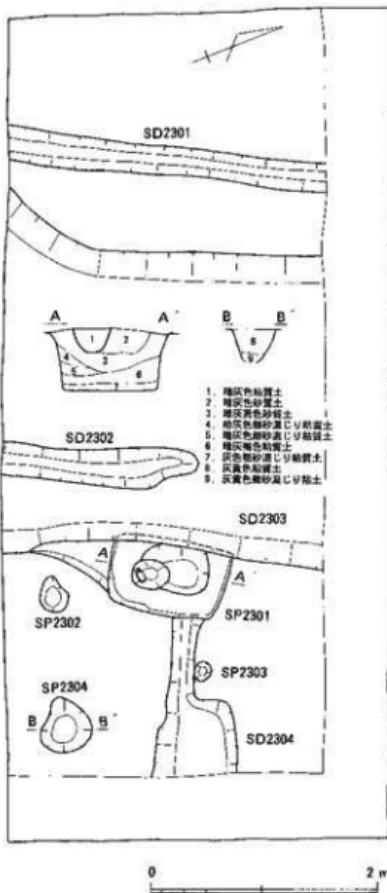
#### • SP 2301

平面形はほぼ長方形で、西部はSD 2303によって削半されている。規模は1.06m×0.68m・深さ55cmを測る。掘方は垂直に近いもので、底部は平坦である。内側面・底面が固く縮まっており、叩き締められている可能性がある。中央やや南寄りで、平面33cm×26cmの楕円形で深さ20cmを測る柱根部が確認された。掘立柱建物を構成する柱穴と考えられる。

遺物は柱根部から黒色土・器底(10)、掘方内上層からは完形のいわゆる「て」の字口縁の土師質皿(6)他が出上している。時期は平安時代中頃以降と考えられる。

#### • SP 2302～2304

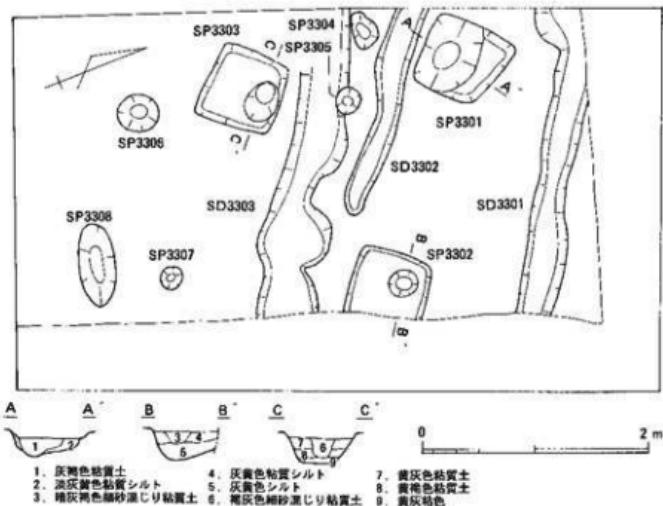
SP 2304が深さ30cmを測り、SP 2301と連続して掘立柱建物を構成する可能性がある。両者を結ぶラインの方位は北から西に約39度振っており、両者間の距離は約1.6mである。法量等は表7にまとめた。



第10図 2区第3次面平面図 (S=1/50)

平面形状	長辺×短辺×深さ(cm)	埋 土
不整円形	32×25×10	灰色粘質シルト
円 形	17×15×3	灰色粘質土
不整円形	48×15×30	灰黄色粘質土・灰黄色微砂混じり粘土

表7 2区 第3次面ピット (SP 2302～2304) 法量表



第11図 3区第3次面平面図 (S = 1/50)

• S D 3301~3303

3区北半部で検出した平行する東西方向の溝である。S D 3303は掘形のラインに凹凸がみられる。S D 3302と3303から古墳時代後期から平安時代頃の土器の細片が出土している。法量等は表8にまとめた。

	幅(cm)	深さ(cm)	埋 土
S D 3301	2 5 ~ 4 0	3 ~ 5	灰褐色粘質土
S D 3302	1 9 ~ 2 9	3 ~ 6	灰褐色細粘質土
S D 3303	3 1 ~ 6 4	5 ~ 8	/

表8 3区 第3次面溝 (S D 3301~3303) 法量表

• S P 3301~3303

平面形はほぼ方形を呈し、掘立柱建物の柱穴と考えられる。S P 3301と3302が連続すると考えられ、両者を結ぶラインの方位は北から東に約50度振っており、両者間の距離は約2.0mを測る。いずれのピットからも古墳時代後期から奈良時代頃の土器(13)が出土している。法量

	長辺×短辺×深さ(cm)	柱根部の長辺×短辺×深さ(cm)
S P 3301	7 5 × 6 9 × 2 4	6 8 × 4 8 × 2 4
S P 3302	6 8 × 6 5 以上 × 2 8	2 6 × 2 4 × 1 3
S P 3303	7 1 × 7 0 × 2 8	3 7 × 2 8 × 2 2

表9 3区 第3次面ピット (S P 3301~3303) 法量表

等は表9にまとめた。

• S P3304~3308

S P3307が、S P3303と連続して掘立柱建物を構成する可能性がある。両者を結ぶラインの方位は北から西に約39度振っており、これは2区のS P2301とS P2304を結ぶラインと平行している。両者間の距離は約1.8mである。S P3304と3308から奈良時代頃の土器の細片(12)が出上している。法量等は表10にまとめた。

	平面形状	長辺×短辺×深さ(cm)	埋 土
S P3304	不 定 形	3 3 × 2 2 × 5	灰褐色粘質土
S P3305	円 形	2 3 × 2 0 × 5	"
S P3306	円 形	3 7 × 3 4 × 6	"
S P3307	円 形	2 1 × 1 9 × 5	"
S P3308	椭 圆 形	7 5 × 3 2 × 4	灰褐色粘質土・暗灰褐色粘質土

表10 3区 第3次面ピット(S P3304~3308) 法量表

〈第4次面〉

1区で溝1条(S D1401)・ピット2個(S P1401・1402)を検出した。

• S D1401

北西-南東方向の直線的な溝で、方位は北から西に約39度振っている。規模は検出長6.0m・幅約1.5m・深さ15~30cmを測り、断面直状で、埋土は上層が灰褐色微砂混じりシルト、下層が褐灰色微砂混じり粘質シルトである。古墳時代後期末から終末期に比定される遺物(14~39)が出土している。このうち(15・19・21・29~31)が上層出土である。

• S P1401

平面形は椭円形を呈し、規模は40×24cm・深さ約10cmを測り、埋土は上層が灰色微砂混じり粘土、下層が灰色微砂シルトである。

• S P1402

平面形は不整円形を呈し、規模は29×24cm・深さ約16cmを測り、埋土は上から灰褐色粘質土・灰色粘質土・灰褐色粘質シルトである。

S P1401と1402は、S D1401埋没後に掘られている。

〈第5次面〉

河川1条(N R1501)を検出し、河床面を遺構面とした。

• N R1501

1区から3区までの調査区全域にわたる自然河川であり、第9層の暗灰青色系粘土の上面を河床面とした。河床面の標高は約6.0mを測る。検出長約24mを測るが、調査区内で肩は検出しえなかっただため幅・深さ等は不明である。堆積土は上層が層厚40~50mを測る青灰色~暗灰



第12図 1区第4次面 S D1401  
遺物出土状況図 (S=1/30)

色系粘土～微砂、下層が層厚約60cmを測る  
黄褐色系粗砂である。上層は東部の3区ほど砂質となっている。2区の南西部が流心部となる可能性があり、河床面の凸凹の状況や堆積土の状況からは北西・南東の流路方向が窺える。

遺物は、上層部からは古墳時代中期に比定される須恵器(40～42)等が、下層部からは弥生時代後期から古墳時代前期の土器(43～47)の他流木が出上している。

#### 〈第6次面〉

1区で上坑1基(S K1601)・ピット1個(S P1601)、2区で溝1条(S D2601)  
・落ち込み1基(S O2601)を検出した。  
・S K1601

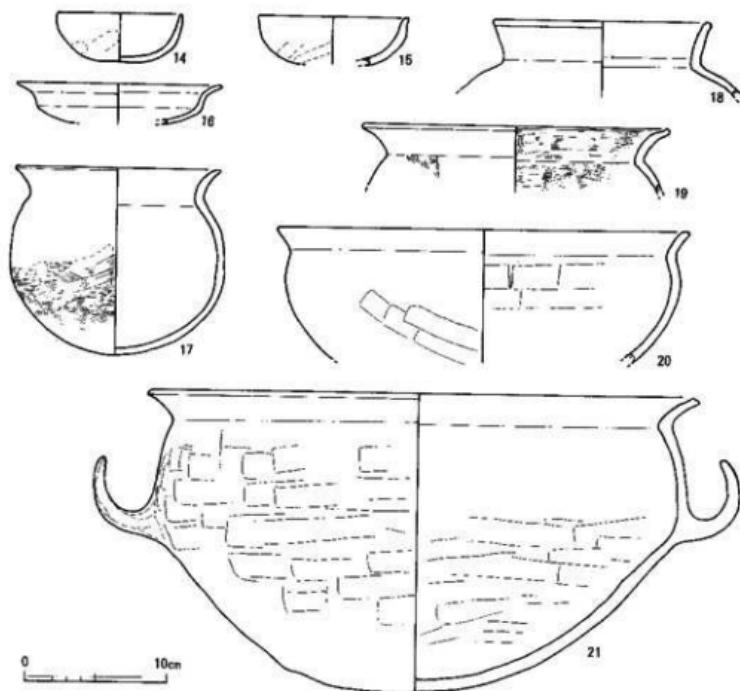
北部は調査区外に至り、平面形・規模は不明である。検出部分の平面形は不定形で、規模は1.5m×0.8m・深さ約10cmを測り、埋土は暗灰色粗砂混じりシルトである。時期不明の土器片が出上している。

#### ・S P1601

平面形は20×17cmの楕円形を呈し、深さは10cmを測り、埋土は暗褐色細砂混じり粘土である。

#### ・S D2601

2区西端で検出した南北方向の溝である。検出長約1.9m・幅約1.0m・深さ10～20cmを測り、埋土は上から灰黄色粘質シルト粒を含む暗灰褐色粘質シルト・暗褐色微砂混じり粘質シルト・灰青色シルト～微砂である。最上層は第6次面を覆う第11層が落ち込んだと考えられる層で、ここから縄文上



第13図 1区第4次面SD1401出土遺物① (S=1/4)

器と考えられる摩滅した上器片が出上している。

• S O2601

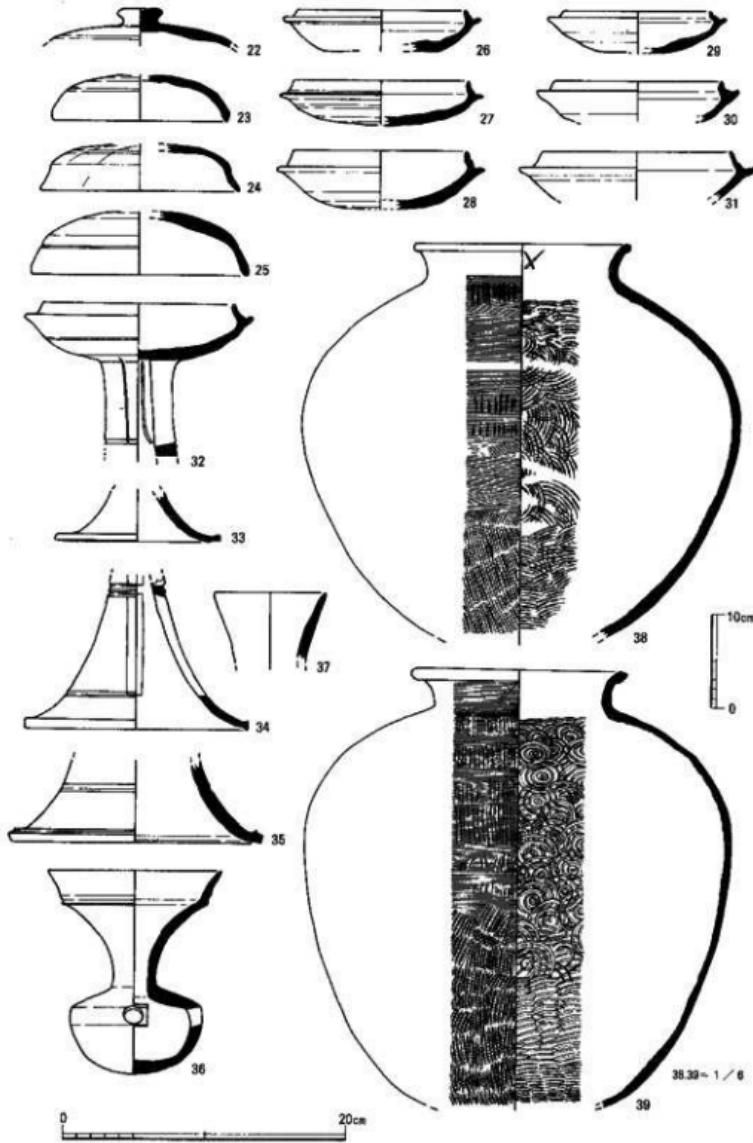
2区の東部から西に落ちる浅い落ち込みで、西端はSD2601に削平されている。検出部の掘形ラインは南北方向の弧状を呈している。規模は東西3.6m以上×南北2.0m以上・深さ約15cmを測り、埋土は上層が黒灰色粘土、下層が暗灰色微砂混じり粘土である。

〈第7次面〉

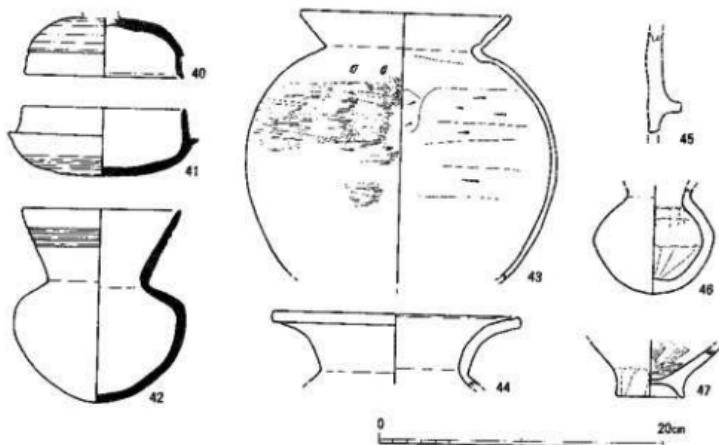
河川1条(NR1701)を検出し、河床面を遺構面とした。

• NR1701

1区から3区までの調査区全域にわたる自然河川であり、第14層の暗灰黄色系荒砂の上面を河床面とした。河床面の標高は約3.6m～4.9mを測る。堆積土は上層が層厚約50cmを測る暗青灰色系粘質シルト、下層が層厚約50cmを測る暗褐色～灰青色系のシルト～粘土の互層で、下層は植物遺体を多く含んでいる。河床面は凹凸が著しく、2区の中央付近が最も高く、西になだ



第14図 1区第4次面S D1401出土遺物② (S = 1/4 + 1/6)



第15図 NR 1501出土遺物 (S = 1/4)

らかに、東に急激に落ち込んでいる。遺物は、弥生時代中期以前と考えられる摩滅した土器片が出土している。

#### 〈第8次面〉

河川1条 (NR 1801) を検出した。

#### ・ NR 1801

1区から3区までの調査区全域にわたる自然河川である。NR 1701の河床面を形成する層厚1.0m以上を測る第14層暗灰黄色系荒砂を堆積土としている。1区で確認した第15層暗緑灰色系粘土・粘質シルトの互層の上面を河床面とし、ほぼ平坦な面で、その標高は約3.4mを測る。河床面は東部ほど低くなっているようで、2・3区では第15層は確認していない。堆積土から縄文土器と考えられる摩滅した土器片が出土している。また1区での下層確認調査によると、この第15層は層厚約80cmを測り、さらにその下で河川の流水堆積層と考えられる第16層灰緑色細砂を確認している。

## 第4章 出土遺物観察表

遺物番号	器種	出土地点	法面(cm) (底面積)	口径 色調 外 内	胎 土	施成	技法・形態等の特徴		備考
							形状	表面	
1	黑色土器	1区 高 第3層	(16.5)	灰 灰褐色	素	1.0mm以下 の砂粒を少 量含む。	良好	ヘリミヨギ。A類。	%
2	土器器	1区 高 第3層	(18.6) 5.3 (8.7)	灰 灰褐色	素	1.5mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部指揮え。	反転
3	土器器	1区 高 第3層	(21.4)	灰 灰褐色	素	1.5mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	%
4	須恵器	1区 高 第3層	(16.0)	灰 灰褐色	素	1.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁ナデ。	口縁 % 反転
5	須恵器	1区	(40.0)	淡灰 青色	素	1.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部外側ナデ、内面凹輪ナデ、底部外側平行 タタキ、内面同心円タタキ既存。	極小 反転
6	土器器	SD1301		9.4 1.6 乳灰青色	素	2.0mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。	光形
7	土器器	2区 高 SP2301	(14.4)	茶 茶褐色	素	1.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側指揮え、内面ヨコナ デ。	% 反転
8	土器器	2区 高 SP2301	(18.7)	灰 灰褐色	素	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部外側指揮え、内面ナデ。 内面保付。	口縁 % 反転
9	土器器	2区 高 SP2301	(13.6)	灰 灰褐色	素	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	口縁 % 反転
10	須恵器	2区 高 柱根部 SD2301	(17.0)	灰 灰褐色	素	0.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	ヘリミヨギ。B類。	% 反転
11	須恵器	2区 高 柱根部 SD2301	2.5 1.0	灰 灰褐色	素	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁ナデ。	口縁 % 反転
12	須恵器	3区 高台区 SF3304	(9.6)	灰 色	素	良好	口縁ナデ。		極小 反転
13	土器器	3区 高 SP3302	(22.4) (24.6)	灰 灰褐色	素	良好	ナデ。口縁部内面にハケ既存。		極小 反転
14	土器器	1区 高 SD1401	8.6 3.5	灰 灰褐色	素	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部ナデ。底体部外側指揮え、内面ナデ。	ほぼ光形
15	土器器	1区 高 SD1401	(10.5)	灰 灰褐色	素	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部ナデ。底体部外側指揮え、内面ナデ。	% 反転
16	土器器	1区 高 SD1401	(14.4)	灰 灰褐色	素	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	不明。	% 反転
17	土器器	1区 高 SD1401	9.0 13.4 3.4	灰 灰褐色	素	やや粗 い。1.0 mm以下 の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部~背面ヨコナデ、底体部外側ハケ、内 面ナデ。底体部外側既存。	ほぼ光形 体部最大径 15.1cm
18	土器器	1区 高 SD1401	(15.1)	灰 灰褐色	素	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部外側ヨコナデ、内面ナデ。両部ナデ。	口縁 % 反転
19	土器器	1区 高 SD1401	(31.5)	暗 茶褐色	素	2.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部外側ヨコナデ、内面ハケ。局部ハケ。	口縁 % 反転
20	土器器	1区 高 SD1401	(39.0)	灰 灰褐色	素	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	口縁 % 反転
21	土器器	1区 高 SD1401	30.2 21.7	灰 灰褐色	素	0.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。	ほぼ光形
22	須恵器	1区 高 SD1401	つまみ透 つまみ高 3.0 1.1	灰 灰褐色	素	3.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁ナデ。	%

遺物番号 （採取番号）	器種	出土地点	法線（度） (復元度)	口径 底面	色調 外 内	胎 七	焼成	技法・形態等の特徴	参考
23 須恵器 杯蓋	1区 SD1401		(12.2)	淡灰色	素 下の砂粒を微 量含む。	1.0mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	回転ナメ。底部外側回転へラケズリ。	%
六 杯蓋	SD1401		(14.0)	淡灰青色		1.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	回転ナメ。天井部外側回転へラケズリへラケズリ。 口あり。	反転
24 須恵器 杯蓋	1区 SD1401		(14.0)	淡灰青色	素 下の砂粒を少 量含む。	1.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	回転ナメ。天井部外側回転へラケズリへラケズリ。 口あり。	反転
25 須恵器 杯身	1区 SD1401		(15.2)	乳灰茶色	素 下の砂粒を微 量含む。	1.0mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	回転ナメ。天井部外側回転へラケズリ。	%
26 須恵器 杯身	1区 SD1401		(11.8)	灰色	素 下の砂粒を微 量含む。	1.5mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	回転ナメ。内外面灰かぶり、底部外側直着痕有 り。	%
27 須恵器 杯身	1区 SD1401		(12.4) 3.2	灰青色	素 下の砂粒を少 量含む。	1.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	回転ナメ。底部外側回転へラケズリ。	%
28 須恵器 杯身	1区 SD1401		(12.2) 4.2	淡灰茶色	素 下の砂粒を少 量含む。	1.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	回転ナメ。底部外側回転へラケズリ。	%
29 須恵器 杯身	1区 SD1401		(10.4) 3.0	淡灰茶色	素 下の砂粒を少 量含む。	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	回転ナメ。底部内面中央部ナメ。底部外側直 着痕あり。外側自然端。	%
六 須恵器 杯身	SD1401	受部器	(12.8)						反転
30 須恵器 杯身	1区 SD1401		(11.8) 14.4	灰色	素 下の砂粒を少 量含む。	2.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	回転ナメ。底部外側回転へラケズリ。	%
31 須恵器 杯身	1区 SD1401		(13.2) 16.8	灰青色	素 下の砂粒を微 量含む。	1.5mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	回転ナメ。	%
32 須恵器 高杯	1区 SD1401		13.4 16.3	灰色	素 下の砂粒を少 量含む。	3.5mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	回転ナメ。底部外側直着痕へラケズリ。脚部部2 方向2段の横状スカッシュ。	%
33 須恵器 高杯	1区 SD1401		(9.8)	灰色	素 下の砂粒を微 量含む。	1.0mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	回転ナメ。	脚部 %
34 須恵器 高杯	1区 SD1401		(15.6)	灰青色	素 下の砂粒を微 量含む。	1.0mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	回転ナメ。脚部部3方向2段の長方形スカッシュ。	脚部 %
七 須恵器 高杯	SD1401								反転
35 須恵器 高杯	1区 SD1401		(17.7)	淡灰绿色	素 下の砂粒を微 量含む。	1.5mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	回転ナメ。内面ナメ。内面灰かぶり。	極小 反転
七 高杯	SD1401			淡灰茶色					
36 須恵器 高杯	1区 SD1401		(12.2)	灰青色	素 下の砂粒を多 量含む。	0.5mm以 下の砂粒を多 量含む。	良好	回転ナメ。底部外側回転へラケズリ。	口縁 %
七 高杯	SD1401								反転
37 須恵器 口縁高	1区 SD1401		(7.8)	灰青色	素 下の砂粒を微 量含む。	1.0mm以 下の砂粒を微 量含む。	良好	回転ナメ。	極小 反転
38 須恵器 口縁高	1区 SD1401		23.0	灰色	素 下の砂粒を少 量含む。	2.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部回転ナメ。体部外側平行タキ後上位回 転タキ4回、内面内張タキ。口縁部内面へラケ ズリ。	口縫 %
七 須恵器 口縁高	SD1401								反転
39 須恵器 口縁高	1区 SD1401		23.0	灰青色	素 下の砂粒を少 量含む。	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部回転ナメ。体部外側平行タキ後上位回 転タキ4回、内面同心内タキ。口縁部 内面へラケズリ。	口縫 %
七 須恵器 口縁高	SD1401								反転
40 須恵器 口縁高	1区 NR1501		23.0	灰色	素 下の砂粒を少 量含む。	1.0mm以 下の砂粒を少 量含む。	良好	回転ナメ。大井部外側回転へラケズリ。	つまみ矢孔 反転
七 口縁高	NR1501								
41 須恵器 口縁高	3区 NR1501		11.4 4.9	淡灰茶色	素 下の砂粒を多 量含む。	2.0mm以 下の砂粒を多 量含む。	良好	回転ナメ。底部外側回転へラケズリ。	完形
七 口縁高	NR1501	受部器	13.5						
42 須恵器 口縁高	3区 NR1501		11.5 14.0	灰青色	素 下の砂粒を多 量含む。	2.0mm以 下の砂粒を多 量含む。	良好	回転ナメ。口縁部外側3条の凹線。口縁部内面 ～脚部外側灰かぶり。	ほぼ完形
七 口縁高	NR1501	最大径	12.1						
43 土器 壺	1区 NR1501		14.8 21.9	黑色 暗褐色	素 下の砂粒を多 量含む。	0.5mm以 下の砂粒を多 量含む。	良好	口縫部コナメ。体部外側ヘケ、内面ラケズ リ。内面外側内張（5個以上）。	%
44 烧土 壺	1区 NR1501		(17.4)	淡灰茶色	素 下の砂粒を多 量含む。	0.5mm以 下の砂粒を多 量含む。	良好	口縫部ナメ。	口縫 %
45 内輪結構	1区 NR1501			淡灰茶色	素 下の砂粒を多 量含む。	0.5mm以 下の砂粒を多 量含む。	良好	不明。スカッシュあり。	極小 反転

遺物番号 貯蔵番号	器種	出土地点	法量(cm) (復元値)	口径 基面	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	残 存 状 況
46 七 七	弥生 壺	2区 NR1501	最大径 8.5	茶褐色	重 1.5kg 以下の砂粒を少 量含む。	良好	ナデ。		口縁部欠損
47	弥生 壺	1区 NR1501	底径 4.5	淡灰茶色	素	良好	底部外縁平行タッキをナゲ廻し、内面ハケ。底 部外面ナデで、指押え残る。	底部のみ	

## 第5章 まとめ

今回の調査は調査面積も狭く、遺構の面的な広がりを捉えることは困難であったが、縄文時代から近世にわたる遺構・遺物を検出した。

第1・2次面は近世～中世頃の遺構面と考えられ、検出した遺構はいずれも農耕に関連するものと考えられる。

第3次面は平安時代頃の遺構面と考えられ、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴が検出された。なお一部の遺構は飛鳥・奈良時代までさかのぼる可能性もあり、調査地の東部に推定されている渋川庵寺との関連も考慮しなければならない。

第4次面では1区で古墳時代後期末の溝を検出した。第4次面以下では時期を明確にできる遺構は検出できなかったが、第5次面で検出したNR1501壺土の上層からは古墳時代中期に比定される完形の須恵器が出土しており、付近に当時の集落の存在が推定される。また下層からは上流から運ばれたと考えられる弥生時代後期から古墳時代前期（布留式期）の上器が出土している。

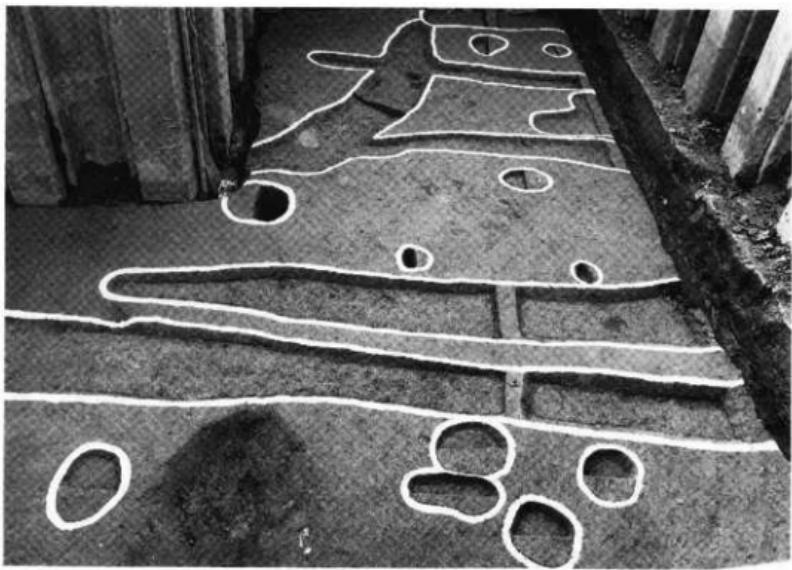
第4次面以下の約5.0mは河川の堆積層が続き、層厚0.3m～1.5mの粘土層・砂層が交互に堆積している状況が確認された。これは河川の氾濫期と安定期とを示している。第6次面で検出した溝・ピット等は、河川の氾濫により廃絶した一時的な集落であろう。これらのことから、土地環境が安定し当地が恒久的な居住地となるのは第4次面の古墳時代後期以降であると考えられる。

注 八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ 久宝寺遺跡（63-269）の調査」  
1989. 3 八尾市文化財調査報告20

図 版



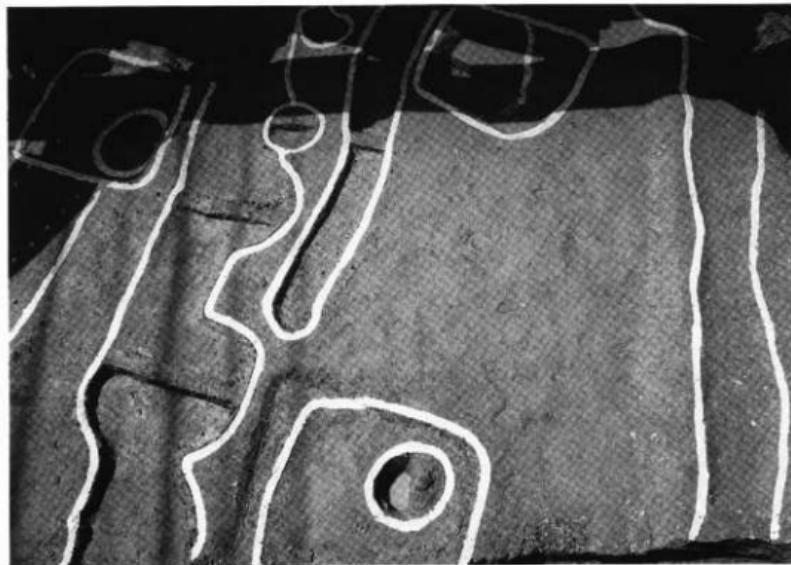
調査地全景（西から）



1区 第3次面（東から）



2区 第3次面（東から）



3区 第3次面（東から）



1区 第4次面 SD1401上層遺物出土状況（北から）



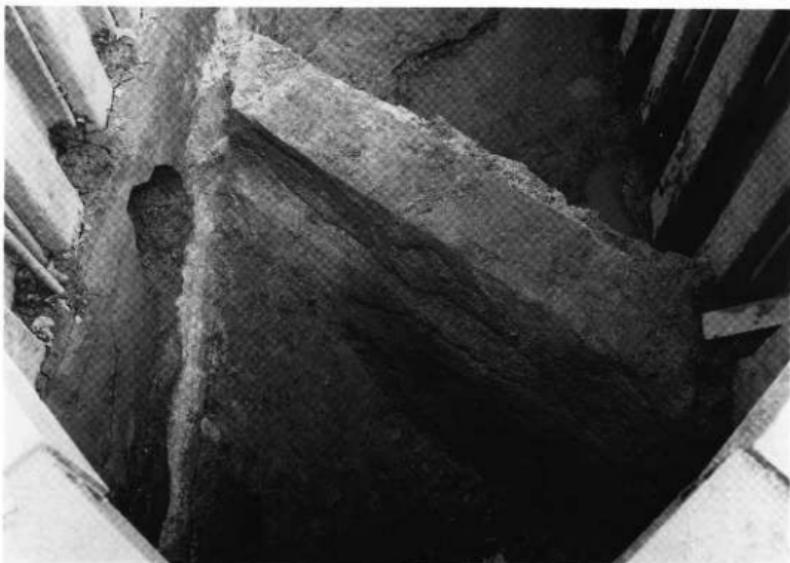
1区 第4次面 SD1401（東から）



1区 NR1501 遺物 (40) 出土状況 (西から)



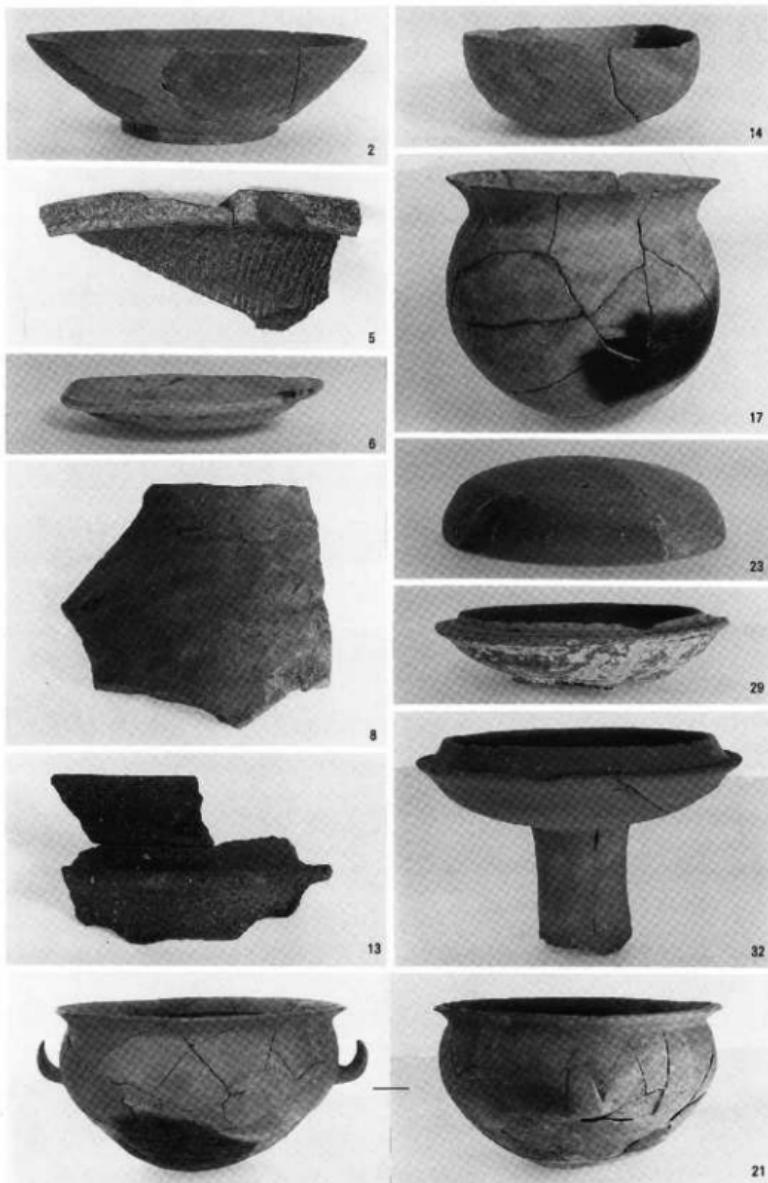
3区 NR1501 遺物 (42) 出土状況 (上が南)



2区 NR1501 (西から)



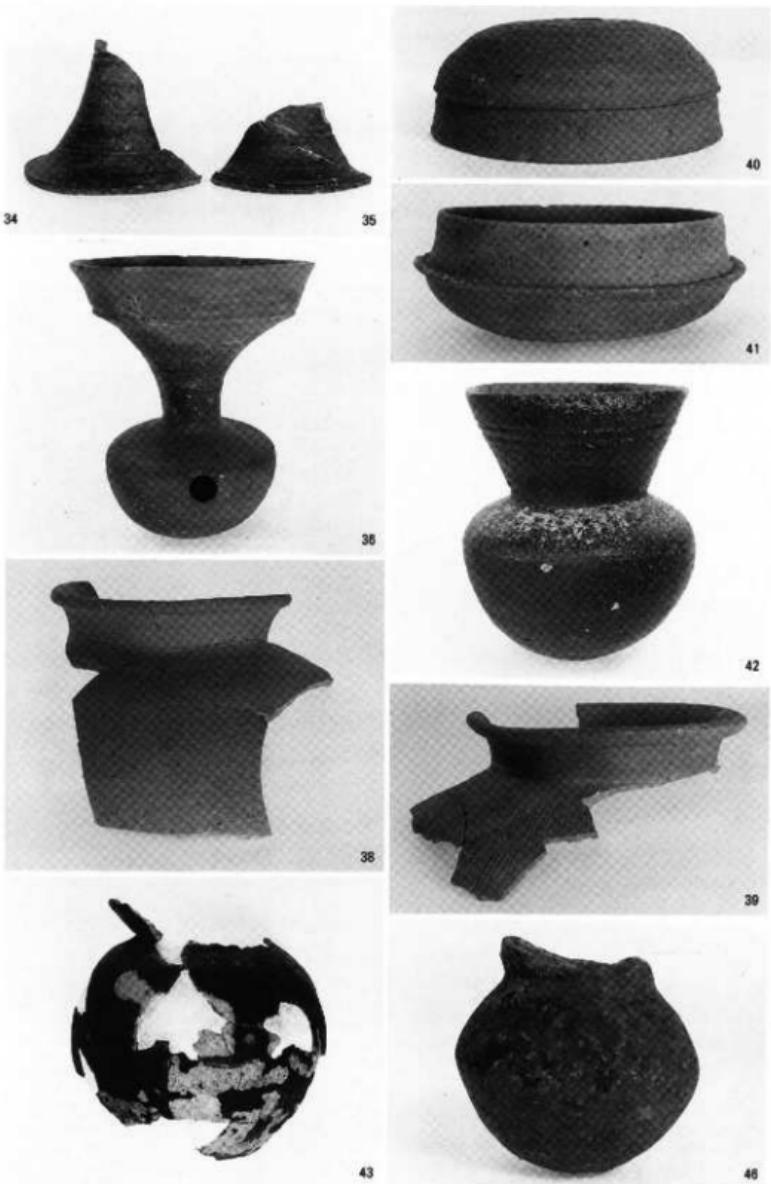
2区 第6次面 (東から)



2 : 1区 第3層  
13 : 3区 SP3302

5 : 1区 SD1301  
14~32 : 1区 SD1401

6 • 8 : 2区 SP2301



34~39 : 1区 SD1401

40~43 : 1区 NR1501

46 : 2区 NR1501

## II 小阪合遺跡第19次調査 (K S 90-19)

## 例　　言

1. 本書は、八尾市青山町5丁目93・94で行った店舗付共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第58号 平成2年7月7日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が、辰巳 進氏から委託をうけて実施したものである。
1. 本調査は、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第19次調査である。
1. 現地調査は、当調査研究会 坪田真一を担当者として、平成2年10月16日に着手し、同年11月1日に終了した。調査面積は164m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、岡田聖一・坂下 学・濱田千年・松下哲也の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子・山内千恵子の参加を得た。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、出土遺物観察表を田島・山内が作成した。

## 本　文　目　次

第1章 調査に至る経過	23
第2章 周辺の地理的・歴史的環境	24
第3章 調査概要	25
第1節 調査方法	25
第2節 基本層序	25
第3節 検出遺構と出土遺物	26
第4章 出土遺物観察表	40
第5章 まとめ	44

## 挿 図 目 次

第1図 調査位置図 (S = 1/5000) .....	23
第2図 調査区設定図 (S = 1/100) .....	25
第3図 基本層序 (S = 1/40) .....	26
第4図 1区 第1・2次面遺構平面図 (S = 1/200) .....	27
第5図 1区 SK101東壁断面図 (S = 1/40) .....	27
第6図 第3・4次面遺構平面図 (S = 1/200) .....	29
第7図 1区 土器棺墓301平・断面図 (S = 1/10) .....	30
第8図 1区 土器棺墓301出土遺物 (S = 1/6) .....	31
第9図 2区 SK301東壁断面図 (S = 1/20) .....	31
第10図 1・2区出土遺物 (S = 1/4) .....	32
第11図 2区 SK301出土遺物 (S = 1/4) .....	33
第12図 2区 NR301出土遺物 (S = 1/4) .....	33
第13図 2区 調査区南壁断面図 (S = 1/40) .....	34
第14図 1区 竪穴住居群平・断面図 (S = 1/50) .....	35
第15図 1区 SI401出土遺物 (S = 1/6) .....	36
第16図 1区 SK401平・断面図 (S = 1/40) .....	37
第17図 2区 NR401出土遺物① (S = 1/4) .....	38
第18図 2区 NR401出土遺物② (S = 1/4) .....	38

## 表 目 次

表1 1区 第1次面溝 (SD 101~103) 法量表 .....	27
表2 1区 第2次面溝 (SD 201~208) 法量表 .....	28
表3 1区 SI401内ピット (P-1~P-10) 法量表 .....	36
表4 1区 ピット (SP401~407) 法量表 .....	37

## 図版目次

- 図版一 1区 第1・2次面全景（北から）  
1区 第3次面全景（北から）
- 図版二 1区 土器棺墓301（北から）  
1区 土器棺墓301（北から）
- 図版三 2区 S K301東壁（西から）  
2区 第3次面全景（北から）
- 図版四 2区 調査区南壁（北から）  
1区 第4次面全景（北から）
- 図版五 1区 S I 401・402（南から）  
1区 S I 401内鉢・台石（42）検出状況（東から）
- 図版六 1区 S I 402畦南壁（北から）  
1区 S D 401西壁（東から）
- 図版七 山土遺物
- 図版八 出上遺物

## 第1章 調査に至る経過

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では小阪合町1・2丁目、南小阪合町1・2・4丁目、青山町1~5丁目、若草町、山本町南7・8丁目がその範囲にあたる。

当遺跡発見の契機は、昭和30年の大阪府営住宅供給公社建設工事中に古墳時代の遺物が多量に出土したことに遡る。そして発掘調査は昭和57年以降、当調査研究会による16次~12,000m<sup>2</sup>にわたる土地区画整理事業に伴う調査をはじめ、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期~近世にわた



第1図 調査地位置図 (S = 1/5000)

る遺跡であることが確認されている。

このような情勢下、平成2年、辰巳 進氏より、八尾市青山町5丁目における店舗付共同住宅建設の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。これを受けた同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあることから発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、工事により構造の破壊が予想される部分を対象に、発掘調査を実施することが両者で合意された。発掘調査にあたっては、事業者・同文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することになった。

なお今回の調査区の周辺の道路部分は昭和58・59年度に当調査研究会により調査が行われており（第3・4次調査）、弥生時代後期の落ち込み、古墳時代前期の溝・井戸・土坑・自然河川、平安時代の自然河川、鎌倉時代の溝・井戸・土坑等が検出されている。

## 第2章 周辺の地理的・歴史的環境

当遺跡は地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上の北西で東郷遺跡、西で成法寺遺跡、南西で矢作遺跡、南で中田遺跡と接している。

ここでは遺跡範囲の中央部にあたる前述の上地区画整理事業に伴う調査の成果を中心に、当遺跡の概要を簡単にまとめる。

まず弥生時代前期では包含溝・自然河川から土器が出土しているが、遺構は検出されていない。当遺跡で生活の痕跡が確認できるのは弥生時代中期からであり、北西部に集落の中心があると考えられている。弥生時代後期では中央部から南東部で集落遺構が検出されている。古墳時代前期はほぼ全域で遺構・遺物が検出され、特に西部・南東部が中心となり、庄内式期から布留式期になると集落域が拡大されることが確認されている。古墳時代中期では南部で居住域が確認されている。北東部は墓域になると考えられ、埴輪円筒棺の他、各地で埴輪が検出されている。古墳時代後期の遺構は北部と南部で検出されている。奈良時代の集落遺構は西部で検出されている。平安時代の集落遺構は北部と南部で確認されており、南部は中田遺跡に拡がるものと考えられる。鎌倉時代から室町時代はほぼ全域で水田遺構が検出され、居住域は北西部と南部で確認されている。

参考文献 (財)八尾市文化財調査研究会「小阪丘遺跡」1990 当調査研究会報告26

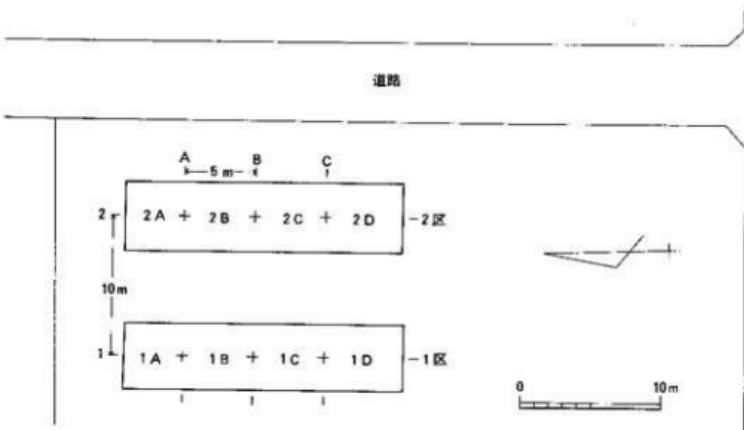
## 第3章 調査概要

### 第1節 調査方法

今回の調査は建物基礎部分を対象としているため、調査区は南北に細長いトレンチ2本で、西トレンチを1区、東トレンチを2区として1区から調査を実施した。

調査は1区で地表下約1.2m・2区で約1.5mを機械掘削し、以下を人力掘削により実施した。

地区割は調査区に合わせて任意の方眼ラインを設定し、実測、遺物取り上げの基準とした。なおこの方眼の南北ラインは磁北から東に約2度振っている。

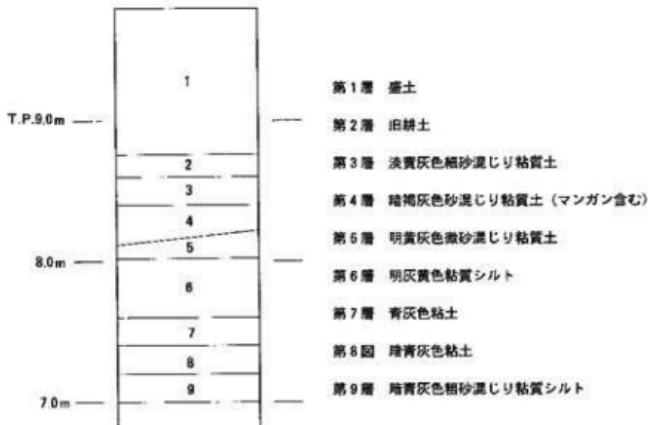


第2図 調査区設定図 ( $S = 1/400$ )

### 第2節 基本層序

1区の上層を基本層序とした。

第1層が盛土、第2層が旧耕土である。旧耕土直下の第3層上面が第1次面で、標高約8.6mを測る。第3層は古墳時代前期から奈良時代の上器を少量含んでいる。第4層上面が第2次面で、標高約8.4mを測る。第4層は古墳時代前期から後期の土器を含んでいる。第5層上面が第3次面で、標高約8.2mを測り、北に向かってやや高くなっている。第5層は古墳時代前期の土器を含んでいる。第6層上面が第4次面で、標高約8.0mを測る。第6層以下は1区南部で確認したが、粘土～粘質シルトが厚く堆積している。



第3図 基本層序 (S = 1/40)

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### ・第1次面

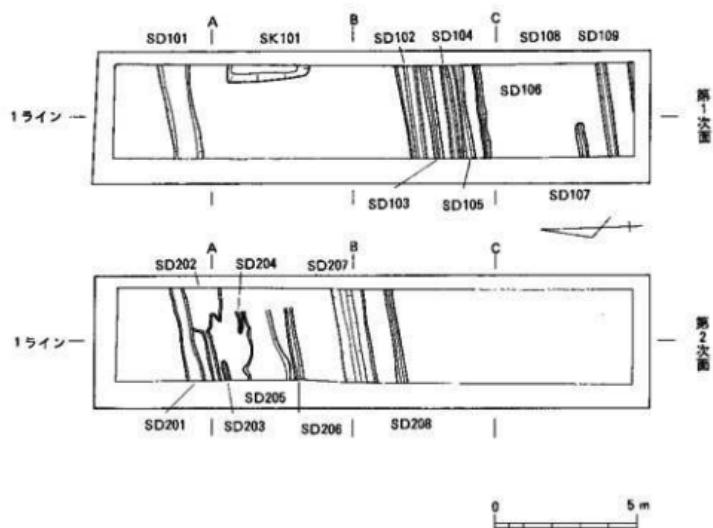
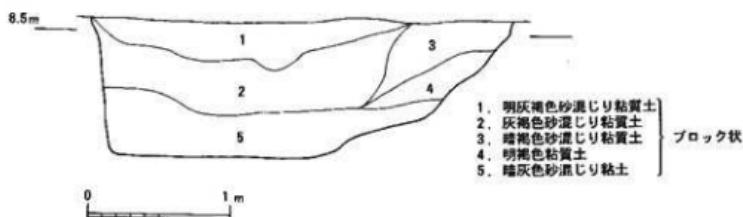
1区で上坑1基（SK101）・溝9条（SD101～109）を検出した。

#### SK101

1B区に位置し、東部は調査区外に至るため掘形の西部のみの検出である。検出部分の平面形は長方形を呈し、西辺は一辺約2.9m、深さは約1.0mを測る。東断面をみると掘方は北側が垂直に近く、南側はなだらかで、底部は平坦である。埋土は上層が灰褐色系の砂混じり粘質土、下層が暗灰色の砂混じり粘土で、全体にブロック状を呈しており、一気に埋められた状況である。これらの状況から当遺構は井戸あるいは水溜め等の機能を考えられる。古墳時代前期から近世の遺物が出上している。

#### SD101～109

東西方向に平行して伸びる溝で、方位は西から南に約9度振っている。SD101・102が幅が広く、他はほぼ同一規模である。SD107～109は上層の旧耕土が埋土となっており、時期が最も新しいといえる。これらの溝は近世の耕作に伴うものと考えられる。古墳時代前期から近世の遺物が出上している。法量等は表1にまとめた。

第4図 1区 第1・2次面透構平面図 ( $S = 1/200$ )第5図 1区 SK101東壁断面図 ( $S = 1/40$ )

S	D	101	102	103	104	105	106	107	108	109
検出長		3.35	3.35	3.35	3.35	3.35	3.35	1.2	3.35	1.8 (m)
幅		94	64	64	33	26	26	32	36	— (cm)
深さ		16	11	11	6	6	7	5	7	3 (cm)
間隔		720	26	30	15	37	304	70	75	(cm)
埋土系		①	②	②	②	②	②	③	③	③

※①灰褐色砂混じり粘質土 ②灰青褐色砂混じり砂質土 ③暗青灰色砂混じり粘質土

表1 1区 第1次面溝 (SD101~109) 法量表

・第2次面

1区で溝8条(S D 201~208)を検出した。1区北部ではこの上面で灰色粗砂の広がりがみられた。一時的な冠水の痕跡である可能性がある。

S D 201~208

東西方向に平行して伸びる溝で、方位は第1次面の溝と同一であり、あまり時期差は無いと思われる。第1次面の溝は第2次面の溝の上部には掘られていないが、溝の付け替えの際に意図されたとも考えられる。法量等は表2にまとめた。

S D	201	202	203	204	205	206	207	208	
検出長	3.4	3.4	0.74	0.8	2.5	2.6	3.35	3.35	(m)
幅	50	25~140	20	16	85~165	30	105	30	(cm)
深さ	16	11	13	6	6	7	5	7	(cm)
間隔	25	11	60	4	10~55	148	80		(cm)
埋土層	①	①	①	①	①	②	③	①	

※①灰青色粘土混じり粗砂 ②淡灰褐色砂混じり粘質土  
③上から褐灰青色砂混じり粘質土・褐灰色細砂混じり粘質土・褐灰色粘質土

表2 1区 第2次面溝(S D 201~208) 法量表

・第3次面

1区で土器棺墓1基(土器棺墓301)・溝2条(S D 301・302)・ピット1個(S P 301)、1・2区で河川1条(N R 301)・2区で上坑1基(S K 301)を検出した。

土器棺墓301

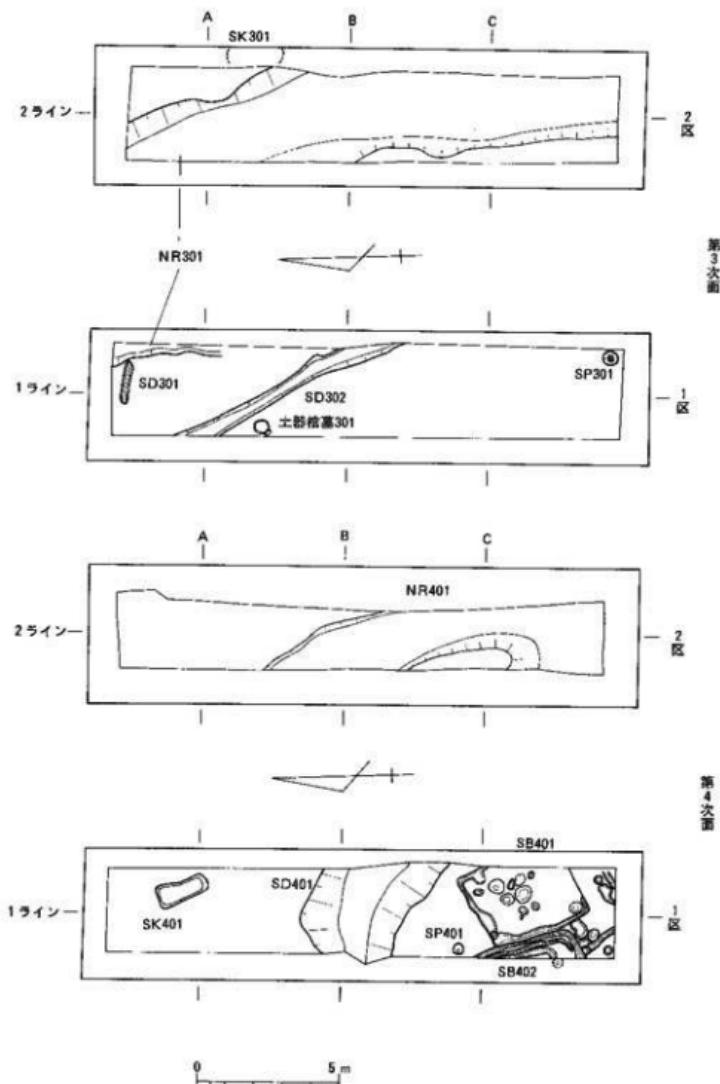
1B区で検出され、検出面の標高は約8.2mを測る。土体部は古墳系の形態とされる大型の複合U縁壺(2)で、U縁部を西に向けた横位の状態で検出した。主軸の方向は西から南に約19.5度振っている。上器棺は上部が後世に削平されており、破片は内部の堆積土上に落ち込み、また周辺に飛散しているものもある。土器棺内の堆積土は暗灰褐色砂混じり粘質土である。また別體の二重口縁壺の口頭部～肩部(1)がU縁部付近と内部から出土しており、これを棺蓋としていた可能性がある。

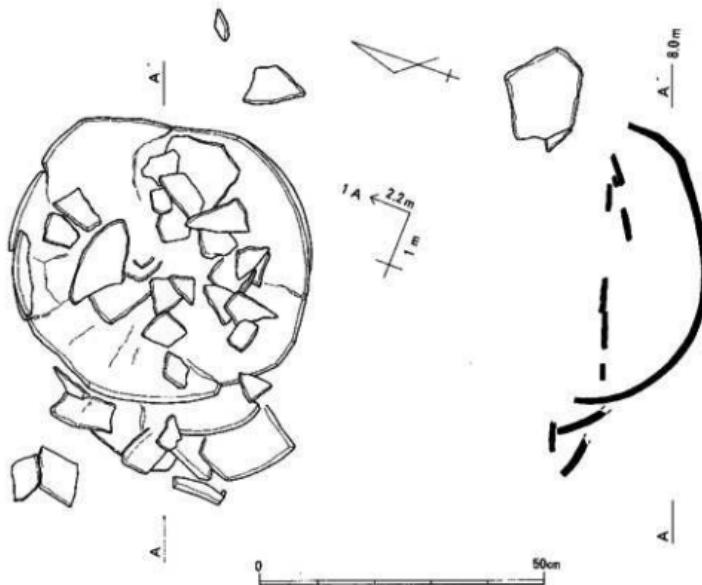
掘形は検出されなかつたが、出土状況等から土器棺墓であると判断した。なお、副葬品・人骨等は認められなかつた。

(2)はU径24.2cm・器高64.3cmを測り、生駒西麓産と思われる胎土のもので、色調は茶褐色を呈する。口頭部を補修しており、欠落した破片を縫等で結束するための穿孔が五か所に認められる。土器の時期は布留式期古相に比定される。

S D 301

1A区で検出された東西方向の溝で、検出面の標高は約8.1mを測る。規模は検出長約1.5m・幅約26cm・深さ約10cmを測り、断面V字状で、埋土は灰褐色細砂混じり粘質シルトである。遺物

第6図 第3・4次面遺構平面図 ( $S = 1/200$ )



第7図 1区 土器檜墓301 平・断面図 ( $S = 1/10$ )

は出土していない。

#### S D302

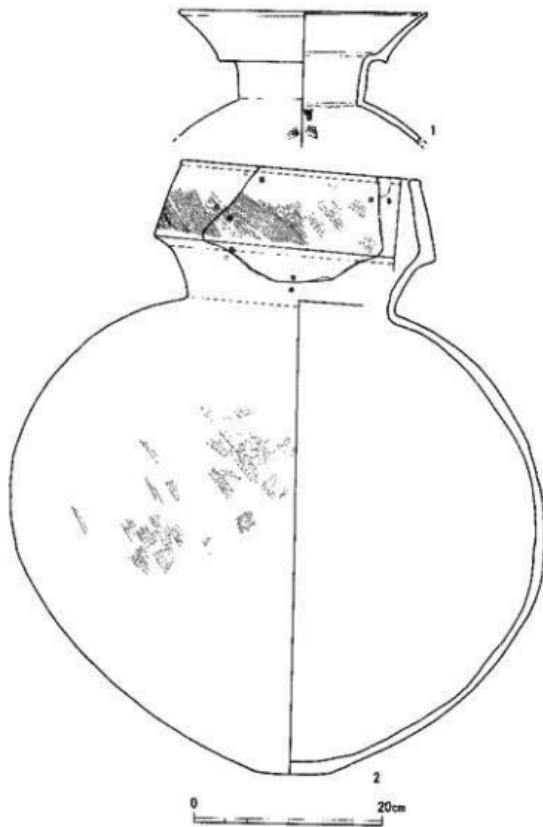
1 A～1 C区で検出された北西～南東の方向に直線的に伸びる溝で、両端は調査区外に続いている。検出面の標高は8.1m～8.2mを測り、方位は北から西に約30度振っている。規模は検出長約8.8m・幅40cm～63cm・深さ約15cmを測り、断面半円状で埋土は暗灰褐色微砂混じり粘質土の単層である。遺物は古墳時代前期の上器片が出上している。

#### S P301

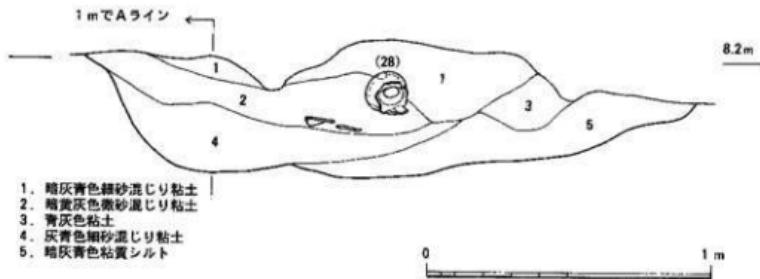
1 D区の南東角で検出したピットで、検出面の標高は8.13mを測る。平面円形で、規模は直径約50cm・深さ21cm、ほぼ中央部に位置する柱痕部の直径約20cmを測る。掘方は垂直に近いもので、柱痕部は断面逆三角形に近く、掘方の底部に至っている。埋土は柱痕部が灰褐色細砂混じり粘土、掘方部が灰褐色砂混じり粘質土である。遺物は出土していない。

#### S K301

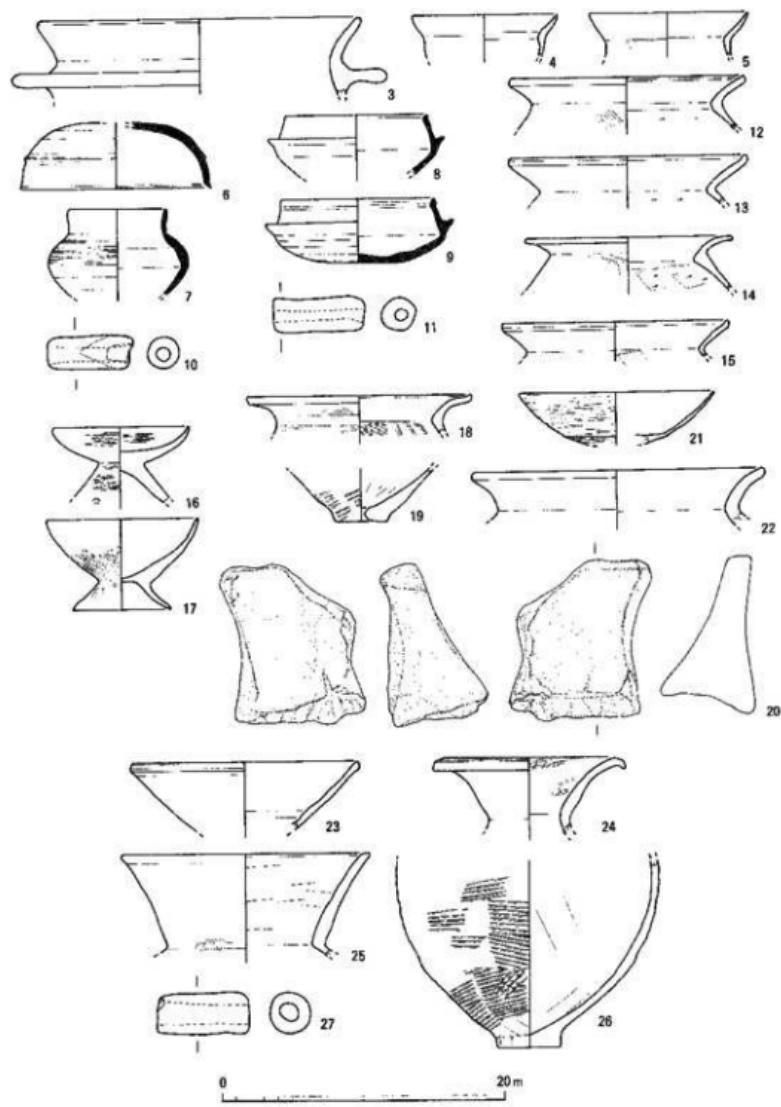
平面的には捉えられなかったが、2 B区の調査区東壁内で検出した。断面の規模は検出長約2.2m、深さ約50cmを測り、上部はN R301に削平されている。埋土は青灰色～黄灰色系の粘土～粘質土である。上層からほぼ完形の二重口縁壺(28)が出上している。



第8図 1区 土器塚墓301 出土遺物 (S = 1 / 6)



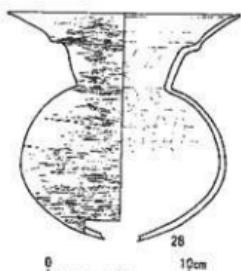
第9図 2区 SK301東壁断面図 (S = 1 / 20)



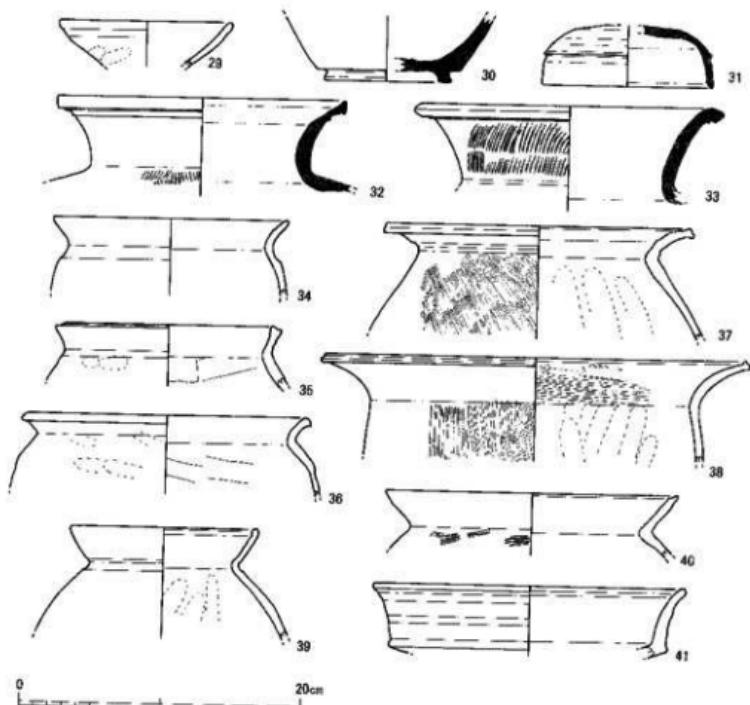
第10図 1・2区出土遺物 (S=1/4)

## NR301

1区北部で西肩、2区北部で東肩を検出した。1区では南部がSK101によって削平されている。検出面の標高は西肩が約8.2m、東肩が約8.25mである。流路方向はほぼ南北で、方位は北から西に10~20度振っている。規模は幅約9.0m・深さ約0.7mを測り、河床のレベルをみると北端で標高約8.0m、南端で約7.5mとなり、南部がやや低くなっている。埋土は上層が灰褐色系の粘質土・粘土・細砂・粗砂の互層で、下層が淡灰黄色系の粗砂・細砂であり、青灰色系の粘土が河床となっている。



第11図 2区 SK301出土遺物  
(S=1/4)

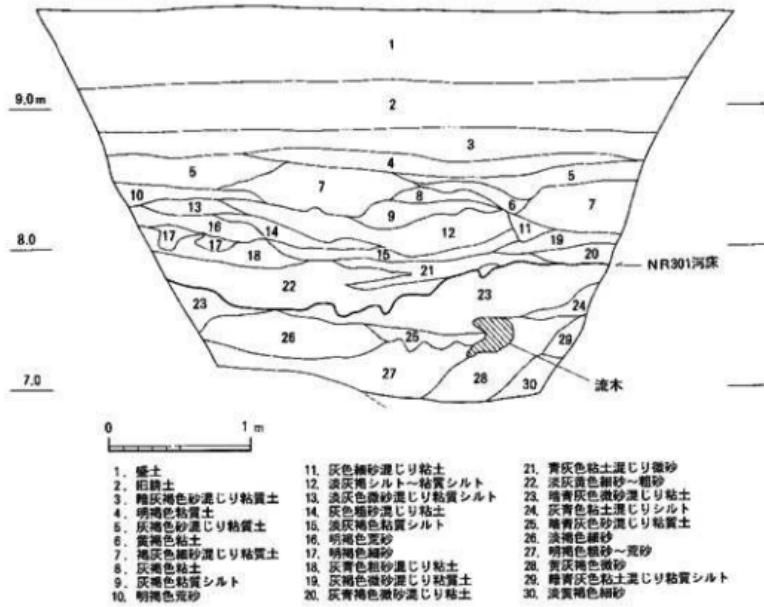


第12図 2区 NR301出土遺物 (S=1/4)

占墳時代前期～平安時代の遺物が出土している。

・第4次面

1区で竪穴住居2棟(S I 401・402)・土坑1基(S K401)・溝4条(S D 401~404)・ピット7個(S P401~407)、2区で河川1条(N R401)を検出した。



第13図 2区 調査区南壁断面図 (S = 1/40)

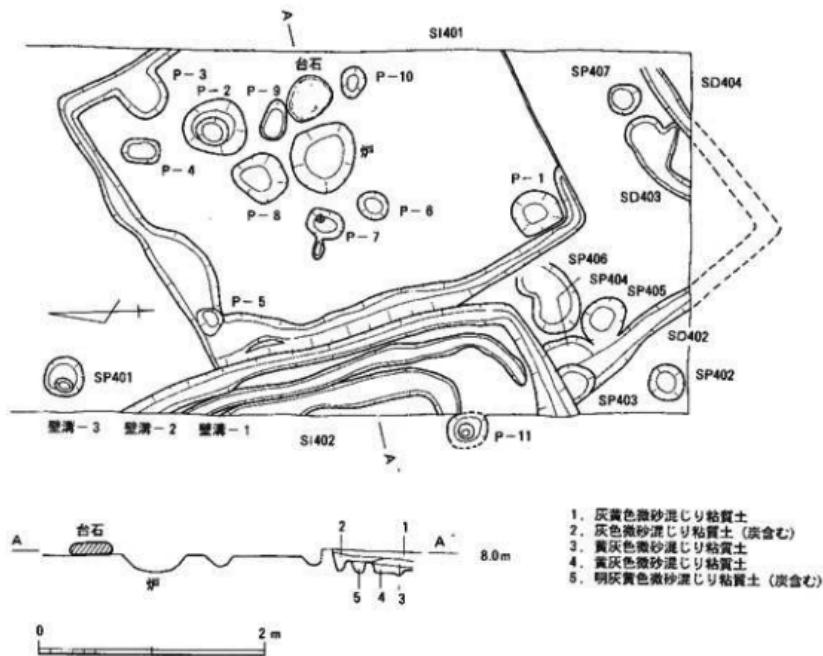
竪穴住居はいずれも方形のもので、1区南部で切り合った状況で検出した。この切り合い関係からS I 402が新しく構築されていることが確認できた。

S I 401

南北約3.6m・東西約3.3mのやや長方形を呈するもので、北西角部はS I 402に削平され、南東角部は調査区外になる。南北軸は北から西に約31度振っている。

検出面がほぼ抹面にあたるため壁はほとんど遺存しておらず、壁高は南部で最高約5cmを測るのみである。床面の標高は約7.95mを測る。壁溝は1条で、南辺では明確に検出されなかつたが今周するものと考えられる。規模は幅15cm~45cm、深さ約6cmを測る。なお西辺の北部がやや内側に屈曲しており、掘り直しが行われている可能性がある。

ピットは床面・壁溝内から5個検出したが(P-1~P-5)、主柱穴と考えられる深さ30



第14図 1区 壑穴住居群平・断面図 (S = 1/50)

cm～40cmを測るものは2個（P-1・P-2）である。

中央部に平面ほぼ円形の炉を有している。規模は直径約60cm・深さ約15cmを測り、断面皿状を呈する。埋土は上層が灰褐色シルト混じり粘質土上、下層は底部から約5cmの炭層と考えられる暗灰色粘質シルトが堆積し、底面には全面に炭が付着している。また東側の壁が一部火を受けて亦変色している。炉の周囲の西・北・東には5個のピット（P-6～P-10）が巡っている。なお炉の東側のP-9とP-10の間には作業台と考えられる長辺約42cm、短辺約33cm、厚さ約9cmの扁平な台石（42）が遺存していた。炉の周辺には層厚1cm～3cmの固く締まった赤褐色砂混じり粘質土がみられ、貼床と考えられるが、炉は貼床上面から、周囲のピットは貼床下のベース面から掘り込まれ、台石はベース面に置かれている。ベース面には炭の付着が認められることから、炉の掘り直しの際に貼床が行われたとも考えられる。

出土遺物は少量で、図化できたものは高杯の杯部（21）のみである。

ピットの法量等は表3にまとめた。

平面形	長辺×短辺×深さ(cm)	埋土(上から)	
P-1	不整円形	42×37×30	①②③④
P-2	不整円形	56×50×42	⑤⑥⑦⑧
P-3	不整円形	41×35×7	①
P-4	楕円形	34×22×17	①
P-5	不整円形	26×25×38	①
P-6	円形	28×26×6	⑦
P-7	楕円形	34×26×8	⑦
P-8	不整円形	43×43×12	⑦
P-9	楕円形	37×27×10	⑦
P-10	楕円形	28×23×2	⑦

表3 1区 S I 401内ビット(P-1~P-10)法量表

### S I 402

東側の一部の検出で明確な規模は不明であるが、南北辺は3.6m以上を測る。南北軸は北から西に約14度振っており、床面の標高は7.8m~7.9m、壁高は約20cmを測る。壁溝は3重に巡っており、断面の観察によると一番外側の壁溝3が最も新しく掘られており、拡張が行われていることが確認された。壁溝は幅12cm~25cm・深さ3cm~10cmを測る。

ビットは1個検出した(P-11)。平面形は直径約36cmのほぼ円形で、深さ約36cmを測り、掘方はほぼ垂直を呈し、埋土は灰青色粘質土である。

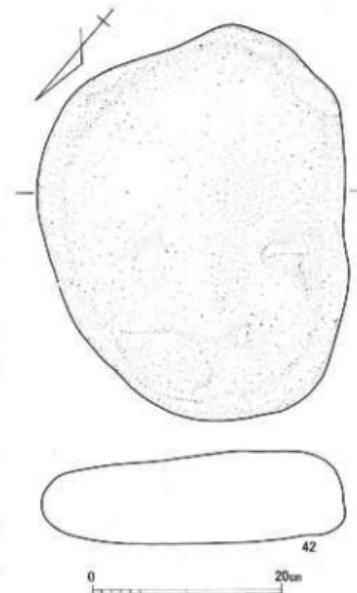
出土遺物は細片のみで、図化できるものは無かった。

これらの堅穴住居の時期は、その上面を覆う第5層出土土器(16~19)から庄内式期と考えられる。

### S K401

1A区で検出した土坑で、平面形は長辺約1.8m、短辺0.65m~0.85mの長方形を呈し、深さ約12cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は灰褐色細砂混じり粘質土の単層で、底部の全面には厚約1cmの炭層が堆積している。

出土遺物は細片のみで、図化できるものは無かった。



第15図 1区 S I 401出土物 (S = 1/6)

## SD401

1B～1C区で検出した東西方向に伸びるやや弧状を呈する溝で、規模は検出長約3.2m、幅2.6m～4.3m、深さ約60cmを測る。断面圓形で、埋土は上層が灰青色系のシルト～細砂混じり粘土、下層が黒灰色粘質シルトである。

出土遺物は細片のみで、図化できるものは無かった。

## SD402～404

1区南端、S I 401・402の南側に位置する溝で、溝の方向はS I 401の壁溝とほぼ平行しており、堅穴住居の吹清である可能性が高い。規模は幅約20cm・深さ5cm～10cmを測る。SD402の北部はS I 402に削平されている。遺物は出土していない。

## SP401～407

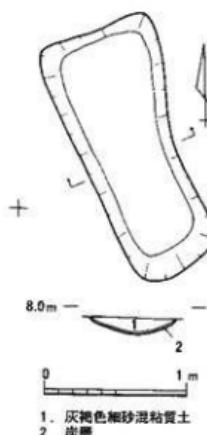
いずれも1区南部の堅穴住居群周辺に位置する。このうちSP402～407はSD402～404を壁溝とする堅穴住居の柱穴となるものと考えられる。SP406は2個のビットが連続していると考えられる。法量等は表4にまとめた。

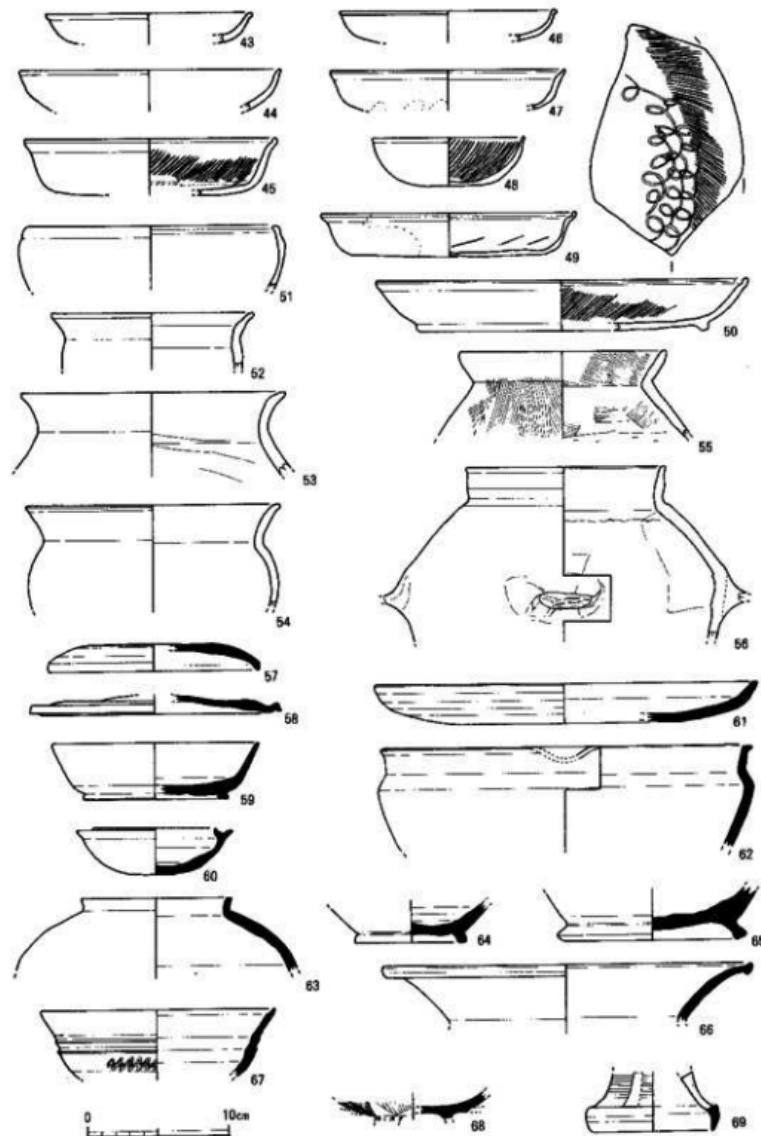
	平面形	長辺×短辺×深さ(cm)	埋土(上から)
SP401	円形	3.6×3.6×1.5	①
SP402	円形	3.3×3.2×1.5	②③ (層名)
SP403	不整円形	3.4×2.6×1.8	④⑤ ①灰褐色砂混じり粘質土
SP404	不整円形	3.9×3.0×1.4	④ ②黄灰色粘質土
SP405	不整円形	4.5×3.7×1.2	④⑤ ③灰褐色粘質土
SP406	不整円形	7.1×3.6×1.3	④ ④暗灰黄色細砂混じり粘質土
SP407	円形	2.9×2.8×8	④ ⑤暗灰黄色微砂混じり粘質土

表4 1区 ビット(S P401～407) 法量表

## NR401

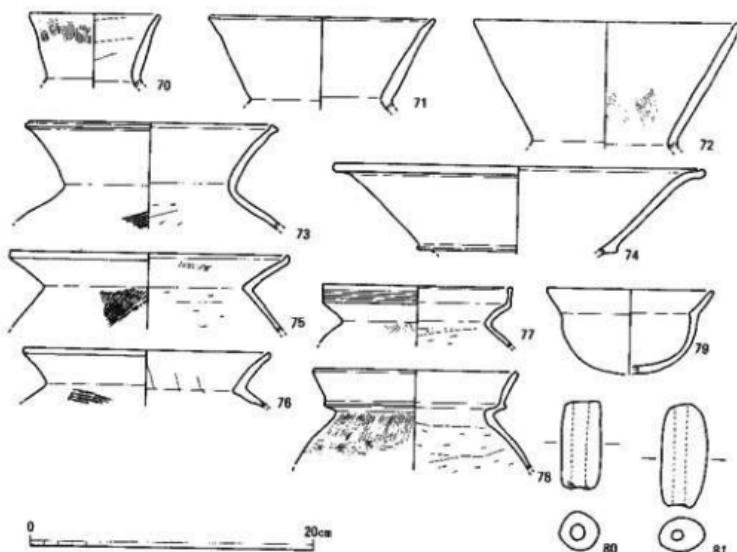
2区全域を含む河川で、NR301に削平されているため肩は検出できなかった。堆積状況等から流路方向は南北方向で、方位は北から西に約30度振っている。埋土は上層が暗青灰色系の微砂混じり粘土、下層が灰黄褐色系の細砂・粗砂である。河床は、北半部では層厚1.0m以上を測る暗灰青色系粘土～粘質シルトが平坦面を形成しており、これを河床とした。標高は約8.0mを測る。北端ではNR301と河床を共にしている。また中部やや南ではこの粘土層の隆起が認められた。中部から南部はこの粘土層を切り込むように下層の砂が厚く堆積しており、湧水

第16図 1区 SK401平・断面図  
(S=1/400)



第17図 2区 NR401出土遺物① (S=1/4)

も激しく、危険防止のため標高約6.7mまで掘削を断念したため、河床は確認できなかった。下層の砂層に古墳時代前期～奈良時代の遺物が多量に含まれている。



第18図 2区 NR 401出土遺物② (S=1/4)

## 第4章 出土遺物観察表

遺物番号 区分	器種	出土地点	深度(cm) (復元値)	口径 高さ	色調 外 内	胎土	焼成	技法・形態等の特徴		参考
								技術	形態	
1 七	土師器 蓋	土器標本 301		(26.2)	赤褐色 茶褐色	やや粗2.0mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部外面ヨコナギ、内面ナゲ。肩部ハケ。 反転	%	
2 七	土師器 蓋	土器標本 301		24.2 64.3 7.0	茶褐色	やや粗	良好	口縁部外面ハケ、内面ヨコナギ。底部外周ヨコ ナギ、内面ナゲ。底部外周ハケ、内面ナゲ。 口部形に補修痕あり。 体部最大径 54.0	%	
3	土師器 羽釜	1C区 第3層		(22.8) (26.8)	茶褐色	やや粗2.0mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部ナゲ。内面羽仔目。	%	
4	土師器 鉢	1D区 第3層		(10.5)	淡赤褐色	約0.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	口縁部外面ヨコナギ。体部外周ヘラケズリ。	反転	
5	土師器 壺	1C区 第3層		(11.3)	淡赤灰色	約1.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	口縁部ナゲ。口縁部～胴部外周ハケ残る。	%	
6 七	須恵器 杯蓋	1B区 第4層		(13.6)	淡灰褐色	約3.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナゲ。天井部外周 %回転ヘラケズリ。	極小 反転	
7	須恵器 広口切端 壺	1C区 第4層		(8.8) 最大径 (10.0)	淡灰青色	約1.5mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナゲ。底部外周上位回転カキ目、下位回転 ヘラケズリ。	反転	
8	須恵器 杯身	1C区 受部付 第4層		(10.0) (12.5)	灰色	約1.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナゲ。底部外周回転ヘラケズリ。	%	
9 七	須恵器 杯身	1C区 受部付 第4層		(10.8) 4.6 (13.3)	灰褐色	約1.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナゲ。底部外周回転ヘラケズリ。	%	
10	土師 壺	1A区 第4層		8.2 2.8	淡赤褐色	やや粗2.0mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	ナゲ。	%	
11	土師 壺	1B区 第4層		6.4 2.5	灰褐色	やや粗1.5mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	ナゲ。	%	
12	土師器 壺	1B区 第4層		(16.6)	暗茶褐色	やや粗1.5mm 以下の砂粒を 少量含む。	良好	口縁部外面ヨコナギ、内面ナゲ。肩部ナゲ。	%	
13	土師器 壺	1B区 第4層		(16.8)	暗茶褐色	やや粗1.5mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部ヨコナギ。肩部ナゲ、内面ヘラケズ リ。	%	
14	土師器 壺	1B区 第4層		(14.6)	暗茶褐色	やや粗2.0mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部外面ヨコナギ、内面ナゲ。肩部外周ハケ、 内面ヘラケズリ。	%	
15	土師器 壺	1D区 第4層		(16.1)	淡灰褐色	やや粗1.5mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部ヨコナギ。肩部外周ナゲ、内面ヘラケズ リ。	%	
16	土師器 壺	1C区 第5層		(9.7)	茶褐色	約1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	底部ナゲとガキ、底部外周ヘラミガキ、内面ナ ゲ。脚部3方向に円孔。	%	
17 七	骨生 台付鉢	1D区 第5層		(10.8) 6.8 (7.0)	淡赤灰色	やや粗3.5mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	底部外周下位ヘラミガキ。台部外周ハケ、内面 ナゲ。		
18	土師器 壺	1B区 第5層		(16.0)	暗褐色	やや粗2.0mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部ヨコナギ。肩部ハケ。	%	
19 七	骨生 壺	1B区 第5層		3.4	茶灰色	やや粗1.5mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	外周タタキ、内面ハケ。底部穿孔。	表面泥存	
20	磁石	1B区 第5層		11.3 7.0	灰白色					
21	土師器 高杯	1D区 S 1401		(14.0)	淡赤褐色	約1.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	杯部外周ヘラミガキ。	%	
22	陶器 壺	1D区 第3層		(17.0)	暗緑色 断面一灰 黄色		良好	回転ナゲ。	%	

遺物番号 回収番号	器種	出土地点	法量(cm) (底×横)	口径 底径	色調 内 外	材 土	施成	技法・形態等の特徴	保存 状況
23	白磁 碗	2 A ~ D 区 第1層	(16.0)	乳白色	底0.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナデ。底部外面下平滑部。	極小	
24	弥生 壺	2 A 区 第1層	(12.1)	茶灰色	やや粗2.5mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁周囲ヨコナデ。頸部外面ナデ、内面ヘラミ ガキ。	反転	
25	弥生 壺	2 A 区 第1層	(16.8)	茶褐色	やや粗2.5mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁周囲ヨコナデ。腹部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	1/6	
26	弥生 壺	2 A 区 第1層	4.2	暗茶褐色	やや粗5.0mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	外腹タキ、内面ナデ。	1/6	
27	土師器 壺	2 A 区 第1層	6.7 3.6	茶灰色	やや粗4.0mm 以上の砂粒を 多量含む。	良好	ナデ。	光沢	
28	土師器 壺	2 B 区 SK301	(16.5)	茶褐色	底1.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	口縁外部ヘラミガキ、内面ヨコナデ。颈部外面 ヘラミガキ、内面ハケ、全体部外面ヘラミガキ。 内面ナデ、底部穿孔。底部外面凹度。	口縫 1/6	
29	土師器 壺	2 A 区 NR301	(12.2)	淡茶褐色	底1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	口縁周囲ヨコナデ。体部外面押さえ、内面ナデ。	1/6	
30	須恵器 壺	2 A 区 高台高 NR301	(8.6) 0.8	灰青色	底0.5mm以 上の砂粒を多量 含む。	良好	回転ナデ。	1/6	
31	須恵器 壺	2 D 区 NN301	(12.2)	淡灰青色	底1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナデ。天井部外面が回転ヘラケズリ。	1/6	
32	須恵器 壺	2 B + C 区 NR301	(20.6)	淡灰青色	底1.0mm以 上の砂粒を微量 含む。	良好	上縁部回転ナデ。腹部外縁タキ、内面ナデ。	1/6	
33	須恵器 壺	2 B + C 区 NR301	(20.6)	淡灰青色	底1.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナデ。外腹タキ残る。	1/6	
34	土師器 壺	2 B + C 区 NR301	(16.6)	暗茶褐色	底1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	口縁周囲ヨコナデ、内面ナデ。腹部ナデ。	1/6	
35	土師器 壺	2 B + C 区 NR301	(14.8)	茶褐色	底1.5mm以 上の砂粒を少量 含む。	良好	口縁部ヨコナデ。腹部外縁押さえ、内面ナデ。	1/6	
36	土師器 壺	2 B + C 区 NR301	(19.0)	茶褐色	底1.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	口縁部ヨコナデ。腹部外縁押さえ、内面ナデ。 内面端付繩。	1/6	
37	土師器 壺	2 B + C 区 NR301	(21.6)	淡灰褐色	底2.0mm以 上の砂粒を多量 含む。	良好	口縁周囲ヨコナデ。腹部外面ハケ、内面ナデ。	1/6	
38	土師器 壺	2 B + C 区 NR301	(30.0)	淡灰褐色	底0.5mm以 下的砂粒を微量 含む。	良好	口縁部ヨコナデ、内面ハケ。輪郭的面ハケ、 内面ナデ。	1/6	
39	土師器 壺	2 B + C 区 NR301	(13.3)	淡赤褐色	やや粗2.5mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	ナデ。	1/6	
40	土師器 壺	2 D 区 NR301	(20.8)	淡灰青色	やや粗1.0mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部ナデ。腹部外面ハケ、内面ナデ。	1/6	
41	土師器 壺	2 B + C 区 NR301	(22.1)	淡茶褐色	やや粗1.5mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	ヨコナデ。	1/6	
42	台石	1 D 区 S I 401 厚 S	42.1 32.6 9.6	灰色		砂質。		反転	
43	土師器 壺	2 C + D 区 NR401	(14.8)	淡茶褐色	底1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナデ。	1/6	
44	土師器 壺	2 C + D 区 NR401	(18.5)	淡茶褐色	底0.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナデ。	1/6	
45	土師器 壺	2 C + D 区 NR401	(17.9)	淡灰褐色	底0.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナデ。内面放射状暗文。	1/6	

岩物番号 貯蔵番号	器種	出土地点 (復元値)	口径 (復元値)	色調 外 内	胎土	焼成 法	特徴等の特徴	残 存 状 態	参考
46	土師器 皿	2 C + D 区 N R 401	(15.1)	淡赤褐色	密1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナダ。底面外側押え。	%	反転
47	土師器 皿	2 A + B 区 N R 401	(16.8)	淡赤褐色	密1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナダ。底面外側押え。	%	反転
48	土師器 杯	2 C + D 区 N R 401	(10.8) 3.4	茶褐色	密1.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナダ。底面外側ナデ。内面放射状壇文。	%	
49	土師器 杯	2 A + B 区 N R 401	(18.2) 3.1	淡赤褐色	密1.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナダ。底面外側ナデ。内面放射状壇文。外 面墨塗。	%	反転
50	土師器 皿	2 A + B 区 N R 401 高台	(26.4) 3.6 (30.8)	淡灰茶色	密1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナダ。底面外側ナデ。内面口縁部放射状 文のち底部墨塗状壇文。 高台高 0.5	%	反転
51	土師器 鉢	2 C + D 区 N R 401	(17.5)	淡灰茶色	密1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	口縁部ヨコナデ。	%	極小 反転
52	土師器 甕	2 区 N R 401	(14.4)	赤褐色	密1.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	四部ナデ。	%	反転
53	土師器 甕	2 B + C 区 N R 401	(18.8)	淡灰茶色	密1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	ナデ。	%	反転
54	土師器 甕	2 C + D 区 N R 401	(18.0)	灰褐色	やや粗2.0mm 以下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部～肩部ヨコナデ。体部ナデ。	%	反転
55	土師器 甕	2 C + D 区 N R 401	(14.0)	乳茶灰色	やや粗2.0mm 以下の砂粒を多 量含む。	良好	I級部ヨコナデ、内面ハケ残る。体部ハケで、 内面下段ヘラケズリ。	%	反転
56	土師器 甕	2 C + D 区 N R 401	(13.5)	茶褐色	密1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	口縁部ヨコナデ。体部ナデ。2個一対の把手を 付す。	%	反転
57	須恵器 杯蓋	2 C + D 区 N R 401	(16.0)	淡灰褐色	密1.5mm以上 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナデ。	%	反転
58	須恵器 杯蓋	2 C + D 区 N R 401	(18.0)	淡灰青色	密0.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナデ。	%	反転
59	須恵器 杯身	2 C + D 区 N R 401 高台	(14.6) 4.0 19.2	淡灰青色	密2.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナデ。高台高 0.6	%	反転
60	須恵器 杯身	2 C + D 区 N R 401 受部	(8.6) 3.3 19.2	淡灰青色	密1.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナデ。底面外側回転ヘラケズリ。	ほぼ完形	
61	須恵器 鉢	2 C + D 区 N R 401	(26.9)	淡灰褐色	密0.5mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナデ。	%	反転
62	須恵器 鉢	2 C + D 区 N R 401	(26.6)	淡灰褐色	密1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナデ。片口。	%	反転
63	須恵器 広口盤 鉢	2 C + D 区 N R 401	(10.7)	淡灰青色	密1.0mm以下 の砂粒を微量 含む。	良好	回転ナデ。	%	反転
64	須恵器 底部	2 C + D 区 N R 401 高台	(7.8) 0.7	淡灰青色	密1.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナデ。底面外側ナデ。	%	反転
65	須恵器 底部	2 C + D 区 N R 401 底部	(12.2) 1.2	淡灰色	密1.5mm以下 の砂粒を微量 含む。		回転ナデ。内面灰かぶり。	%	反転
66	須恵器 甕	2 C + D 区 N R 401	(28.4)	淡灰色	密1.0mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナデ。	%	反転
67	須恵器 高杯	2 C + D 区 N R 401	(16.6)	淡灰青色	密1.5mm以下 の砂粒を少量 含む。	良好	回転ナデ。体部外側放状。	%	反転
68	須恵器 器台	2 C + D 区 N R 401		灰黑色	密2.0mm以下 の砂粒を多量 含む。	良好	回転ナデ。杯部内面ナデ。杯部外側下位下向き の鉛垂文。脚部外側波状文。脚部3方向に長方 形スカリ。	%	極小 反転

遺物番号 回収番号	器種	出土地点	底高(cm) (復元高)	口径	色調 外 内	胎 土	焼成	技法・形態等の特徴		残 存 状 況
								底 部	口 縁	
80 八	須恵器 高杯	2 C + D 区 N R 401	底深 (8.2)	淡灰青色	直径 0.5 cm 以下 の砂粒を微量 含む。	良好	輪転ナデ。腹部外側山盛り。脚部 3 方向に 長方形スカラ。	%		
70	土師器 盃	2 C + D 区 N R 401	(9.2)	淡青褐色	直径 0.5 cm 以 下の砂粒を微量 含む。	良好	口縁部外周ヨコナデのち上段ヘラミガキ、内面 ナデ。			反転
71	土師器 盃	2 B + C 区 N R 401	(15.8)	淡灰茶色	やや粗 2.0 mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部外周ヨコナデ、内面ナデ。	%		反転
72	土師器 盃	2 C + D 区 N R 401	(18.4)	茶褐色	やや粗 5.0 mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部外周ヨコナデのちハケ。	%		反転
73	土師器 盃	2 C + D 区 N R 401	(17.2)	茶褐色	やや粗 1.0 mm 以下の砂粒を 少量含む。	良好	口縁部外周ヨコナデ、内面ナデ。両部外周タ タキ、内面ヘラケズリ。	%		反転
74	土師器 高杯	2 C + D 区 N R 401	(26.3)	茶褐色	やや粗 1.5 mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部ナデ。	%		反転
75	土師器 盃	2 C + D 区 N R 401	(19.6)	暗茶褐色	やや粗 1.0 mm 以下の砂粒を 多量含む。	輪転	口縁部ヨコナデで、内面ヘラ根る。両部外周タ タキ、内面ヘラケズリ。外底端付近。	%		反転
76	土師器 盃	2 C + D 区 N R 401	(17.4)	茶褐色	やや粗 2.0 mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部ヘリ部ナデ。両部外周タキ成る。	%		反転
77	土師器 盃	2 C + D 区 N R 401	(13.5)	乳茶灰褐色	やや粗 1.0 mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部ヨコナデで、口縁部外面に櫛状突起。 両部外周ハケ、内面ヘラケズリ。	%		反転
78	土師器 盃	2 B + C 区 N R 401	(14.4)	乳茶灰褐色	やや粗 0.5 mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。底部外周ハケ、内面ヘラケズ リ。	%		反転
79	土師器 鉢	2 C + D 区 N R 401	(11.8)	淡灰茶色	直径 1.0 cm 以 下の砂粒を少 量含む。	良好	口縁部ヨコナデ。底体部ナデ。	%		反転
80 八	土器	2 B 区 N R 401	長さ 6.4 2.8	灰褐色	やや粗 4.0 mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	ナデ。			完形
81 八	土器	2 C + D 区 N R 401	長さ 7.5 3.2	淡灰茶色	やや粗 2.0 mm 以下の砂粒を 多量含む。	良好	ナデ。			完形

## 第5章　まとめ

今回の調査では古墳時代前期から近世の遺構・遺物を検出した。

古墳時代前期では1区で整穴住居群・上器棺墓を検出した。これらは、当遺跡内では初めて明確に確認されたものである。土器棺墓の時期は布留式期古相に比定されるもので、整穴住居群の時期はこれよりやや遅る庄内式期と考えられる。庄内式期の居住域が布留式期に墓域に移り変わったとも考えられ、1区の北西約60mの地点では方形周溝墓と推定される清群が確認されている（第3次調査）。

2区ではN R 301・401を検出した。N R 301は、昭和59年度の第4次調査における第5調査区河川2にあたるものと考えられる。N R 301はごく最近の地盤にまで影響しており、当地の区画整理以前の農水路に重なるものである。

N R 401下層には奈良時代の上器が多量に含まれており、かなり大きな破片もみられる。また少量ではあるが古墳時代中期の須恵器も含まれている。このことからこの周辺から上流付近に当時の集落の存在が予想される。

この2条の河川は大規模な河川の上層と下層として捉えることもできよう。この場合、中層となるN R 401上層にはほとんど遺物は含まれておらず、奈良時代以降集落の途絶える時期があったものと考えられる。

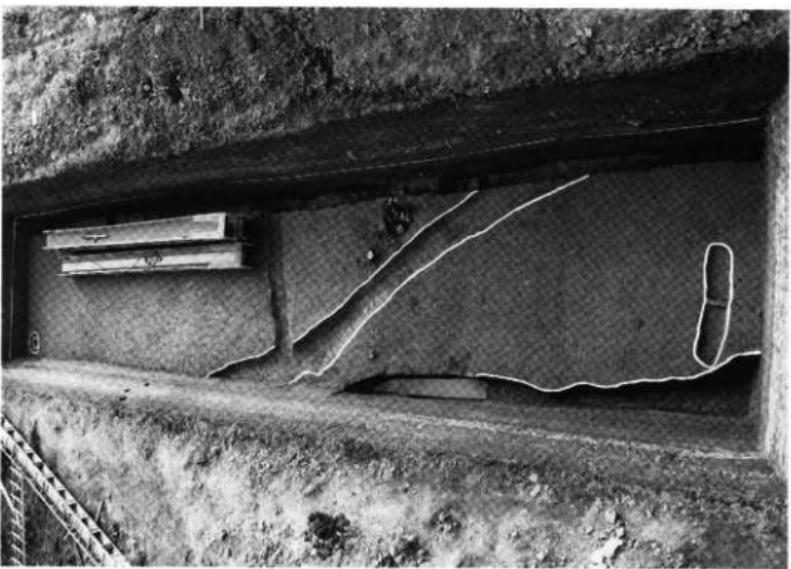
### 参考文献

（財）八尾市文化財調査研究会「小阪台遺跡（昭和59年度 第4次調査）」1988 当調査研究会報告15

# 図 版



1区 第1・2次面全景（北から）



1区 第3次面全景（北から）



1区 土器棺墓301（北から）



1区 土器棺墓301（北から）



2区 SK301東壁（西から）



2区 第3次面全景（北から）



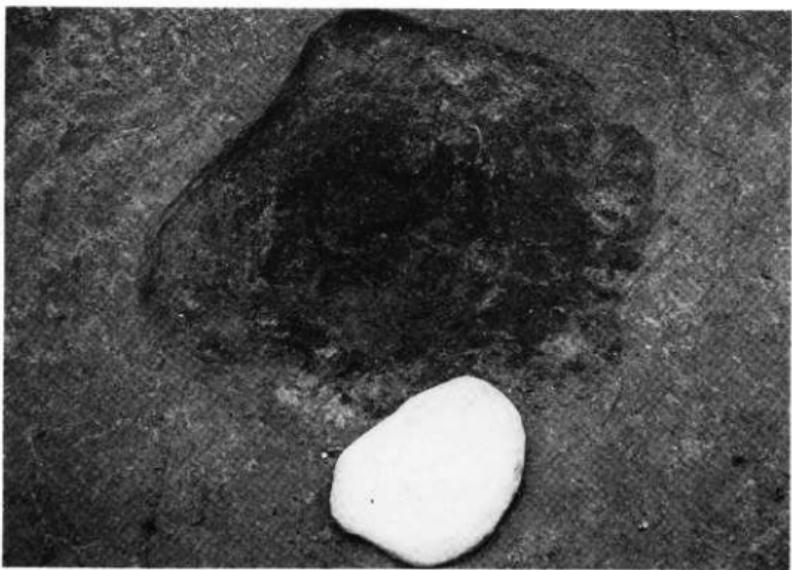
2区 調査区南壁（北から）



1区 第4次面全景（北から）



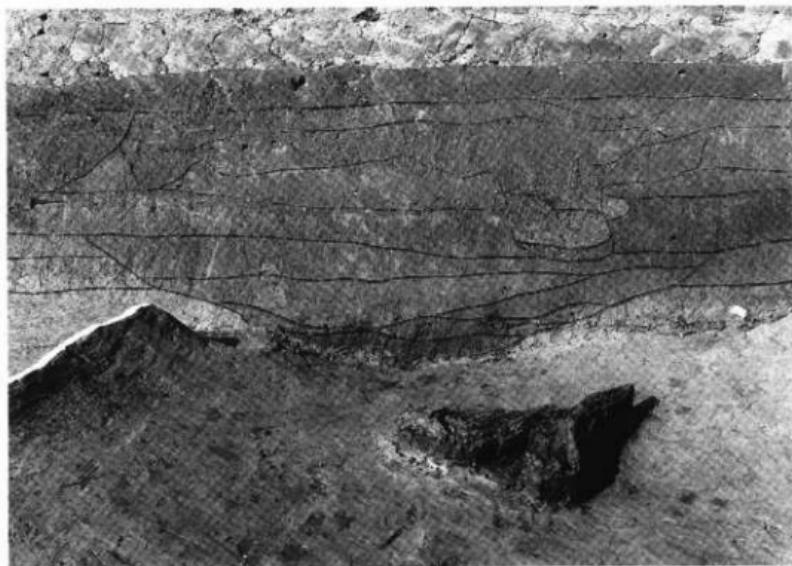
1区 SI401・402 (南から)



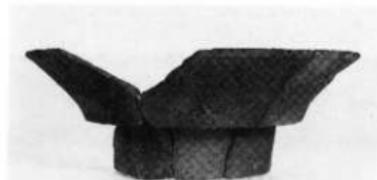
1区 SI401内 炉・台石 (42) 検出状況 (東から)



1区 SI402 畦南壁（北から）



1区 SD401西壁（東から）



1



2



6



9



16

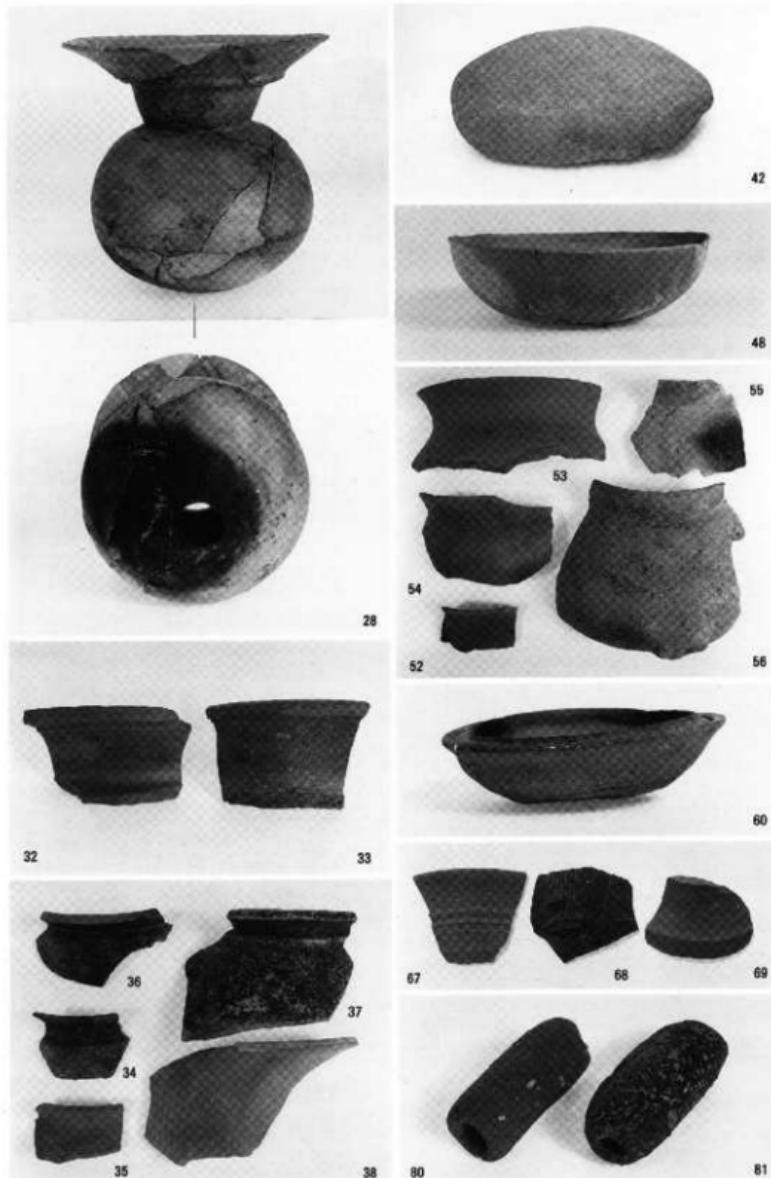


17



18

1・2：土器棺墓301 6・9：第4層 16～19：第5層



28 : SK301 32~38 : NR301 42 : SI401 48~81 : NR401

III 小阪合遺跡第20次調査 (K S 91-20)

## 例　　言

1. 本書は、八尾市青山町2丁目1で行った共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第156号 平成3年3月18日）に基づき財團法人八尾市文化財調査研究会が、杉本一二三氏から委託をうけて実施したものである。
1. 本調査は、当調査研究会が小阪合遺跡内で実施した第20次調査である。
1. 現地調査は、当調査研究会 坪田貞一を担当者として、平成3年4月19日に着手し、同年5月16日に終了した。調査面積は340m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、垣内洋平・坂下 学・濱田千年・真柄 龍・沖田純一・小田久一の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聰子・山内千恵子の参加を得た。
1. 本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行い、遺物観察表は主に田島が作成した。

## 本 文 目 次

第1章 調査に至る経過.....	45
第2章 調査概要.....	46
第1節 調査方法.....	46
第2節 基本層序.....	47
第3節 検出遺構と出土遺物.....	49
第3章 出土遺物観察表.....	61
第4章 まとめ.....	67

## 挿 図 目 次

第1図 調査地位置図 (S = 1 / 5000) .....	45
第2図 地区割図 (S = 1 / 400) .....	46
第3図 基本層序 (S = 1 / 40) .....	47
第4図 遺構平面図 (S = 1 / 150) .....	48

第5図 SW 1 出土遺物 (S = 1 / 4) .....	49
第6図 SW 1 平面図 (S = 1 / 5) .....	49
第7図 S E 1 平・断面図 (S = 1 / 50) .....	50
第8図 S E 1 出土遺物 (S = 1 / 4) .....	51
第9図 S K 1 出土遺物 (S = 1 / 4) .....	52
第10図 S D 1 出土遺物 (S = 1 / 4) .....	52
第11図 第4層出土遺物 (S = 1 / 4) .....	53
第12図 N R 1 出土遺物 (S = 1 / 4) .....	53
第13図 N R 2 上層〈北区〉出土遺物 (S = 1 / 4) .....	55
第14図 N R 2 上層〈南区〉出土遺物 (S = 1 / 4) .....	56
第15図 N R 2 下層〈北区〉出土遺物 (S = 1 / 4) .....	57
第16図 N R 2 上層～下層〈南区〉出土遺物 (S = 1 / 4) .....	58
第17図 N R 2 上層〈北区〉出土遺物 (S = 1 / 6) .....	59
第18図 N R 2 出土遺物 (S = 1 / 2 + 1 / 4) .....	60

## 図 版 目 次

- 図版一 南区 全景（西から）  
北区 SW 1（上が南）
- 図版二 南区 S E 1 上層遺物出土状況（西から）  
南区 S E 1 出物（南から）
- 図版三 北区 N R 1 全景（北から）  
北区 N R 1 横櫛（63）出土状況（南東から）
- 図版四 南区 N R 2 全景（西から）  
北区 N R 2 木製品（138）出土状況（北東から）
- 図版五 北区 N R 2 横櫛（139）出土状況（上が北東）  
南区 N R 2 木製品（140）出土状況（西から）
- 図版六 出土遺物
- 図版七 出土遺物
- 図版八 山土遺物
- 図版九 出土遺物
- 図版一〇 出土遺物

## 第1章 調査に至る経過

小阪合遺跡内では、昭和57年以降、土地区画整理事業等に伴う発掘調査が、当調査研究会・大阪府教育委員会・八尾市教育委員会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～近世に至る遺跡であることが確認されている。

平成3年、杉本一二三氏より、八尾市青山町2丁目1における共同住宅建設の届出書が八尾市教育委員会文化財室に提出された。これを受けて同文化財室では、当該地が周知の遺跡範囲内にあることから発掘調査が必要であると判断し、事業者にその旨を通知した。そして、工事により造構の破壊が予想される部分を対象に、発掘調査を実施することが両者で合意された。発掘調査にあたっては、事業者・同文化財室・当調査研究会の三者協定により、当調査研究会が主体となって実施することになった。

今回の調査地の周辺では、当調査研究会により第8次・18次調査が行われており、古墳時代中期、平安時代末～鎌倉時代の造構が検出されている。<sup>註1</sup><sup>註2</sup>また東側の第18次調査では弥生時代中期の集落・後期の水田が確認されている。



第1図 調査位置図 (S = 1/5000)

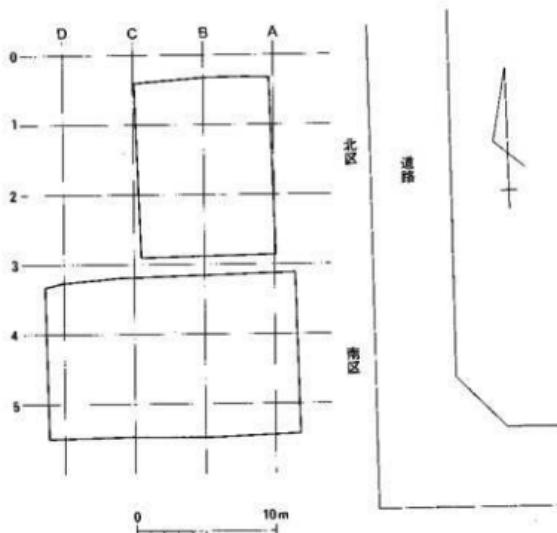
## 第2章 調査概要

### 第1節 調査方法

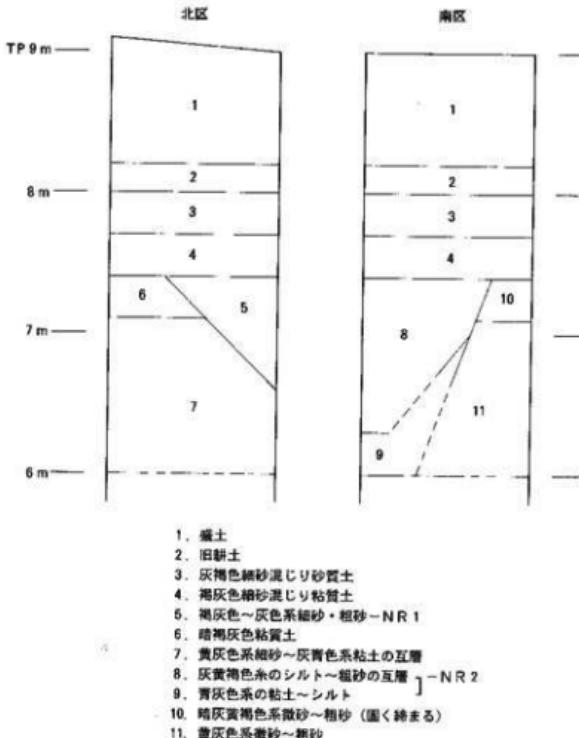
今回の調査は共同住宅建設に伴う調査である。調査区は約1.3mの間隔で南北・東西に分かれており、各調査区の面積は北区-約130m<sup>2</sup>、南区-約210m<sup>2</sup>である。

調査は北区・南区を並行して実施した。掘削は北区で地表下約1.7m・南区で約1.5mまでを機械掘削とし、以下を人力掘削で調査を行った。

地区割については、調査区平面形に合わせて5m方眼を任意に設定し、実測・遺物取り上げの基準とした。なおこの方眼の南北ラインは磁北から東に約1.7度振っている。

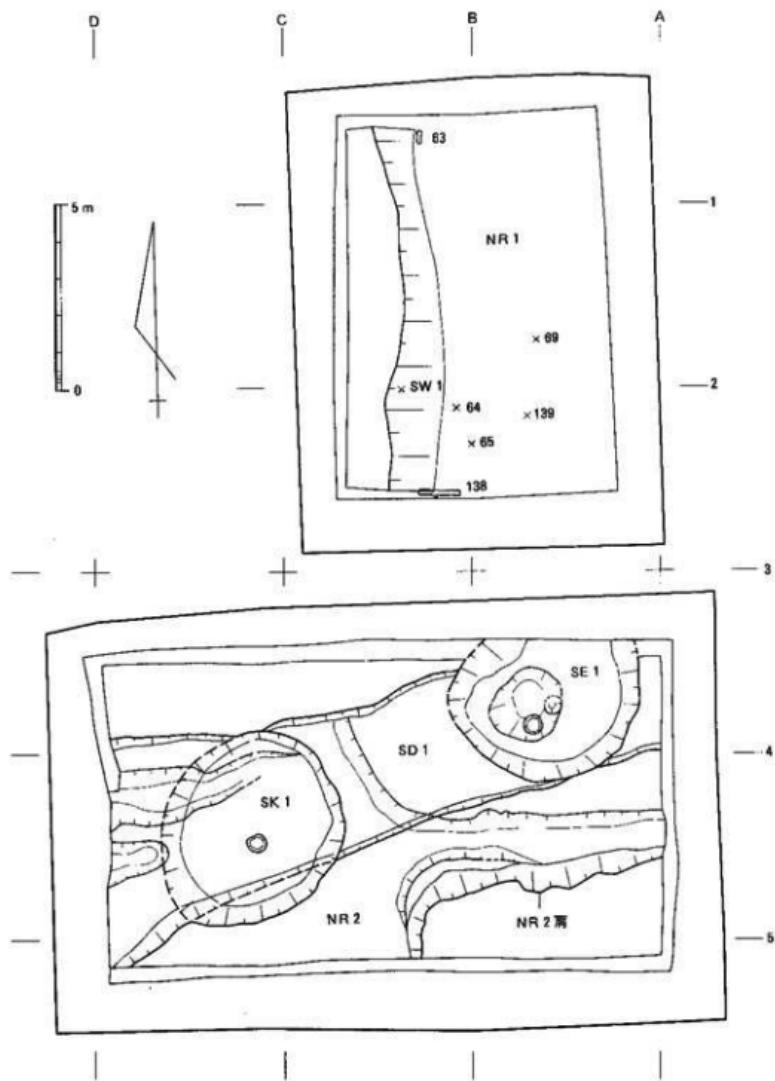


第2図 地区割図 ( $S = 1/400$ )

第3図 基本層序 ( $S = 1/40$ )

## 第2節 基本層序

第1層は現代の耕作土、及び近年の上地区画整理事業に伴う盛土である。第2層はIH耕土である。第3～4層はほぼ水平堆積を呈しており、それぞれ2～3層に分層できる。北部・南部ほど粘質、中央部がやや砂質となっている。西側の第8次調査で確認されている平安時代末期頃の整地層に相当する可能性があり、層厚は当調査地が増している。古墳時代から中世までの遺物を少量含んでいる(45～55)。第4層下面が遺構面となり、標高7.4m～7.2mを測る。北区の第5層がNR 1に相当し、第6層は北区のみでみられNR 1の西肩を形成する層である。南区の第9・10層がNR 2に相当し、第9層は北区では第5～8層を総合した層として捉えられる。第11・12層がNR 2のベースとなり、弥生時代の遺物をわずかに含んでいる。



第4図 造構平面図 ( $S = 1 / 150$ )

### 第3節 検出遺構と出土遺物

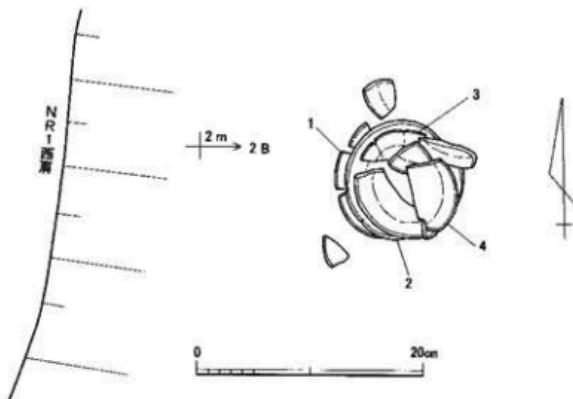
北区では土器集積（SW1）・河川1条（NR1）、南区では井戸1基（SE1）・土坑1基（SK1）・溝1条（SD1）・河川1条（NR2）を検出した。

#### SW1

北区の南西部、NR1の上面で検出した。検出レベルは標高約7.57mを測る。4枚の土師質の小皿（1～4）を正位に重ねたもので、掘形は認められなかった。土器の時期は平安時代末～鎌倉時代頃と考えられる。性格については、周辺に建物遺構や明確な整地層が認められないため断定はできないが、地鎮祭祀である可能性が考えられる。



第5図 SW1出土遺物 (S=1/4)



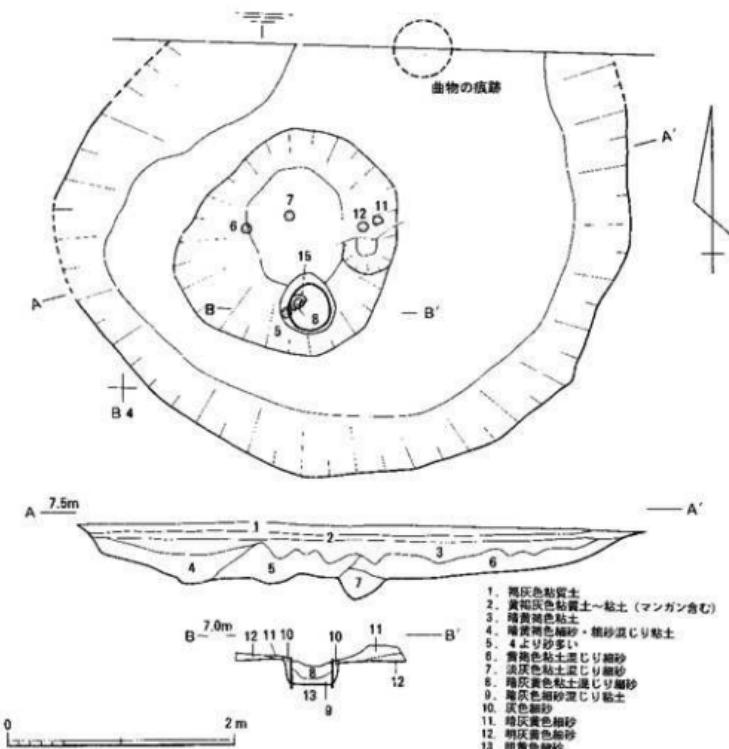
第6図 SW1平面図 (S=1/5)

#### SE1

南区の北東部で検出した曲物井戸である。掘形は直径約5.0mの円形を呈すると考えられる。埋土の第1層～第3層は井戸廃絶後の堆積で、曲物を覆っており、本来の掘形埋土ではない。曲物は掘形の南部に位置し、一段のみが遺存しており、直径約37cm・高さ27cmを測る。曲物はベースとなる潤水層である明黄色細砂層を直径約50cm・深さ約20cm掘りこんだ後、約5cm埋め込まれている。この曲物の他にも中央部（第7層）と北部の調査区壁内に井戸側の痕跡と思われる落ち込みが認められ、2回以上の掘り直しが行われたものと考えられる。掘形の規模が大きいのは、この掘り直しに起因するのであろう。

第1層から土師質小皿10枚（5～14）・大皿1枚（15）が出土しており、出土地点のわかる7枚をみると、意図的に並べられた様な状況である。このうち3枚は曲物の上位に位置しており、正位で5と15を並べ、15の上に逆位の8を重ねている。また第3層中の曲物上位からは、ほぼ完形の瓦器椀1点（18）が横位で口縁部を北東に向けて出土している。これらの上器は井戸焼絶時の何らかの祭礼に関するものである可能性が考えられる。

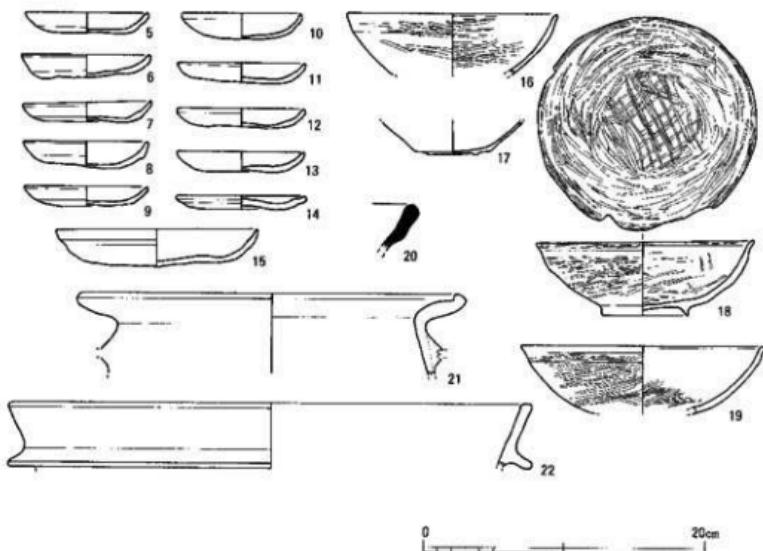
川土遺物（5～22）の時期は平安時代末頃に比定される。



第7図 SE 1平・断面図 (S = 1/50)

SK 1

南図の西部で検出したが、西側はSD 1との境が明確に捉えられなかった。平面形は直径約5.0mの円形を呈すると考えられる。深さ約50cmを測り、断面形状は逆台形で底部が平らな形



第8図 SE 1出土遺物 (S = 1/4)

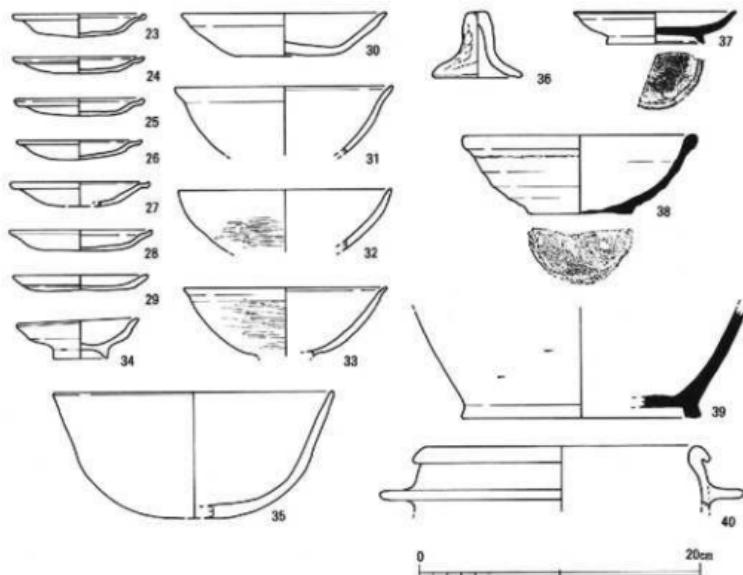
状を成す。埋土は上から灰褐色細砂混じり粘質土、暗青灰色粘土、暗灰青色細砂混じり粘土である。底部の中央付近に、直径約50cm・深さ20cmを測り、青灰色細砂混じり粘土の埋土をもつ落ち込みがある。これを曲物井戸の枠の痕跡と考えるならば、当土坑はSE 1と同様の井戸であった可能性がある。

出土遺物(23~40)の時期はほぼ平安時代中葉以降に比定される。38は底部糸切りの須恵質鉢で、焼成は不良である。形態的に備窯産の可能性がある。40の土師質羽釜はやや時期が下ると考えられ、当遺構の埋没過程の混入と思われる。

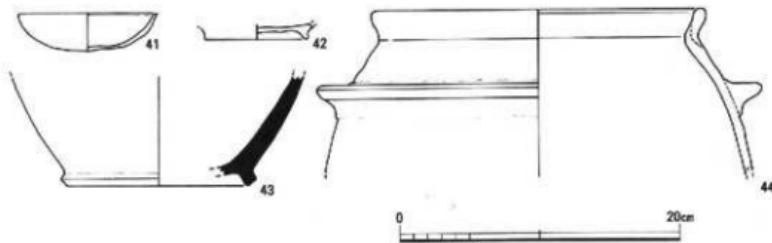
#### SD 1

南区を東西方向に横断する溝である。幅3.5m~5.4m、深さ20cm~50cmを測り、底のレベルは西部が低くなっている。断面皿状を呈し、埋土は褐灰色系の粘質土~粘土である。中央部の上層では拳大~人頭大の石の散乱がみられた。出土遺物(41~44)は平安時代頃に比定され、図化しえなかったが円筒埴輪片も出土している。

なおSD 1は、後述のNR 1・2の最終段階の堆積部分であるとも考えられる。



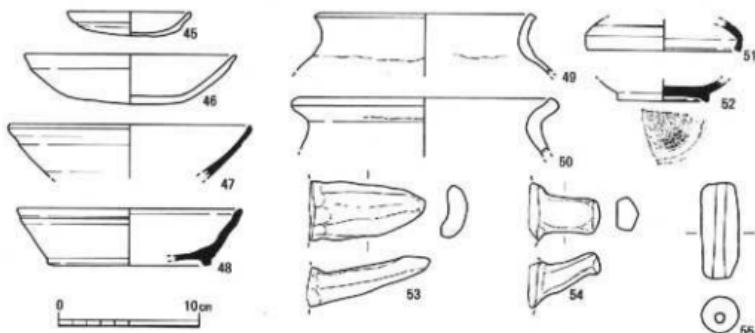
第9図 SK 1出土遺物 ( $S = 1/4$ )



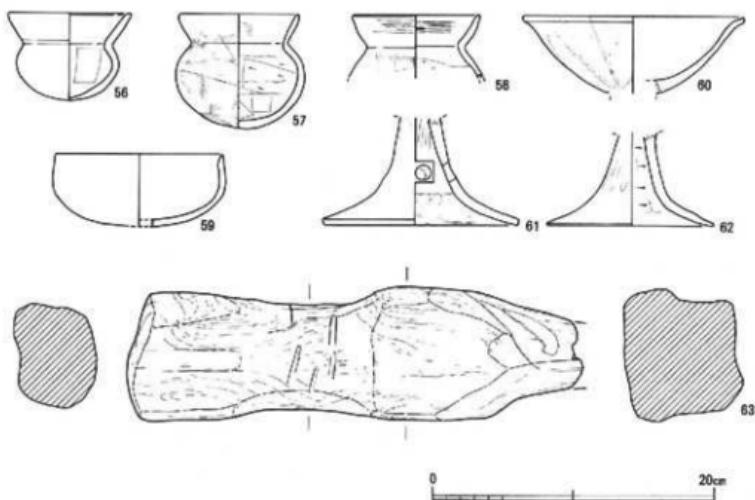
第10図 SD 1出土遺物 ( $S = 1/4$ )

### NR 1

北区西部で左岸を検出した。検出レベルは標高7.3m～7.4mを測る。ほぼ南北方向の河川で、第6層暗褐色粘質土を肩としているが、南区ではこの第6層は認められなかった。南部でみられた暗灰青色系粘土～粘質シルトを河床とした。規模は検出長約9.7m・深さ0.8m～1.3m以上を測り、河床は北東部が深くなっている。堆積土は褐色～灰色系の細砂・粗砂であり、最



第11図 第4層出土遺物 (S=1/4)



第12図 NR 1出土遺物 (S=1/4)

上層は固く締まっている。NR 1上面で検出したSW 1が河川埋没後のものであることから、平安時代後半には河川としての機能を停止していることがわかる。なお、このNR 1の下層にも後述する河川(NR 2)の堆積が続いている。

出土遺物には、古墳時代前期末頃の時期に比定される布留式刷新相の土器(56~62)の他、木製品では横柾(63)が出土している。

横槌（63）は河川の底部北端、傾斜部との隙で出土した。大型のもので、柄部は欠損しており、残存長32.4cmを測る。頭部は断面約9.4cm×8.3cmの方形を呈し、長さ27.4cmを測り、中央部が細くなっている。頭部と柄との間は面取りが施されている。頭部の中央付近には溝状の使用痕が認められ、また線状の刃物痕のような痕跡もあり、これは加工痕とも考えられる。

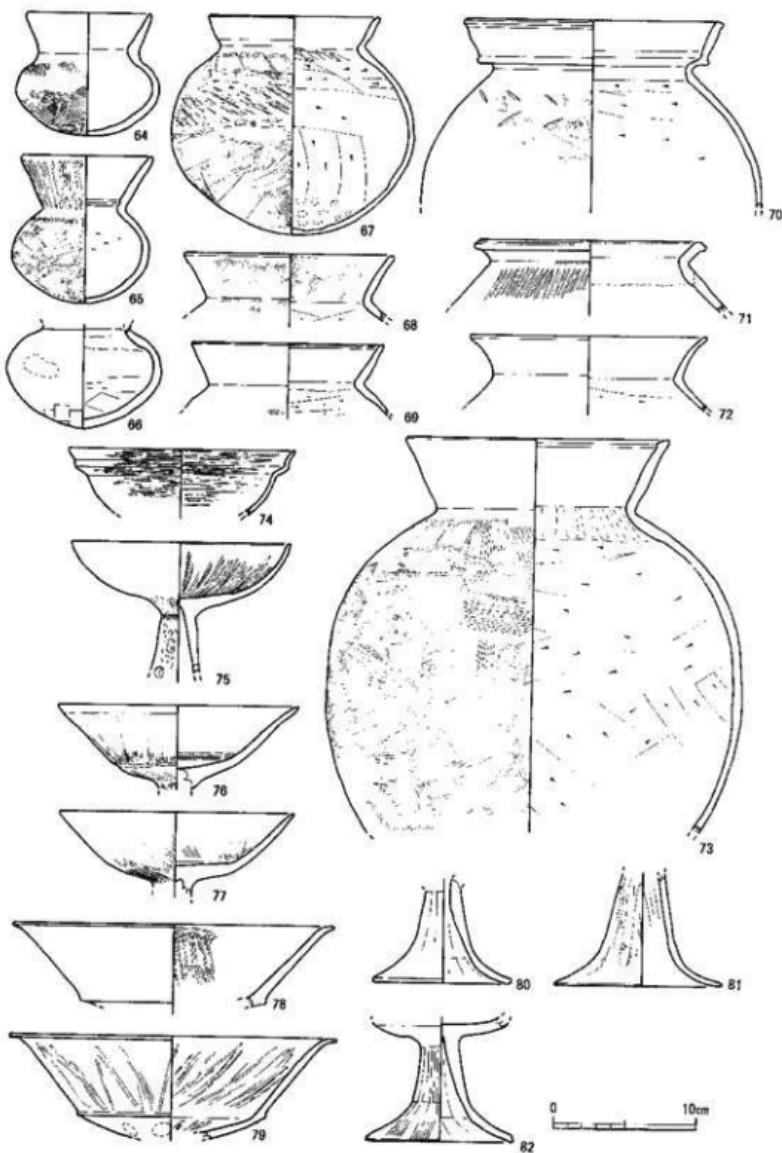
#### NR 2

北区全域と南区のほぼ全域を占める河川で、南区南東部で右岸を検出した。検出レベルは標高約7.4mを測る。規模は幅12m以上を測り、南西—北東の流路方向をもつと考えられ、暗灰黄褐色系の間に締まった微砂～粗砂を肩としている。堆積土は大まかにみると、上層が暗灰青色系粘土～粘質シルト、中層が灰黄褐色系のシルト～粗砂の互層、下層が青灰色系の粘土～シルトである。上層は北区のみに堆積しており、NR 1の河床とした層である。下層とした粘土層は南区の北西部と北東部で確認したが、底部までの掘削は断念したため深さは不明である。全体的に砂層と粘土層が複雑な堆積を呈するものであり、上～下層は明確には分離できない。

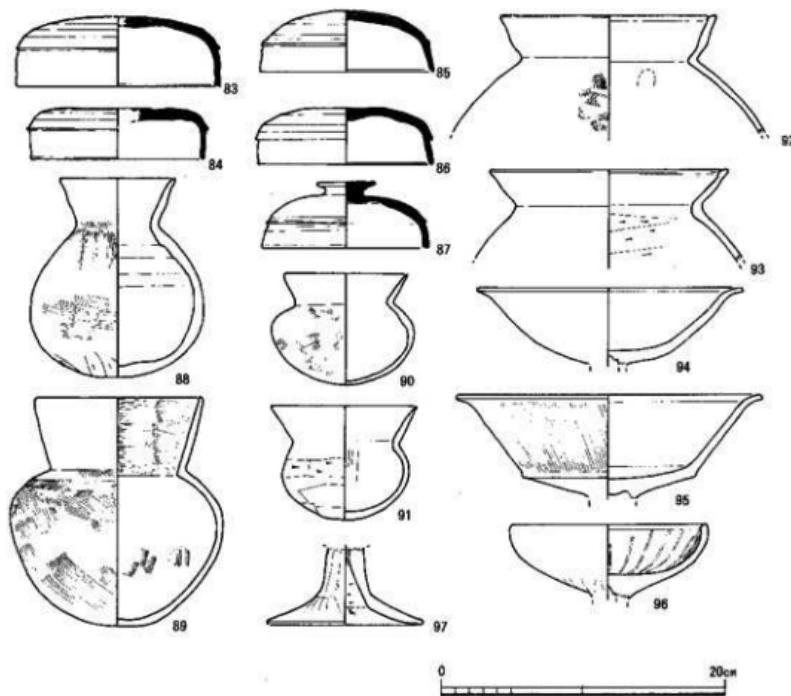
北区で検出したNR 1は、このNR 2の上層部分にあたると考えられるが、南区の調査ではNR 1の範囲は明確にはできなかった。このためNR 1に相当すると考えられる砂層も含めてNR 2とした。

河川堆積土からの出土遺物には、古墳時代前期後半と中期後半の時期に比定される土器（64～137）や木製品（138～143）があり、ベースとした砂層には摩耗した弥生時代の土器が少量含まれている。このうち南区出土のもの（83～97・112～137）については、前述の理由からNR 1出土遺物として捉えられるものも含まれよう。中期後半に比定されるものには83～87の須恵器や89・118の土師器がある。118の形態は明らかに須恵器を模したものと考えられる。これらは南区の上層から出土している。

不明木製品（138）は、北区NR 1掘削時に底部と傾斜部との隙で一部が検出されていた。北区南端の上層、NR 1の河床を形成する暗灰青色粘土・粘質シルト層（植物遺体を含む）～黄灰色細砂の互層上面付近から、A面を上にしてほぼ水平な状況で出土した。出土レベルは標高約6.90mである。長方形の板材で、法量は長辺118.5cm・短辺14.5cm～12.5cm・厚さ4.8cm～3.7cmを測る。木材は樹木の叉部分を使用しており、片方の側面に長さ約19.5cmにわたる枝を残している。この枝部分の表面は滑らかであり、磨かれたものか、あるいは二次的に摩滅した（把手のように握る部分・何かを巻きつけての使用等が考えられる）ものである可能性もある。板部の幅は枝より上部が広くなっている。板部には二か所に長方形の枘穴が貫通している。枘穴には桜（？）の皮と、厚さ約0.7cmの扁平な楔形の木片が遺存しており、何かに結束したのち固定するために枘穴を充填していたという状況である。またA面の枝側には二か所の凹みがある（イ・ロ）。加工痕はA面と枝の根元付近に数か所が確認できるが、明瞭なものではない。



第13図 NR 2 上層（北区）出土遺物 (S = 1 / 4)

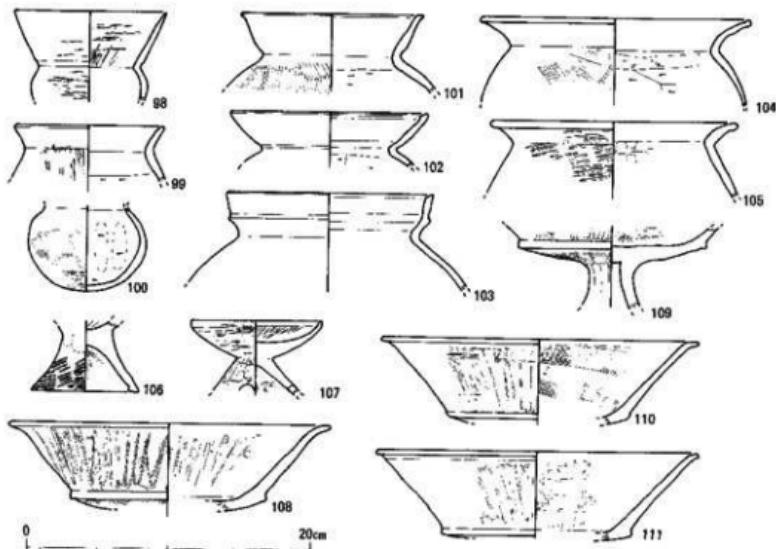


第14図 NR 2上層(南区)出土遺物(S=1/4)

類例をみないが、形状から準構造船の舷側板材である可能性を考えている。この場合、枘穴は船底部と結束するためのもので、枝部分が櫂の支点となる突起部と思われる。他に扉材や櫂などの用途も考えられよう。

なお当調査地から西に約3kmに位置する久宝寺南遺跡の調査で、準構造船の一部が検出されているが、これに伴って出土し、舷側板の可能性があるとされている板材は、枝部は無いものの法量（長辺121cm・短辺21cm・厚さ2cm）や枘穴の状況が類似しているようである。<sup>註3</sup>

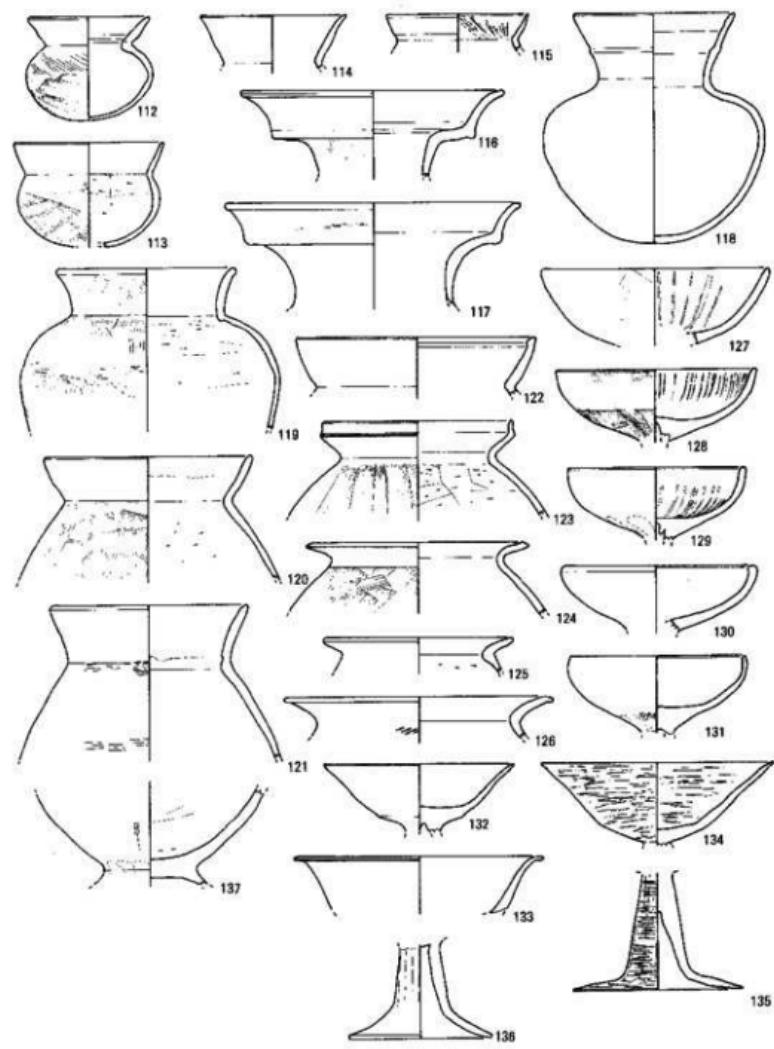
横櫂（139）は北区南東部の上層、NR 1の河床を形成する暗灰青色粘土～粘質シルト層（植物遺体を含む）から出土した。出土レベルは標高約6.61mを測る。挽歯の横櫂で、棟の一端が火損している。法量は縦5.1cm・横8.9cmを測り、厚さは棟中央が最大となり1.1cmを測る。棟部断面は丸みをもち、歯部は棟とは段を成して薄くなり、歯先に向かって細くなっている。歯数は23本で密度の粗いものであり、歯はJ字に削られている。なお棟の表面には黒漆が塗ら



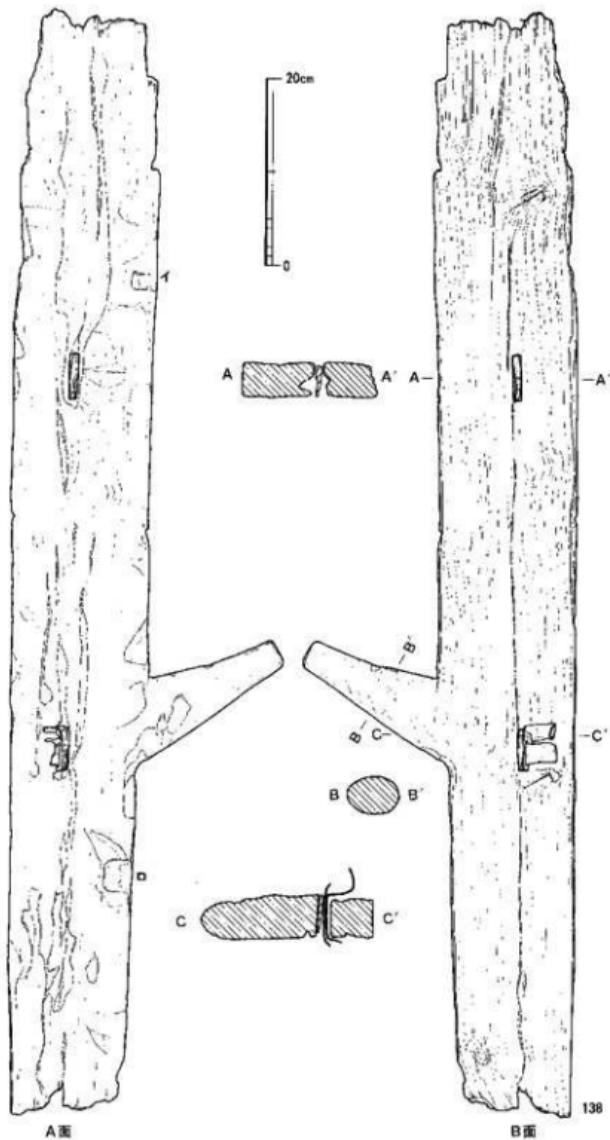
第15図 NR 2下層（北区）出土遺物（S=1/4）

れている。時期は、河川出土ということから断定はできないものである。しかし其伴遺物（64～82）及び上位のNR 1出土遺物（56～63）は布留式期新相に比定されるものであり、また南区のNR 2出土遺物（83～97・112～137）からも、5世紀代を下るとは考えられず、横櫛としては最古例となる可能性がある。<sup>註4</sup>

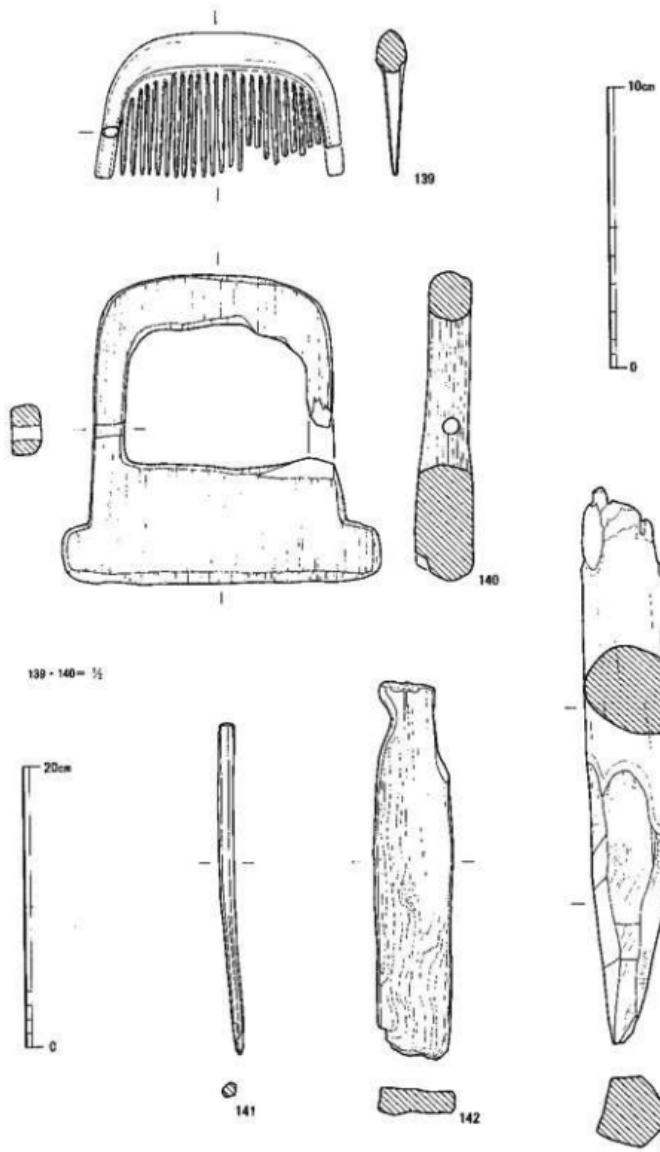
不明木製品（140）は南区北東部の上層にあたる青灰色シルトと暗灰黄色細砂の互層から出土した。方形の環状を呈する精製品で、法量は縦11.0cm・横11.3cm・厚さ1.5cm～2.1cmを測る。両側部に直径約5mmの穿孔を施している。141は六角形に面取りされた棒状製品で、下端は欠損している。長さ23.7cm・径約1.0cmを測る。142は長さ27.2cm・幅約5.6cm・厚さ約1.8cmを測る板状製品で、上部の両側が抉り込まれている。また表面は火を受けて焦げている。織機部品の可能性がある。143は断面梢円形の木材を使用した杭の下部である。表面には樹皮が遺存し、加工は先端部のみで、五角形に面取りされている。長さ39.9cm・最大径7.7cmを測る。



第16図 NR 2 上層～下層（南区）出土遺物 (S = 1 / 4)



第17図 NR 2 上層（北区）出土遺物（S=1/6）



第18図 NR 2 出土遺物 (S= 1/2 + 1/4)

## 第3章 出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種	出土地点 (復元値)	口径 (cm)	内側 器底	外側 器底	胎土	焼成	技法・形態等の特徴	保存状況
1 上脚質	北区		9.4			やや密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
6 皿	SW1		1.5	乳茶色					
2 土脚質	北区		9.4			やや密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
6 皿	SW1		1.4	乳茶色		やや密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
3 土脚質	北区		8.8			やや密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
6 皿	SW1		1.4	乳茶色		やや密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
4 土脚質	北区		(9.3)						%
6 皿	SW1		1.7	乳茶色		やや密	良好	内外面ナデ。	反転
5 土脚質	南区		8.8			密	良好	内外面ナデ。	ほぼ完形
6 皿	SE1		1.5	淡茶灰色					
6 土脚質	南区		9.1			密	良好	内外面ナデ。	光形
6 皿	SE1		1.6	淡茶灰色					
7 土脚質	南区		9.1						ほぼ完形
6 皿	SE1		1.4	淡茶灰色	密		良好	内外面ナデ。	
8 土脚質	南区		8.9						光形
6 皿	SE1		1.5	淡茶灰色	密		良好	内外面ナデ。	
9 土脚質	南区		8.8						光形
6 皿	SE1		1.4	淡茶灰色	密		良好	内外面ナデ。	
10 土脚質	南区		8.5						ほぼ完形
6 皿	SE1		1.8	乳茶色	やや密		良好	内外面ナデ。	
11 土脚質	南区		9.2						ほぼ完形
6 皿	SE1		1.4	淡茶灰色	密		良好	内外面ナデ。	
12 土脚質	南区		9.0						完形
6 皿	SE1		1.3	淡茶灰色	密		良好	内外面ナデ。	
13 土脚質	南区		(9.2)						%
6 皿	SE1		1.4	淡茶灰色	密		良好	内外面ナデ。	反転
14 土脚質	南区		(9.3)						%
6 皿	SE1		0.95	明茶褐色	密		良好	内外面ナデ。	反転
15 土脚質	南区		14.4						ほぼ完形
6 皿	SE1		2.7	淡茶灰色	密		良好	内外面ナデ。	
16 瓦器	南区		(15.0)	灰黑色					%
6 碗	SE1			乳灰色	密		良好	内外面ヘラミガキ。	反転
17 土脚器	南区								底部% 不明
6 碗	SE1	高台付	(3.4)	明乳茶色	やや粗		良好		反転
18 瓦器	南区		15.5						ほぼ完形
6 碗	SE1	高台付	6.05	黑色	密		良好	口縁部ヘラミガキ。全体外面上部コナデ、中腹下位ナデ後ヘラミガキ。底面外凹ナデ。	
19 瓦器	南区		(17.6)	灰黑色	密		良好	内外面ヘラミガキ。	%
6 碗	SE1								反転
20 淡泥質	南区								
6 盆	SE1			灰白色	密		良好	内外面回転ナデ。	極小
21 土脚質	南区		(27.0)						%
6 羽釜	SE1			黄褐色	やや粗1~5mmの砂粒を多く含む		良好		反転
22 土脚質	南区		(36.0)						%
6 羽釜	SE1			暗茶褐色	やや粗1~5mmの砂粒を多く含む		良好	内外面ナデ。内面錆付着。	反転

品種番号	品種	出土地点	花期(初花)	口括 器高	色調 外 内	粉 土	油成	枝法・形態等の特徴		備考
								枝	葉	
23	土師質	南区	(3.4) 1.7	乳茶灰褐色 密	良好	内外面ナゲ。				劣 反転
24	土師質	南区	(3.4) 1.2	乳灰茶色 密	良好	内外面ナゲ。				口輪光沢 反転
25	土師質	南区	9.2 1.3	乳灰茶色 密	良好	内外面ナゲ。				劣 反転
26	土師質	南区	9.0 1.4	乳茶灰褐色 密	良好	内外面ナゲ。				完形 反転
27	土師質	南区	(10.0) SK1	乳茶灰褐色 密	良好	内外面ナゲ。				劣 反転
28	土師質	南区	(10.2) 1.6	乳茶灰褐色 密	良好	内外面ナゲ。				劣 反転
29	土師質	南区	(9.6) SK1	乳茶灰褐色 密	良好	内外面ナゲ。				劣 反転
30	土師質	南区	(14.6) SK1	暗茶灰色 密	良好	内外面ナゲ。				劣 反転
31	褐色土器	南区	(15.6) SK1	暗灰茶色 密	良好	不明。				劣 反転
32	黒色土器	南区	(15.0) SK1	暗黑褐色 密	良好	内外面へツミガキ。口輪部外面黒斑。				劣 反転
33	黒色土器	南区	(13.2) SK1	乳灰褐色 の砂粒を含む	良好	内外面へツミガキ。				劣 反転
34	土師質	南区	8.6 台付型 SK1	17.2 (4.0)	明乳茶色 やや粗	良好	内外面ナゲ。			完形
35	土師質	南区	(20.0) 株 SK1	乳茶色 やや粗	良好	不明。				劣 反転
36	土師質	南区	SK1	5.9	淡茶色 やや粗	良好	脚部外面へ脚部内面ナゲ。脚部内面しほり。			脚部光沢
37	須恵質	南区	(11.6) 台付型 SK1	2.3 (7.0)	乳灰色 やや粗	良好	内外面回転ナゲ。口部系切り。			劣 反転
38	須恵質	南区	(16.1) 株 SK1	5.6 (Y.6)	灰白色 密	良好	内外面回転ナゲ。底部系切り。			劣 反転
39	須恵質	南区	SK1	高台 (17.2)	淡灰色 密	良好	底部外面回転ヘラケツリ、内面回転ナゲ。高台 底部回転ナゲ。底部内面ナゲ。			劣 反転
40	土師質	南区	SK1	高台 (36.2)	褐色 やや下の砂粒を 多く含む	不良	内外面ナゲ。			劣 反転
41	土師質	南区	SD1	10.0 2.7	淡茶灰色 密	良好	内外面ナゲ。		口輪部完形	口輪部光沢
42	黑色土器	南区	SD1	高台 7.45	乳茶色 やや粗	良好	不明。			口輪部光沢
43	須恵質	南区	SD1	高台 (12.6)	淡灰色 やや密	良好	外側回転ナゲ。内凹ナゲ。			劣 反転
44	土師質	南区	SD1	(24.0)	乳茶色 やや粗	良好	口輪部へ脚部外側ヨコナゲ。体部ナゲ。			底部光沢
45	土師質	南区	第4層	8.6 1.7	暗乳茶色 やや粗	良好	内外面ナゲ。			底部光沢

遺物番号 図版番号	器種	出土地点	法線(度) (復)	高さ (mm)	色調 外 内	胎 土	焼成 度	技 法・形 態 等 の 特 性		備 考
								内面 外 内	外 内	
46	土師壺	南区 第4層	(15.0) 3.6	暗乳茶色 やや粗	良好	内外面ナデ。				%
47	白磁 碗	南区 第4層	(17.0)	淡灰褐色 密	良好	内外面回転ナゲ。				一部反転 反転
48	須磨器	南区 第4層	(16.1) 4.1	淡灰褐色 密	良好	内外面回転ナゲ。				%
49	土師器	南区 第1層	(18.1)	乳白色 やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。内部ナデ。				%
50	土師器	南区 第4層	(18.1)	淡灰褐色 密	良好	不判				%
51	須磨器	南区 第4層	(11.0)	淡灰褐色 密	良好	回転ナゲ。鉢輪あるいは火候の可否性あり。				反転
52	土師器	南区 第4層	(6.5)	乳白色 密	良好	回転ナゲ。底部斜切り。				%
53	土師器	南区 第4層	8.4 4.3 厚さ	淡灰褐色 多く含む	良好	1.5mm以上 の砂粒を多く 含む	ナデ。			
54	土師器	北区 把手 第4層	4.5 2.4 厚さ	淡灰褐色 多く含む	良好	1.5mm以上 の砂粒を多く 含む	ナデ。			
55	土師器	南区 第4層	6.8 2.6	淡灰褐色 多く含む	良好	重ねた状態 以下	やや ナデ。			ほぼ完形
56	土師器	北区 把手 NR 1	8.8 6.2	淡灰褐色 密	良好	口縁部ヨコナデ。全体部ナゲ。				口縫・部欠損
57	土師器	北区 把手 NR 1	(8.4) 8.1	乳茶灰色 密	やや 不判	口縫部外面ヨコナデ、内面ハケ。全体部外面ハ ケ、内面上面ヘラケズリ、下位				%
58	土師器	北区 把手 NR 1	(3.1)	明乳茶色 密	良好	口縫部ヨコナデ。底部外面ヨコナデ、内面ナ デ。周部外面ハケ、内面ヘラケズリ。				反転
59	土師器	北区 把手 NR 1	(12.0) 8.1	明乳茶色 密	良好	不明。				%
60	土師器	北区 把手 NR 1	(15.8)	明乳茶色 やや粗	良好	口縫部ヨコナデ。全体部外面ハケ、内面ナデ。				部欠損
61	土師器	北区 高杯 NR 1		淡灰褐色 密	良好	脚柱部外面ハケ、内面ヘラケズリ。脚柱部外 面ナデ、内面下位スピオサエ、下位ハア。二方孔。				一部反転
62	土師器	北区 高杯 NR 1	12.9	明乳茶色 密	良好	脚柱部外面ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。横筋 ヨコナデ。				脚部欠損
63	土師器	北区 七管 NR 2 上層	(9.0) 8.75	乳茶灰色 密	良好	口縫部ヨコナデ。全体部外面ハケ、内面ナデ。 体部最大径 10.2				口縫部欠損 一部反転
64	土師器	北区 七管 NR 2 上層	9.45 10.5	淡灰褐色 やや粗	良好	口縫部ヨコナデ。全体部外面ハケ、内面ナデ。 体部最大径 9.8				ほぼ完形
65	土師器	北区 七管 NR 2 上層	12.1 10.6	淡灰褐色 密	良好	口縫部外面上位ヨコナデ、中位ナデ、下位ヘラ ケズリ、内面ヘラケズリ。外側温度。				口縫部欠損 一部反転
66	土師器	北区 七管 NR 2 上層		淡灰褐色 密	良好	口縫部ヨコナデ、中位ナデ、下位ヘラ ケズリ、内面ヘラケズリ。外側温度。				体部最大径 11.0
67	土師器	北区 七管 NR 2 上層	12.1 10.6	黑灰色 密	良好	口縫部ヨコナデ。脚柱部外面ナデ。脚柱部外 面ハケ下位トトロ模様。全体部内面ヘラケズリ。 底部内面ユソオサエ。体部最大径 17.2				底部・部欠 損
68	土師器	北区 七管 NR 2 上層	(14.6)	淡灰褐色 密	良好	口縫部ハケ、脚部外面ハケ、内面ヘラケズリ。				口縫部% 反転
69	土師器	北区 七管 NR 2 上層	13.45	明乳茶色 密	良好	口縫部ヨコナデ。脚部外面ナデ。内面ヘラケズ リ。外面環付着。				口縫部充 分

遺物番号 (回収年)	品種	出土地点	出土量(g) (復元量)	口径 器高	色調 外 内	胎 土	焼成 度	技 法・形 塗 等 の 特 徴	残 存 考
70 七	土師器 甕	北区 NR 2 上層		(17.1)	淡茶灰赤 の砂粒を多く 含む	中 2 mm以上 の砂粒を多く 含む	良好	口縁部外面ヨコナダ。内部ナダ。更に外側ハケ、 内面ヘラケズリ。外延保付着。	口縁部 反転
71 七	土師器 甕	北区 NR 2 上層		(15.6)	赤褐色 灰系色	密 1.5 mm 以 下の砂粒を多 く含む	良好	口縁部ヨコナダ。内部外面タキ、内面ナダ。 外延保付着。	口縁部 反転
72 七	土師器 甕	北区 NR 2 上層		(16.6)	暗茶褐色 茶褐色	中 0.5 ~ 2 mm 以下の砂粒を 含む	良好	口縁部ヨコナダ。内部外面ナダ、内面ヘラケズ リ。外延保付着。	極小 反転
73 八	土師器 甕	北区 NR 2 上層		(18.6)	褐色 灰褐色	密 3 mm以下 の砂粒を少 なく含む	良好	口縁部ヨコナダ。体部外面ハケ、内面ヘラケズ リ。外延保付着。体部嵌入度(29.5)	口縁部 反転
74 八	土師器 甕	北区 NR 2 上層		(16.0)	淡茶灰赤色	中 3 mm以下 の砂粒を少 なく含む	良好	口縁部~体部ヘラミガキ。底部外唇ヘラケズリ。 外延保付着。	口縁部 反転
75 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		(15.6)	茶褐色	中 3 mm以下 の砂粒を少 なく含む	良好	口縁部ヨコナダ。斜面凹面状放射状ヘラミガキ。 底部外側ヘラケズリ。脚柱部の内面ヘラミガキ、内面ナ ダ。外延保付着。三孔化。	杯部洗 一部反転
76 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		17.1	淡茶灰赤色 淡茶褐色	密 3 mm以下 の砂粒を少 なく含む	良好	杯部外面ハケ、内面下位ヨコナダ、下位ハケ。	杯部洗
77 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		16.6	淡茶灰褐色 淡茶褐色	中 1 mm以下 の砂粒を少 なく含む	良好	杯部内外面ハケ後口縁部ヨコナダ。体部内面 ナダ。内面保付着。	杯部洗 形
78 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		(22.6)	乳白色 やや粗	中 1 mm以下 の砂粒を少 なく含む	良好	口縁部ヨコナダ。口縁部内面ハケ後ヘラミガ キ。	極小 反転
79 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		(23.4)	淡茶褐色 暗褐色	中 1 mm以下 の砂粒を少 なく含む	良好	口縁部ヨコナダ後ヘラミガキ。体部外面ナダ、 内面ナダ後ヘラミガキ。	杯部洗 反転
80 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		9.8	茶褐色	密	良好	ナダ。	體部洗
81 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		(12.7)	明黄褐色 青褐色	密	良好	外面部。内面ナダ。	體部洗 一部反転
82 八	土師器 高杯	北区 NR 2 上層		10.6	淡灰褐色	密	良好	杯部外面ナダ、内面ヘラミガキ。脚柱部外面ナ ダ。脚柱部内面ナダ。	口縫部次扣 一部反転
83 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		(14.4) 5.0	淡灰色	中	良好	口縁部~内面回転ナダ。天井部外面回転ヘラケ ズリ。	口縫部 反転
84 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		(12.4) 3.6	淡灰色	密	良好	口縁部~内面回転ナダ。天井部外面回転ヘラケ ズリ。	口縫部 反転
85 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		12.3 4.35	灰色	密	良好	口縁部~内面回転ナダ。天井部外面回転ヘラケ ズリ。	口縫部 一部反転
86 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		12.4 4.0	暗灰色	密	良好	口縁部~内面回転ナダ。天井部外面回転ヘラケ ズリ。	口縫部 完形
87 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		11.8 4.7	淡灰色	密	良好	内外面回転ナダ。	口縫部 一部反転
88 八	須恵器 杯蓋	南区 NR 2 上層		(3.25) 14.2	つまみ紐 (4.2)	中 やや粗	良好	口縁部ヨコナダ。体部外面ハケ後ナダ、内面ナ ダ。底部外面ヘラケズリ。	口縫部欠損 一部反転
89 八	土師器 甕	南区 NR 2 上層		(11.7) 16.3	明黄褐色 青褐色	中 やや粗	良好	口縁部外面ナダ、内面ハケ。体部外面ハケ、内 面ハケ後ナダ。	口縫部欠損 体部最大径 15.0 一部反転
90 八	土師器 甕	南区 NR 2 上層		8.65 7.9	暗乳茶色	中 やや粗	良好	底部外面ハケ。	口縫部 完形
91 八	土師器 甕	南区 NR 2 上層		10.3 8.1	暗茶色	中 やや粗	良好	口縁部ヨコナダ。底部外面ヘラケズリ、内面ナ ダ。	口縫部 完形
92 九	土師器 甕	南区 NR 2 上層		15.2	棕褐色	密	良好	脚柱部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	口縫部 完形 一部反転

遺物番号 貯蔵番号	器種	出土地点	重量(g) (復元値)	口径 外径 高さ	色調 内 外	胎 土	焼成	技法・形態等の特徴	被 覆
93 土師器 甕	南区 NR 2 上層		(16.9)	灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。体部外面ナゲ、内面ヘラケズ リ。口縁部端付着。	1% 杯部ほぼ完全 反転	
94 土師器 高杯	南区 NR 2 上層		18.5	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。体部外面ナゲ。内面ナゲ。	杯部ほぼ完全 一部反転	
95 土師器 高杯	南区 NR 2 上層		(21.3)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。口縁部外面ナゲ、内面ナゲ。 体部ナギ。口縁部端付着。	杯部少 一部反転	
96 土師器 高杯	南区 NR 2 上層		(13.65)	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。体部外面ナゲ。内面放射状ヘ リミガキ。	杯部ほぼ完全 一部反転	
97 土師器 高杯	南区 NR 2 上層	底付	(10.7)	桃茶色	やや粗	良好	脚部外側ヘラミガキ、内面ヘラケズリ。底部 ヨコナギで内面下位ハケ残る。	脚部少 一部反転	
98 土師器 壺	北区 NR 2 下層		(10.8)	明乳灰色	滑	良好	口縁部内面・脚部外面ヘラミガキ。	口縁少 反転	
99 土師器 壺	北区 NR 2 下層		(10.6)	暗灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。四部外面ハケ後ヘラミガキ、 内面ヘラケズリ。	1% 反転	
100 土師器 壺	北区 NR 2 下層		2.8g以下	茶褐色 赤茶色	の砂粒を含む	良好	四部外面ヨコナギ。底体部外面ナゲ、内面ヘラ ケズリ。	口縁少 欠損	
101 土師器 壺	北区 NR 2 下層		(13.9)	明乳褐色	滑	良好	口縁部ヨコナギ。四部外延ナゲ、内面ヘラケズ リ。外縁埋付着。	1% 反転	
102 土師器 甕	北区 NR 2 下層		(13.8)	暗栗褐色 茶褐色	滑1.5cm以下 茶褐色 赤茶色	白野 含む	口縁部ヨコナギ。底部内面ヘラケズリ。外縁 端付着。	脚部少 反転	
103 土師器 甕	北区 NR 2 下層		(14.4)	乳灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。四部外面ナゲ、内面ナゲ。外 縁端付着。	1% 反転	
104 土師器 甕	北区 NR 2 下層		(19.2)	暗茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。底部外面ナゲ、内面ヘラケズ リ。	口縁少 反転	
105 土師器 甕	北区 NR 2 下層		(17.2)	黄茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。底部外面タクキ、内面ナゲ。	1% 反転	
106 甕 台付甕	北区 NR 2 下層	底付	7.2	明赤褐色	滑 の砂粒を含む	良好	脚部外面タクキ後上位ナゲ、内面ハケ後下位 ナゲ。	脚部少 欠損	
107 土師器 臺盆	北区 NR 2 下層		9.2	淡桃褐色	滑	良好	脚部ヘラミガキ。脚部外面ヘラミガキ、内面ハ ケ後ナゲ。脚部穿孔あり。	1% 部反転	
108 土師器 高杯	北区 NR 2 下層		(22.1)	明乳茶色	滑	良好	口縁部ハケ後ヘラミガキ。体部外面ナゲ、内面 ヘラミガキ。	1% 反転	
109 土師器 高杯	北区 NR 2 下層			淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部外面ナゲ後ヘラミガキ、内面ヘラミガキ。 体部外面ハケ内面ヘラミガキ、脚部外面ヘラ ミガキ、内面ナゲ。	1% 一部反転	
110 土師器	北区 NR 2 下層		(29.5)	乳茶色	滑	良好	口縁部ヨコナギ。口縁部ハケ後ヘラミガキ。	脚部少 反転	
111 土師器 高杯	北区 NR 2 下層		(22.8)	淡茶灰色	滑	良好	口縁部ハケ後ヘラミガキ。	脚部少 反転	
112 土師器 壺	南区 NR 2		8.6 7.4	明乳茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。底体部外面ナゲ、内面ナゲ。 体部膨大径 9.1	1% 欠損	
113 土師器 壺	南区 NR 2		(10.7)	灰茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナギ。底体部外面ナゲ、内面ヘラケ ズリ。	1% 反転	
114 土師器 壺	南区 NR 2		(10.2)	暗灰茶色	やや粗	良好	ヨコナギ。	1% 反転	
115 土師器 壺	南区 NR 2		(10.2)	淡茶褐色	滑	良好	口縁部ヨコナギ後内面ヘラミガキ。	1% 反転	

遺物番号 可燃度等	基種	出土地點 区	深度(cm) (復元高)	口径	色調 外 内	胎 土	焼成	技法・形態等の特徴		参考
								口縁部	底	
116	土師器	南区	(18.4)		淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。底部外面ハケ、内面ナゲ。		極小 反転
117	土師器	南区 内 面 曲	(20.5)		乳褐色	密	良好	不明。		口縁部 反転
118	土師器	南区 内 面 直	(11.2) 16.4		乳茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。底部ナゲ。保付着。 底部膨大延長。	11縁矢扣 一部反転	
119	土師器	南区 内 面 直	12.7		灰褐色	密	良好	口縁部ココナデで外面ハケ残る。底部外面ハケ 残ナガ、内面ヘラケズリ。外面保付着。	11縁矢扣 反転	
120	土師器	南区 内 面 直	(14.4)		灰灰褐色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。底部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	11縁矢扣 反転	
121	土師器	南区 内 面 直	(13.85)		乳茶色	やや粗	良好	ナゲ。底部外面タタキ残る。	11縁矢扣 反転	
122	土師器	南区 内 面 直	(17.0)		暗灰茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。	11縁矢扣 反転	
123	土師器	南区 内 面 直	(13.4)		灰茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。口縁部外因下位に1条の比 較。底部外面ハケ、内面ヘラケズリ。	11縁矢扣 反転	
124	土師器	南区 内 面 直	(15.0)		乳茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。底部外面ハケ、内面ナゲ。	11縁矢扣 反転	
125	土師器	南区 内 面 直	(13.3)		乳茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。底部外面ナゲ、内面ヘラケズ リ。	11縁矢扣 反転	
126	土師器	南区 内 面 直	(18.6)		乳茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。同部外面タタキ、内面ナゲ。	11縁矢扣 反転	
127	土師器	南区 高杯	(15.6)		乳灰褐色	密	良好	口縁部ココナデ後内面放射状ヘラミガキ。	11縁矢扣 反転	
128	土師器	南区 高杯	13.7		暗灰茶色	やや粗	良好	杯部外側ハケ後口縁部ナゲ、内面放射状ヘラミ ガキ。内面保付着。	杯部充存	
129	土師器	南区 高杯	12.45		暗乳茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。底部ナゲ。杯部内面放射状ヘ ラミガキ。	杯部充存	
130	土師器	南区 高杯	(13.0)		灰茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。底部ナゲ。	杯部充存 一部反転	
131	土師器	南区 高杯	12.2		暗灰茶色	やや粗	良好	底部ナゲ。底部～腰部間外面ハケ。口縁部外 面黒斑。	杯部充存 一部反転	
132	土師器	南区 高杯	(13.4)		暗乳茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。底部ナゲ。	杯部充存 一部反転	
133	土師器	南区 高杯	(17.3)		淡乳茶色	やや粗	良好	口縁部ココナデ。	11縁矢扣 反転	
134	土師器	南区 高杯	(16.3)		灰灰褐色	密	良好	ヘラミガキ。	杯部充存 一部反転	
135	土師器	南区 高杯	(12.1)		灰乳茶色	やや粗	良好	底部外面ヘラミガキ。脚部内面しづり目。	脚部充 一部反転	
136	土師器	南区 高杯	10.0		灰茶色	やや粗	良好	脚部外側ヘラミガキ、内面しづり目。脚部コ コナデ。	脚部充存	
137	土師器	南区 高杯			暗茶褐色	やや粗1～3 mmの砂粒を多 く含む。	良好	外面ナゲ。内面ヘラケズリ。	一部反転	

## 第4章 まとめ

今回の調査では古墳時代前期から平安時代の遺構・遺物を検出した。

遺構としては平安時代後期から木頃の井戸等の集落遺構があり、西側の第8次調査第2調査区で確認されている平安時代末～鎌倉時代の集落の東への拡がりが確認された。曲物井戸SE1は、数回の掘り直しが行われた後に埋められたよう、遺物の出土状況は井戸祭祀の様相を知るうえで重要なものであった。またピット等の建物に関連する遺構は認められず、当地は居住域としては利用されていなかった可能性がある。

河川堆積土からは古墳時代前期から中期の遺物が出土している。東部に隣接する第8次調査第3調査区と同様、ほぼ調査区の全域を占めるNR2の検出により、当地は古墳時代中期頃までは大規模な河川の流路上にあることが確認された。北西部の同第2調査区北部で検出されている古墳時代中期の集落域は、当地までは及ばないようである。この集落はNR1・2により形成された自然堤防上に営まれていたと考えられ、遺構面の標高は当調査地よりも30cm～50cm高くなっている。

NR2からは横櫛が出土している。古墳時代に盛行する櫛は豊櫛で、束歯式のものである。挽歯式の横櫛の最古例では6世紀末の資料として千葉県企鵠塚古墳出土品がある。また7世紀代では川原寺跡・飛鳥京跡、8世紀以降では平城京跡等で横櫛が一般的になる。これらの例はいずれも歯の細かいもので、1cm当たり7～8本を数え、8世紀以降さらに細かくなる傾向があり10本以上を数えるという。歯の構造に限ってみると、当横櫛はこれらとは趣を異にしており、弥生時代後期の挽歯式の豊櫛である大阪府茨城市東奈良遺跡・同東大阪市巨摩磨寺遺跡出土例に類似するものである。今回出土した横櫛は、形態的には横櫛の初現であり、歯の製作技法はこれら弥生時代後期の挽歯式の豊櫛の系譜上に位置付けられるものと考えられる。<sup>註5</sup>

古墳時代後期から平安時代中期までについては明確な遺構は確認されなかったが、包含層には少量であるがこの時期の遺物がみられることから、集落は存続していると考えられ、後世の整地等により削平されているのであろう。

なお、当調査地から東に約30mの第18次調査では、標高6.6m～7.0mで弥生時代後期の水田、6.0m以下で弥生時代中期の遺構面が検出されている。今回の調査では標高約6.0mまでは河川堆積が統いており、弥生時代後期の集落は当地までは拡がらないか、あるいは河川により削平されている可能性が高い。

註

- 註1 姫八尾市文化財調査研究会『小阪合遺跡』1990 姫八尾市文化財調査研究会報告26
- 註2 姫八尾市文化財調査研究会『八尾市文化財調査研究会年報 平成元年度』1990  
御八尾市文化財調査研究会報告28
- 註3 御大阪文化財センター『久宝寺南(その2)』1987
- 註4 龟田 博「祭櫛」(『末永先生米壽記念献呈論文集』樋原考古学研究所内末永先生米壽記念会)
- 註5 前掲書 註4  
奈良国立文化財研究所『木器集成図録 近畿古代篇』1984  
本間元樹「弥生時代の櫛」(『大阪府下埋蔵文化財研究会(第28回)資料』1993)

# 図 版



南区 全景（西から）



北区SW 1（上が南）



南区 SE 1 上層遺物出土状況（西から）



南区 SE 1 曲物（南から）



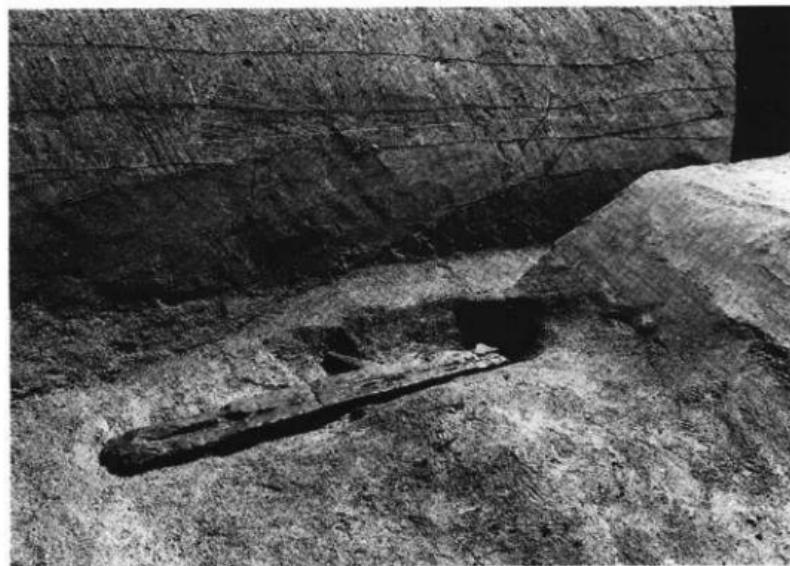
北区 NR 1 全景（北から）



北区 NR 1 横溝 (63) 出土状況（南東から）



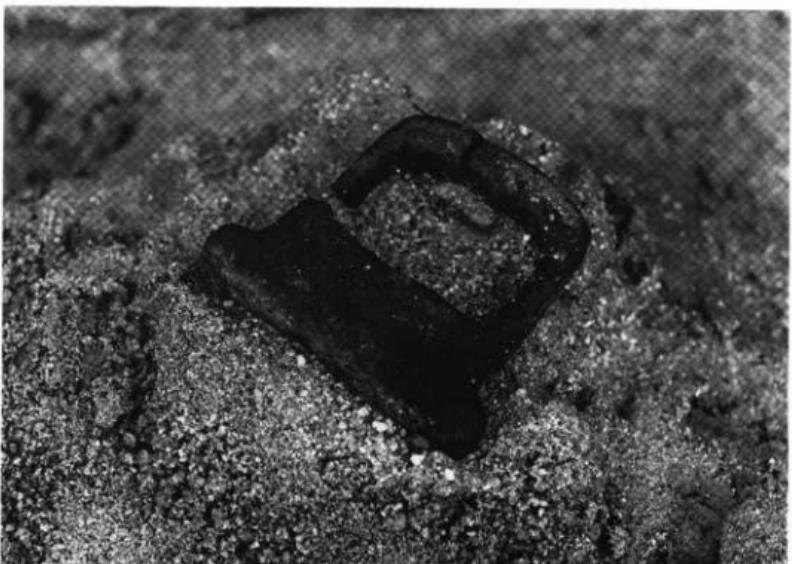
南区 NR 2 全景（西から）



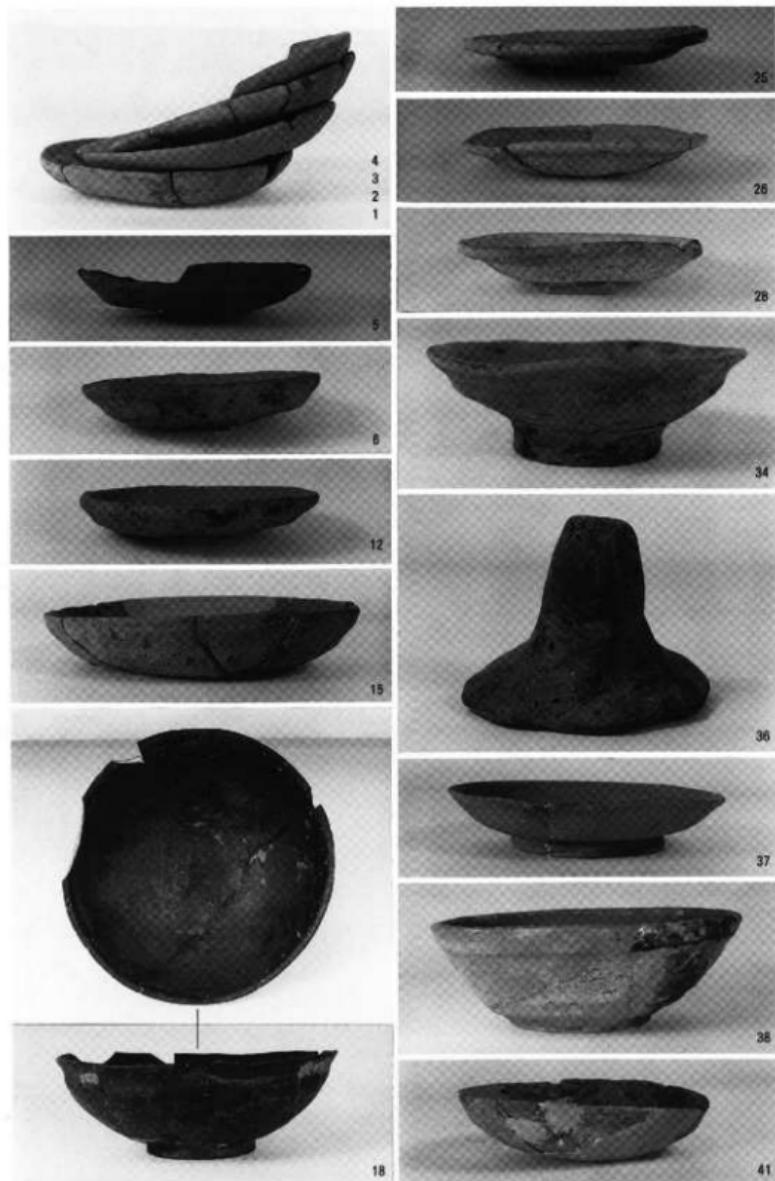
北区 NR 2 木製品（138）出土状況（北東から）



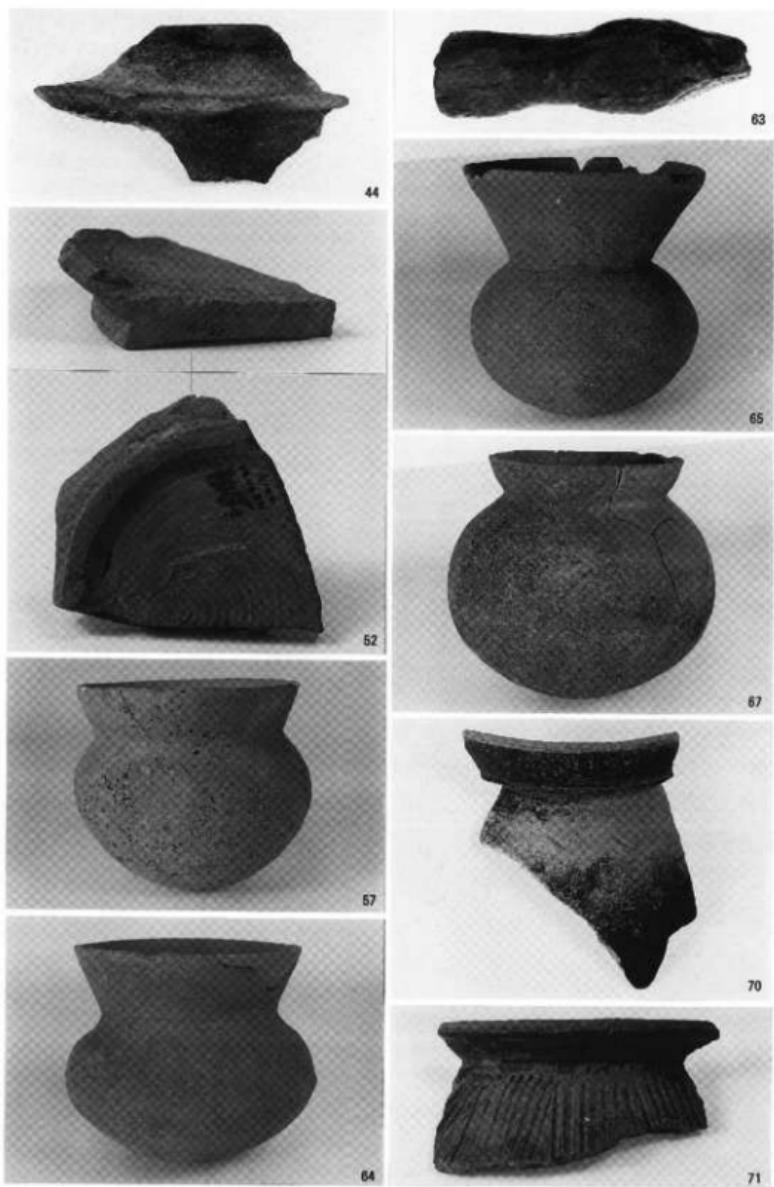
北区 NR 2 横櫛 (139) 出土状況 (上が北東)



南区 NR 2 木製品 (140) 出土状況 (西から)



1~4 : SW 1    5~18 : SE 1    25~38 : SK1    41 : SD 1



44 : SD 1      52 : 南区 第4層      57~63 : NR 1      64~71 : NR 2 上層 (北区)



73



87



88



75



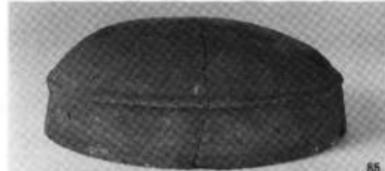
76



89



90

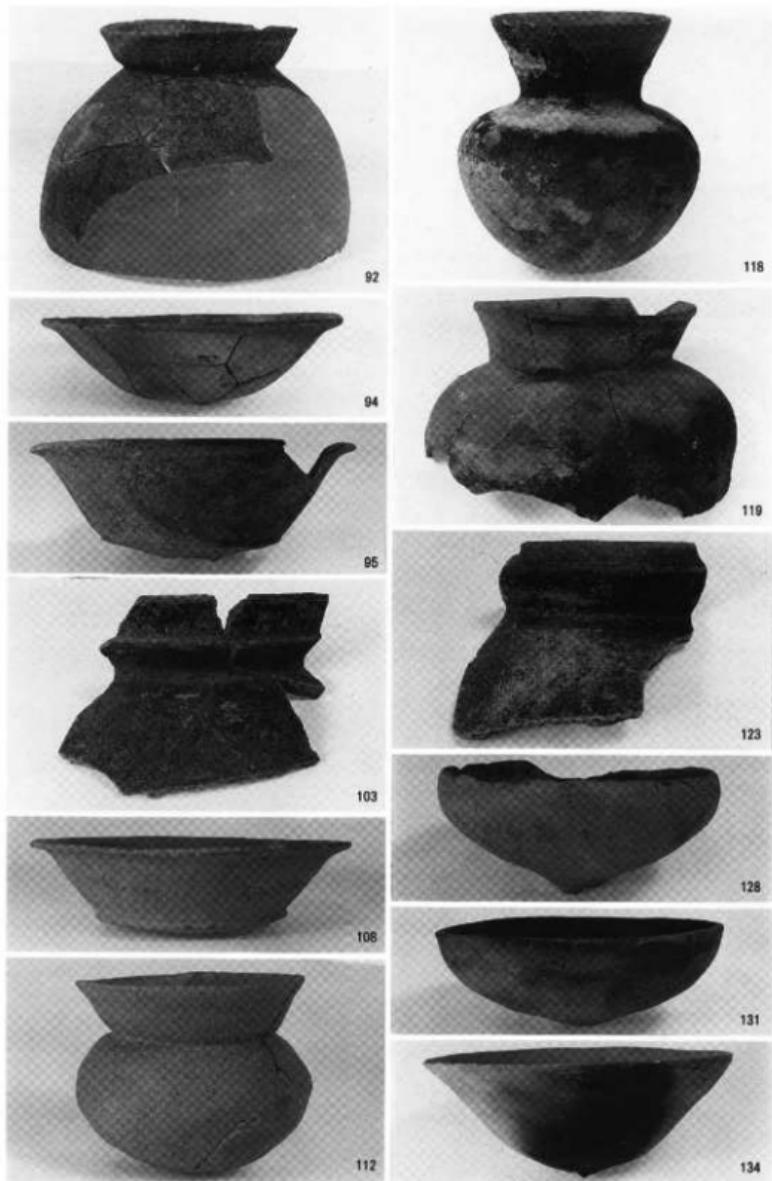


85



91

73~76 : NR 2 上層 (北区)      84~91 : NR 2 上層 (南区)



92~95 NR 2 上層（南区）

103・108 : NR 2 下層（北区）

112~134 : NR 2 (南区)



139



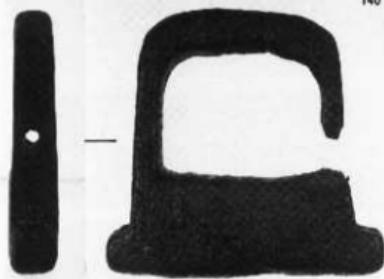
141



142



143



140



138

138~143 : NR 2

IV 東郷遺跡第33次調査（T G 90-33）

## 例 言

1. 本書は、八尾市桜ヶ丘1丁目39で実施した共同住宅建設に伴う東郷遺跡第33次（TG90-33）の発掘調査報告である。
1. 本書で報告する東郷遺跡第33次の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が前田安弘氏から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成2年4月10日～5月10日にかけて実施した。調査担当は4月10日～30日まで青木勘時、その後、調査終了まで高萩千秋・岡田清一があたった。調査面積は約200m<sup>2</sup>である。
1. 本書に関わる業務は、遺物実測一山萬そのみ・西岡千恵子、図面レイアウト・トレース一亀田（旧姓村田）英子・市森千恵子、遺物写真・本文の執筆一高萩が担当した。

## 本 文 目 次

1.はじめに	69
2.調査概要	70
1) 調査の方法と経過	70
2) 基本層序	70
3) 検出遺構と出土遺物	71
4) 出土遺物観察表	95
3.まとめ	100

## 挿 図 目 次

第1図 調査地位置図及び周辺図	69
第2図 調査地設定図	70
第3図 基本層序柱状図	71
第4図 遺構平面図	72
第5図 SW-1平面図	73

第6図 SW-1 出土遺物実測図1	74
第7図 SW-1 出土遺物実測図2	75
第8図 SK-1 出土遺物実測図	76
第9図 SK-2 平断面図	76
第10図 SK-2 出土遺物実測図	77
第11図 SK-3 平断面図	78
第12図 SK-4 平断面図	78
第13図 SK-4 出土遺物実測図	78
第14図 SK-5 平断面図	78
第15図 SK-6 平断面図	79
第16図 SK-7 平断面図	79
第17図 SB-1 平断面図	80
第18図 SB-2 平断面図	81
第19図 SB-3 平断面図	82
第20図 SB-4 平断面図	83
第21図 SB-5 平断面図	84
第22図 SE-1 平断面図	85
第23図 SE-1 出土遺物実測図1	86
第24図 SE-1 出土遺物実測図2	87
第25図 小穴内出土遺物実測図	92
第26図 遺構に伴わない出土遺物実測図	94

## 図 版 目 次

- 図版 一 遺構写真 調査区全景（南から）
- 図版 二 遺構写真 上 SW-1 (西から)  
下 古墳時代前期の遺構（南から）
- 図版 三 遺構写真 上 SK-1 (北から)  
下 SK-1 完掘（南から）
- 図版 四 遺構写真 上 SK-4 (東から)  
下 SK-7 (西から)

図版 五 遺構写真 上 調査区南部小穴群（北から）

下 S E - 1 (南から)

図版 六 遺構写真 上 S E - 1 柱内遺物（南から）

下 S E - 1 断ち割り（東から）

図版 七 出土遺物 S W - 1

図版 八 出土遺物 S K - 1 41・44・47・50・51・52

S E - 1 68

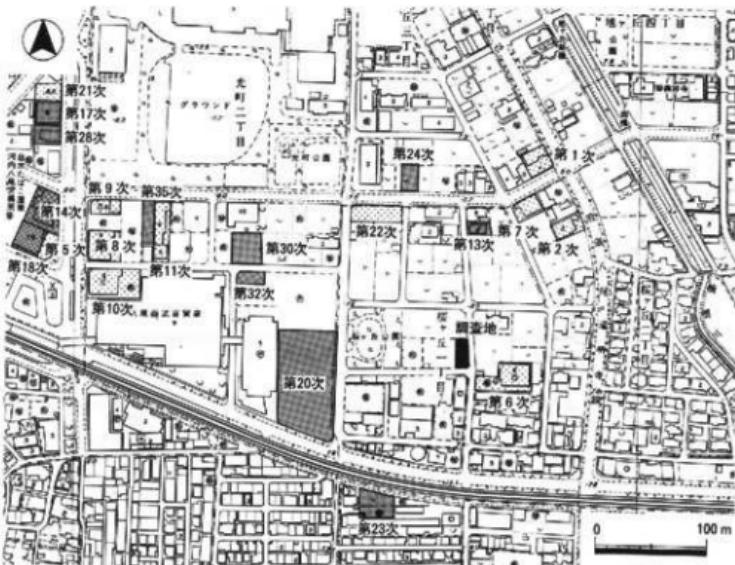
## IV 東郷遺跡第33次調査 (T G 89-33)

### 1. はじめに

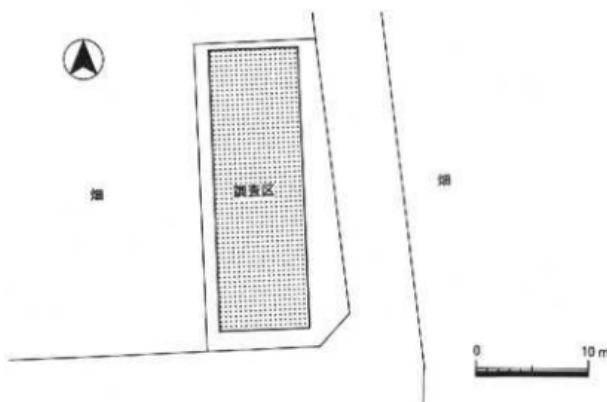
東郷遺跡は、八尾市の中央部にある本町1・7丁目、東本町1～5丁目・北本町2丁目・光町1・2丁目・桜ヶ丘1～4丁目、莊内町1・2丁目一带に存在する弥生時代～近世に至る複合遺跡である。地形の立地では旧大和川の主流である玉串川と長瀬川に挟まれた沖積地上に位置する。標高は現在 (T.P.+ ) 8～9 m を測る。

周辺には当遺跡と同一沖積地上である複合遺跡が密集している。隣接する遺跡では西に佐堂遺跡・宮町遺跡、南に成法寺遺跡・矢作遺跡、南東に小阪合遺跡・中田遺跡、北に山賀遺跡、北東に萱振遺跡が確認されている。

当遺跡では現在までに数十次にわたる発掘調査が行われており、多大な成果をあげている。特に古墳時代初頭（庄内式期）から前期（布留式期）にかけての集落構造が確認されている。当遺跡推定範囲の中央北部（現在近鉄大阪線八尾駅前北側）で堅穴住居群等で構成される居住域と方形周溝墓群等で構成される墓域が検出されており、当時の集落構成を知る上で貴重な資料が今までに得られている。



第1図 調査地位置図及び周辺図



第2図 調査区設定図

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

今回の発掘調査は、共同住宅建設に伴うもので、八尾市教育委員会文化財課・当調査研究会が当遺跡で実施した第33次調査にあたる。

調査地は、当遺跡内の東部にあたり、第7次調査地から西へ約40mの所に位置している。その調査では古墳時代前期～鎌倉時代に至る遺構・遺物が確認されている。また、平成3年度に市教委が実施した遺構確認調査では古代寺院があったことを証明する7世紀～9世紀にかけての上器・瓦が多量に出土している。

調査区は、建築工事の予定部分(20×10m)に設定し、現地表下0.5mまでの土層を機械掘削した。以下、0.5mまでの土層を調査対象として人力掘削で実施した。

調査の結果、弥生時代後期～江戸時代に至る遺構・遺物を検出した。

### 2) 基本層序

調査区の基本層序は、第2図に示すとおりで、現地表下約2.5mまでに存在する7層を抽出して基本層序とした。

第1層 盛土。層厚約50cm。区画整理事業の造成により整地した土層である。

第2層 旧耕土。層厚15cm。調査区北端部は低く、約40cmの段差がみられる。

第3層 床土。層厚10cm。調査区南部では上面から江戸時代の落込み状遺構が切り込んでおり、第7層上面まで達している。

第4層 黄褐色(10YR 5/6)砂質土。層厚30cm。平安時代前期の整地層で、調査区中央部では鎌倉時代の落込み状遺構が上面から切り込んでおり、第6層まで達している。

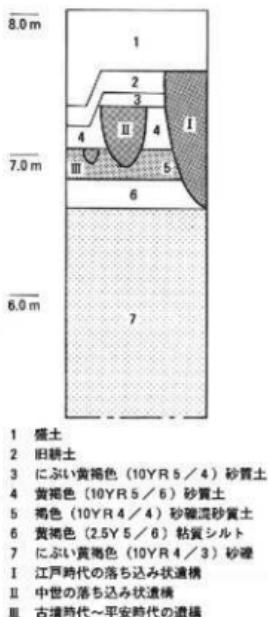
第5層 褐色(10YR 4/4)砂疊混砂質土。層厚20cm。弥生時代後期の包含層で、この上面では古墳時代前期(布留式古相)に比定される遺構及び奈良～平安時代に比定される遺構を検出した。

第6層 黄褐色(2.5Y 5/6)粘質シルト。層厚15～20cm。

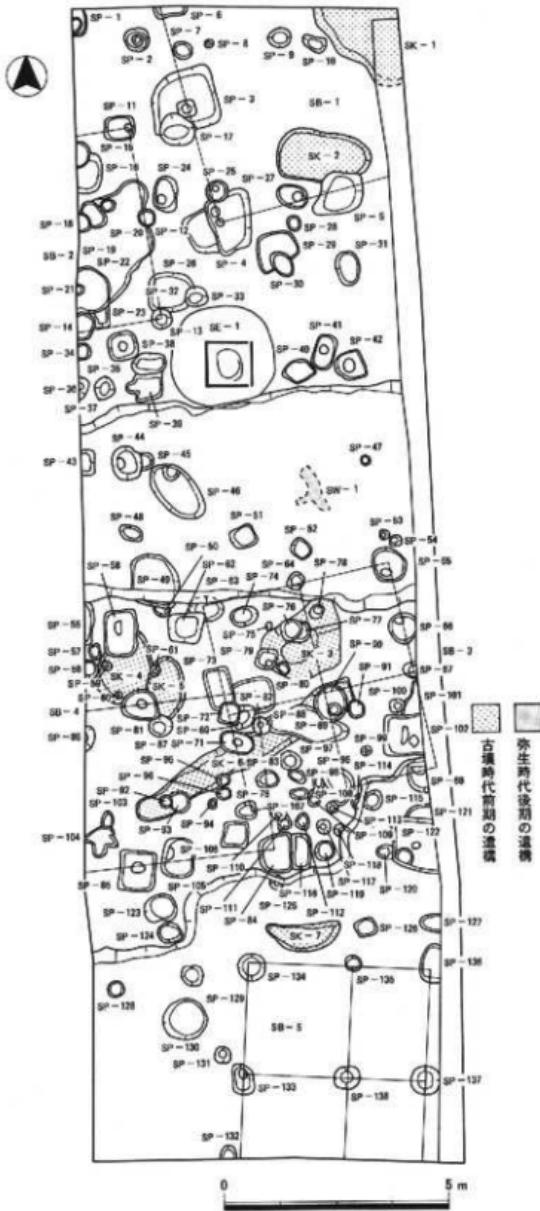
第7層 にぶい黄褐色(10YR 4/3)砂疊。層厚150cm以上。弥生時代後期以前の河川の堆積土である。層厚及び下層状況を確認するため、調査面から2m程度掘削したが、砂層が堆積するのみであった。また、遺物についても検出できなかった。

### 3) 検出遺構と出土遺物

調査の結果、弥生時代後期～近世に至る遺構・遺物を検出した。遺構は第6層上面(6.8m前後)で検出した弥生時代後期に比定される土器集積1箇所(SW-1)、第5層上面(7.0m前後)で検出した古墳時代前期(布留式古相)に比定される土坑7基(SK-1～SK-7)、奈良～平安時代に比定される掘立柱建物5棟(SB-1～SB-5)、小穴(掘立柱建物の柱穴も含む)138個(SP-1～SP-138)、平安時代前期に比定される井戸1基(SE-1)、鎌倉時代に比定される落込み状遺構1箇所(SO-1)、江戸時代に比定される落込み状遺構1箇所(SO-2)を検出した。出土遺物は、遺構及び包含層内から弥生時代後期～江戸時代に至る遺物をコンテナ箱にして12箱分出土した。以下、各時代の遺構について記す。



第3図 基本層序柱状図



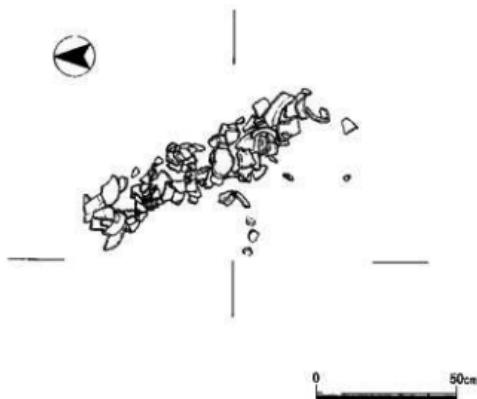
第4図 遺構平面図

弥生時代後期

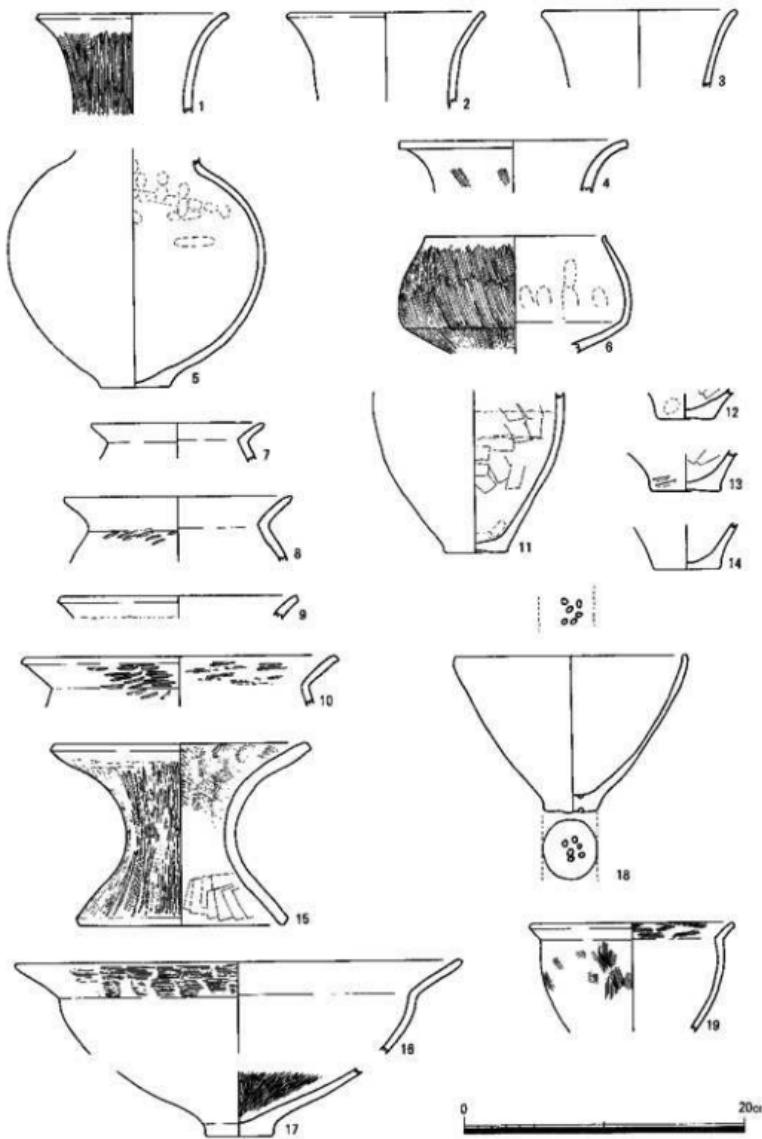
土器集積 (SW)

SW-1

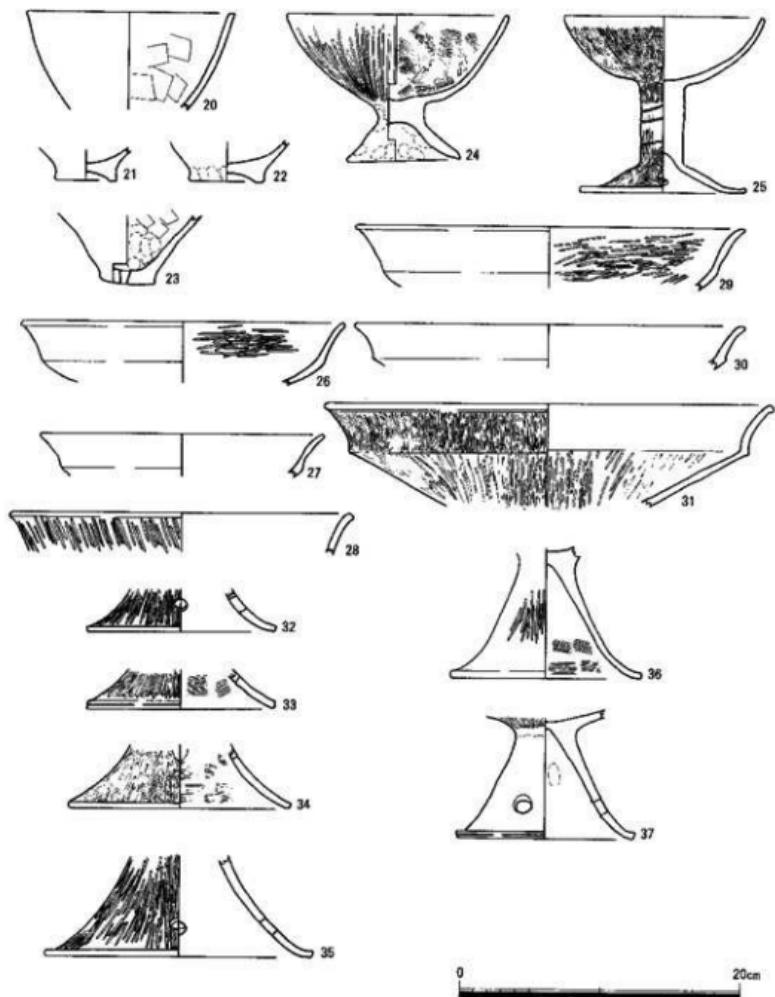
調査区中央部の第6層上面で検出した土器集積である。掘形の形状は確認されなかった。おそらく後世によって削平されたのであろう。検出範囲は東西30cm、南北80cmの長楕円形状で、上器はすべて破片化していた。個体数は約37点前後を数え、器種には壺(1~5)・甕(7~14)・鉢(16~21)・有孔鉢(23)・高杯(24~37)・器台(15)等の弥生時代後期末の上器片がみられる。このような検出状況は当調査区より北部へ約150mの第23次調査(TG88-23)の調査でも確認されており、広範囲に弥生時代後期末の生活面が存在するものと思われる。



第5図 SW-1 平面図



第6図 SW-1出土遺物実測図1



第7図 SW-1出土遺物実測図2

古墳時代前期

土坑（SK）

SK-1

調査区北東隅で検出した。北東部は調査区外に至り、平面の形状は不明である。規模は検出部で、東西1m以上、南北0.8m以上、深さ20cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は2層に分かれている。第1

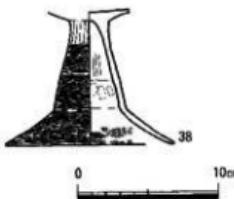
層・第2層である。遺物は、内部から布留式古相に比定される高杯（38）とその他に壺等の小片がごく少量出土している。

SK-2

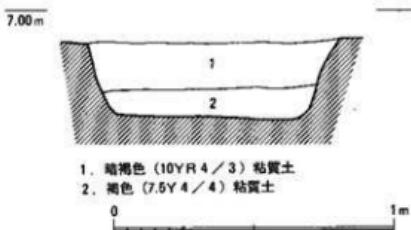
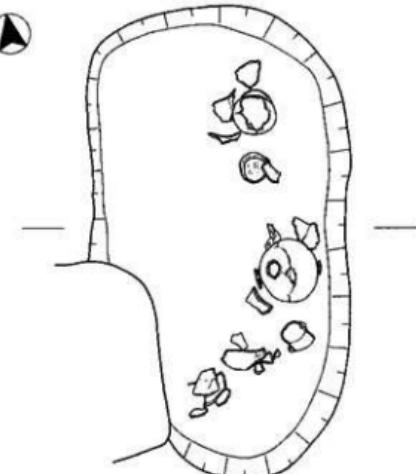
調査区の北東部で検出した。上部は整地層及び現在の土層によつて削平されている。平面の形状は椭円形を呈し、南東部は平安時代前期の柱穴（SP-12）に一部切られている。規模は検出部で、東西1.8m、南北0.9m、深さ30cmを測る。断面は半円形を呈する。堆積土は暗褐色（10YR 4/3）粘質土・褐色（7.5Y 4/4）粘質土である。遺物は、検出面よりやや浮いた状態で布留式古相に比定される壺（39～41）・小型丸底壺（51・52）・庄内式壺（42・43）・布留式壺（45～47）・東部漸戸内系壺（48～50）と南部でSP-12に切られている部分でも布留式壺（44）・鉢（53）の破片が出土している。

SK-3

調査区中央部の東側で検出した。平面の形状は椭円形を呈する。規模は検出部で、東西1.5



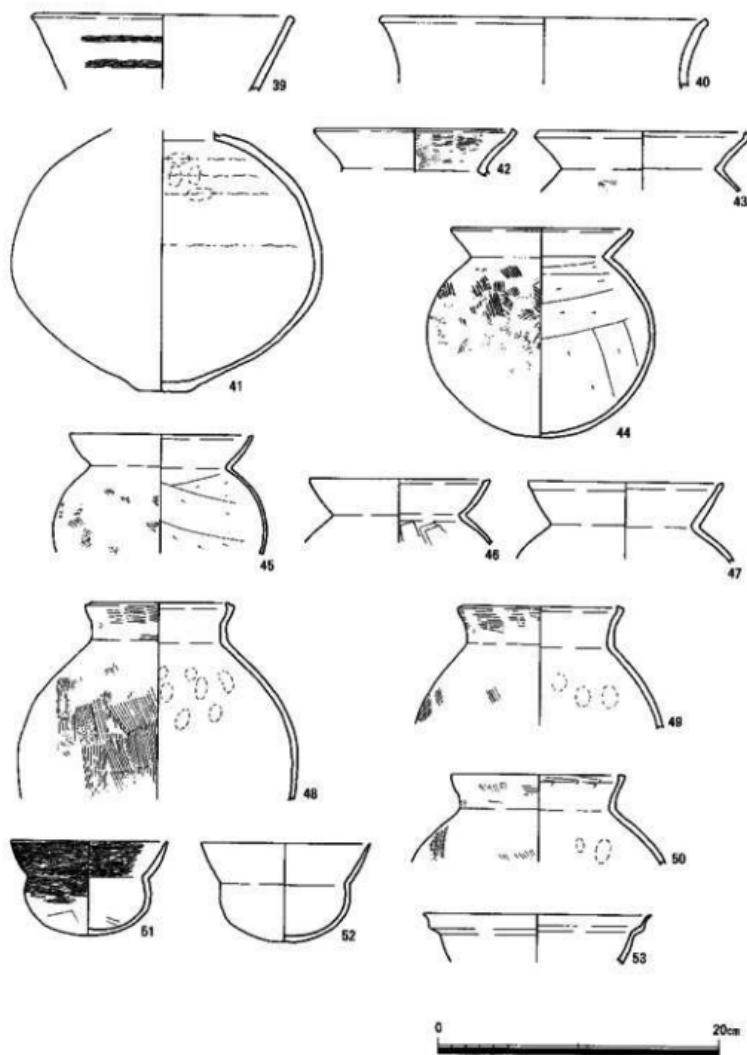
第8図 SK-1出土遺物実測図



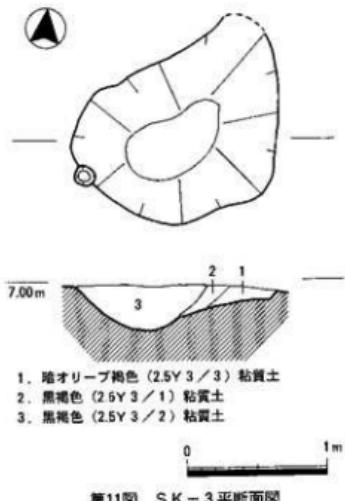
1. 暗褐色（10YR 4/3）粘質土

2. 褐色（7.5Y 4/4）粘質土

第9図 SK-2 平断面図



第10図 SK-2出土物実測図



第11図 SK-3 平断面図

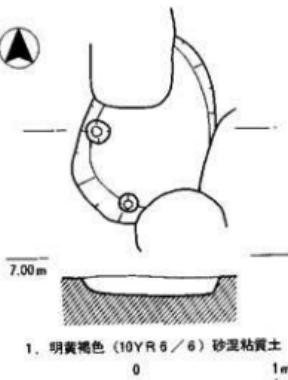
m、南北1.15m、深さ20cmを測る。堆積土は暗オリーブ褐色 (2.5Y 3 / 3) 粘質土・黒褐色 (2.5Y 3 / 1) 粘質土・黒褐色 (2.5Y 3 / 2) 粘質土である。遺物は、内部から布留式古棺に比定される布留式甕等の小片がごく少量出土している。

#### SK-4

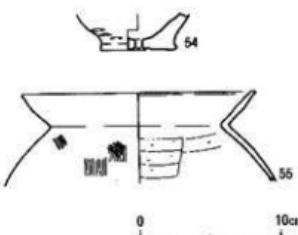
調査区中央の西側で検出した。平面の形状は橢円形を呈する。SK-5を切り、平安時代の小穴に切られている。規模は東西0.7m、南北1.15m、深さ15cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は明黄褐色 (10YR 6 / 6) 砂混粘質土である。遺物は、内部から布留式古棺に比定される有孔鉢 (54)・布留式甕 (55) のほか小片で上器がごく少量出土している。

#### SK-5

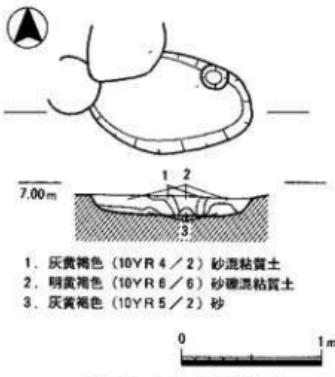
調査区中央の西側で検出した。東部はSK-



第12図 SK-4 平断面図

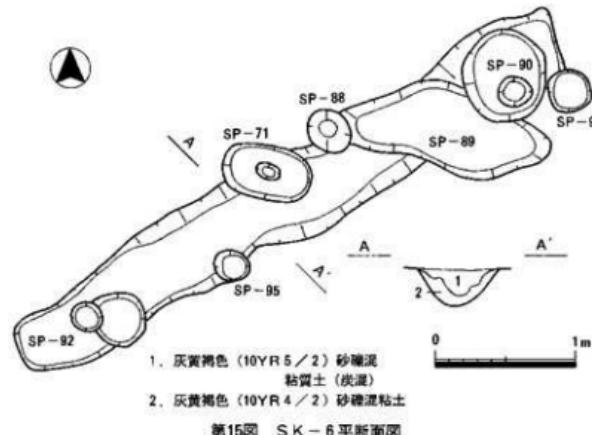


第13図 SK-4 遺物実測図



第14図 SK-5 平断面図

4によって切られ、南部と北部は小穴に切られる。規模は検出部で、東西1m、南北1.4m、深さ20cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土は灰黄褐色(10YR 4/2)砂混粘質土・明黄褐色(10YR 6/6)砂礫混粘質土・灰黄褐色(10YR 5/2)砂で、内部には炭・焼土塊が多量に含まれていた。遺物は、内部から布留式古相に比定される壺・鉢の小片が少量と砥石1点が出土している。



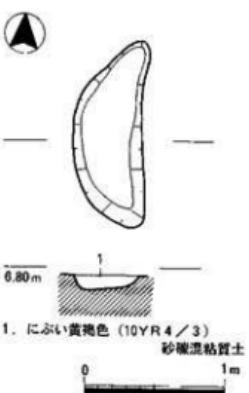
第15図 SK-6 平断面図

### SK-6

調査区のSK-3～SK-5の南部で検出した。平面の形状は南西-北東の方向に長い溝状の形状を呈する。規模は検出部で、長径4.5m、短径0.6mを測る。断面は半円形を呈し、深さは南東側で10cm、北東側で35cmを測る。堆積土は灰黄褐色(10YR 5/2)砂礫粘質土・灰黄褐色(10YR 4/2)砂礫粘土で、内部には炭が多量に含まれていた。遺物は、布留式古相に比定される壺・布留式甕等の小片がごく少量出土している。

### SK-7

調査区南部で検出した。上部は江戸時代の落ち込みで削平されている。平面の形状は偏平な楕円形を呈し、東西1.3m、南北0.5m、深さ15cmを測る。断面は浅い半円形を呈する。堆積土はにぶい黄褐色(10YR 4/3)砂礫粘質土で、内部には炭・焼土塊が含まれていた。遺物は、内部から布留式古相に比定される土師器の小片がごく少量出土している。



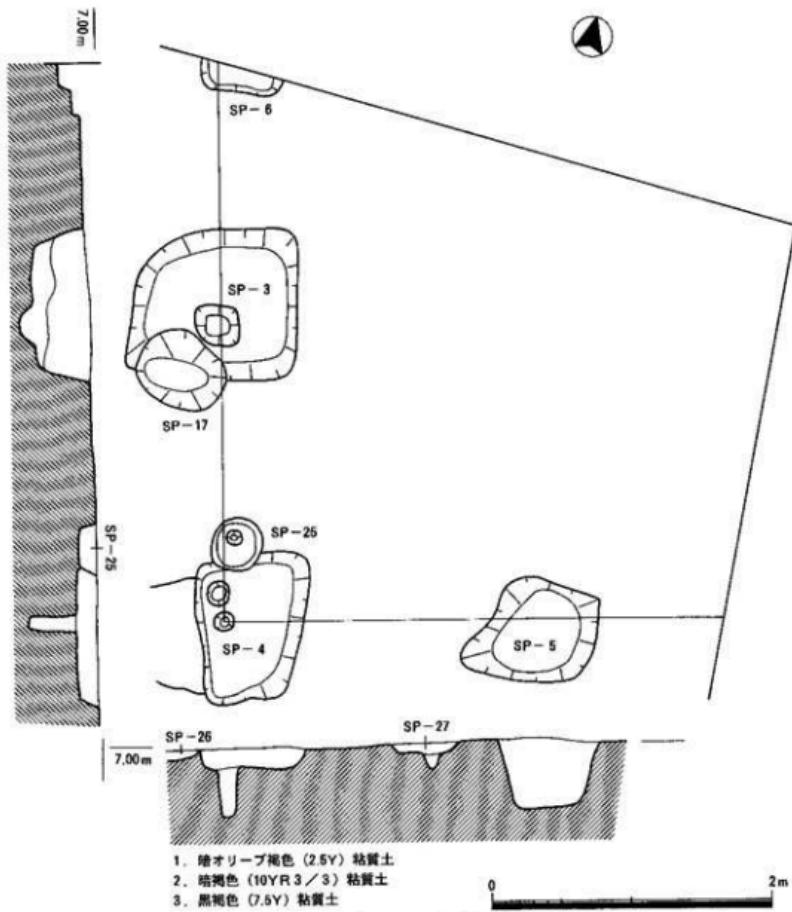
第16図 SK-7 平断面図

奈良～平安時代前期

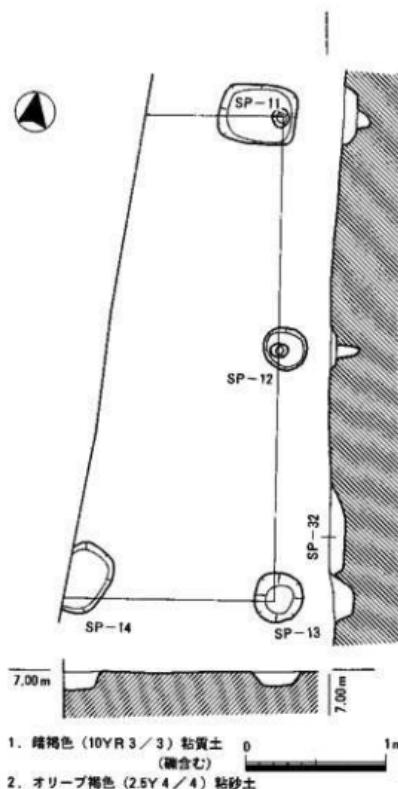
掘立柱建物 (SB)

SB-1

調査区北部で検出した。主軸はほぼ南一北を示し、検出部の規模は2間×1間で南西角の部分のみで、北東部は調査区外に至るものと思われる。間隔は東西が2.0m、南北が2.5mである。柱穴の形状は隅丸方形で、一辺約0.6～1.1m、深さ40～60cmを測る。このSB-1の柱穴は調査区内で最大の規模のものである。



第17図 SB-1 平断面図



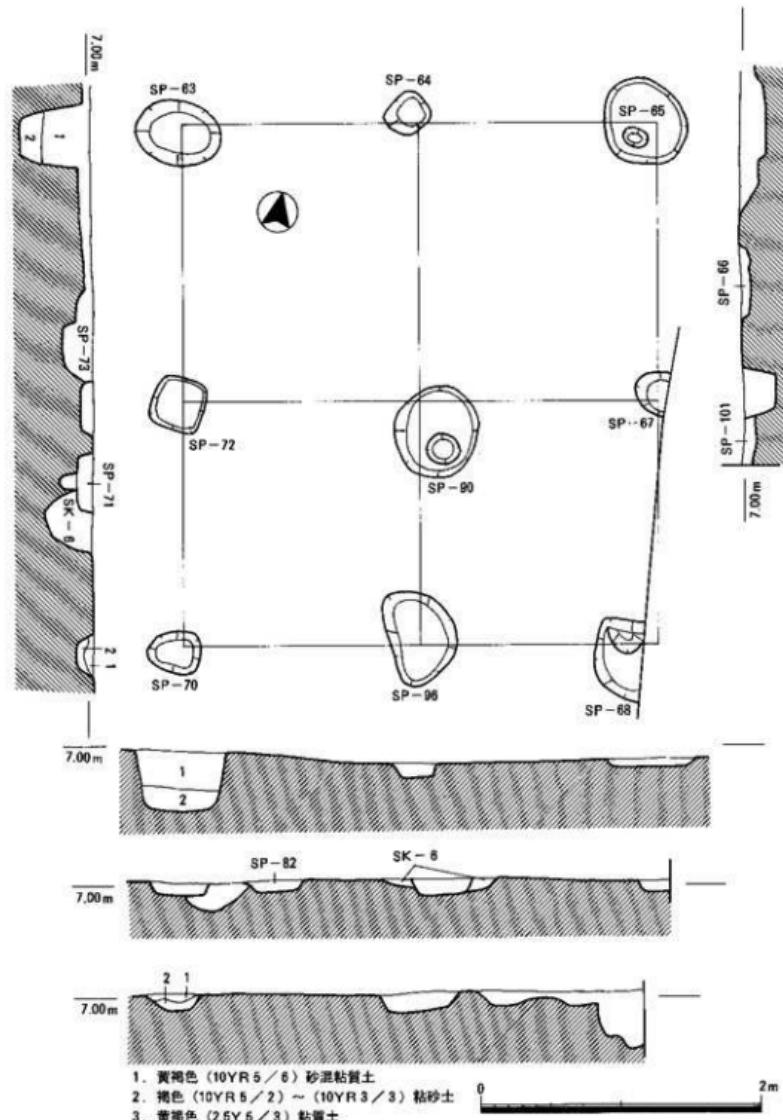
第18図 SB-2 平断面図

### SB-2

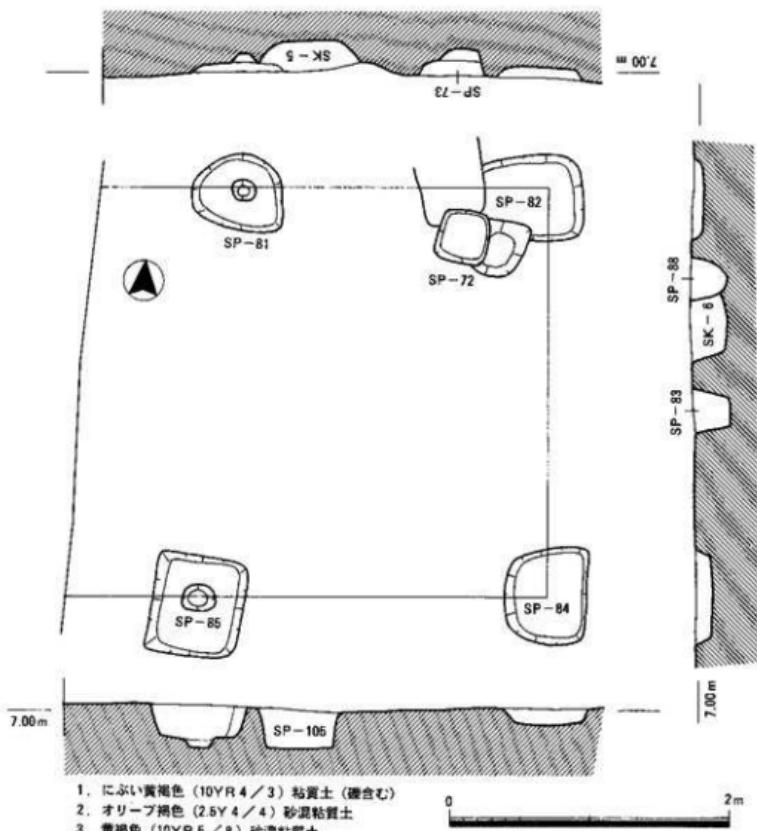
調査区中央で検出した。主軸はSB-1より僅かに東に振っている。検出部の規模は2間(3.4m)×1間(1.5m)以上で、西部は調査区外に至るものと思われる。間隔は東西1.5m、南北が北から1.7m、1.7mである。柱穴の形状は円形及び隅丸方形で、径30~55cm、深さ30~40cmを測る。

### SB-3

調査区中央部で検出した。主軸はSB-2とほぼ同一方向を示し、規模は2間(3.4m)×2間(3.8m)の柱状の建物である。間隔は東西が西から3.35m、3.45m、南北が北から2m、1.8mである。柱穴の平面形状は楕円形及び隅丸方形で、径30~70cm、深さ25~45cmを測る。



第19図 SB-3 平断面図

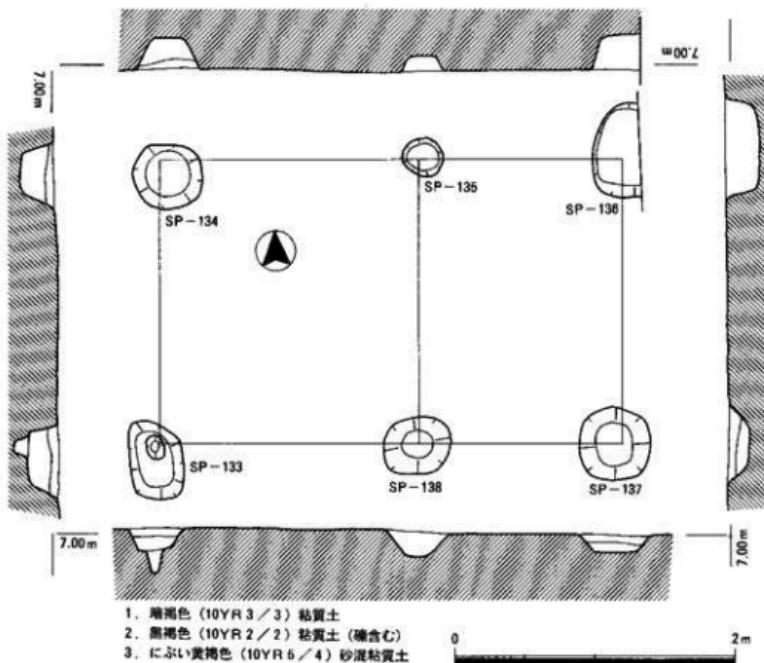


第20図 SB-4 平断面図

断面はU字形である。遺物はSP-69から平安時代のものと思われる上器の小片がごく少量出土している。

#### SB-4

調査区中央部で検出した。主軸はSB-3より僅かに東へ振っている。規模は3間(6m)×2間(4m)である。間隔は東西2m、南北2mである。柱穴の平面形状は隅丸方形及び梢円形で、径40~90cmを測る。断面はU字形及び逆凸形を呈する。遺物は出土しなかった。



第21図 SB-5 平断面図

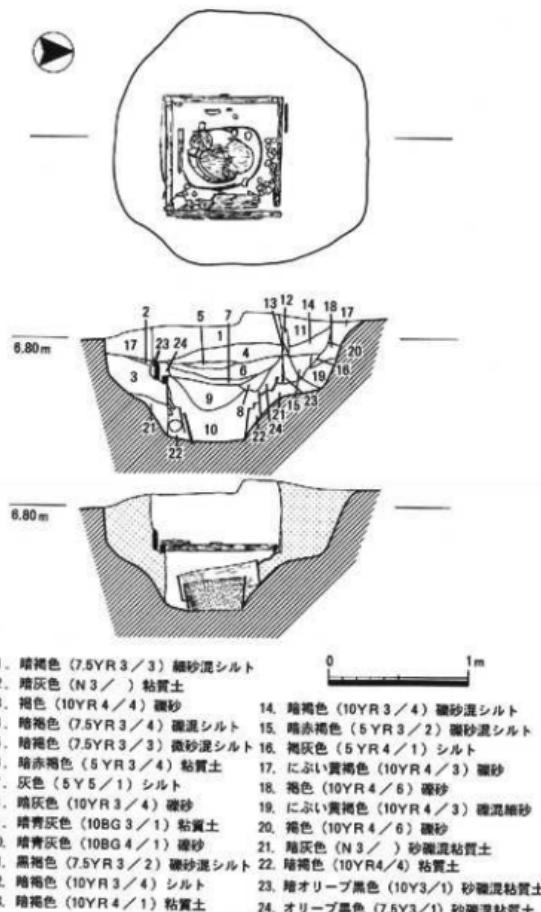
### SB-5

調査区南部で検出した。主軸はSB-4と同方向である。規模は2間(3.3m)×1間(2m)以上である。間隔は東西が西から1.9m、1.4m、南北2mである。柱穴の平面形状は楕円形及び隅丸方形を呈し、径25~65cm、深さ20~40cmを測る。断面はJ字形を呈する。遺物は小穴内から平安時代のものと思われる土器の小片がごく少量出土している。

### 井戸 (SE)

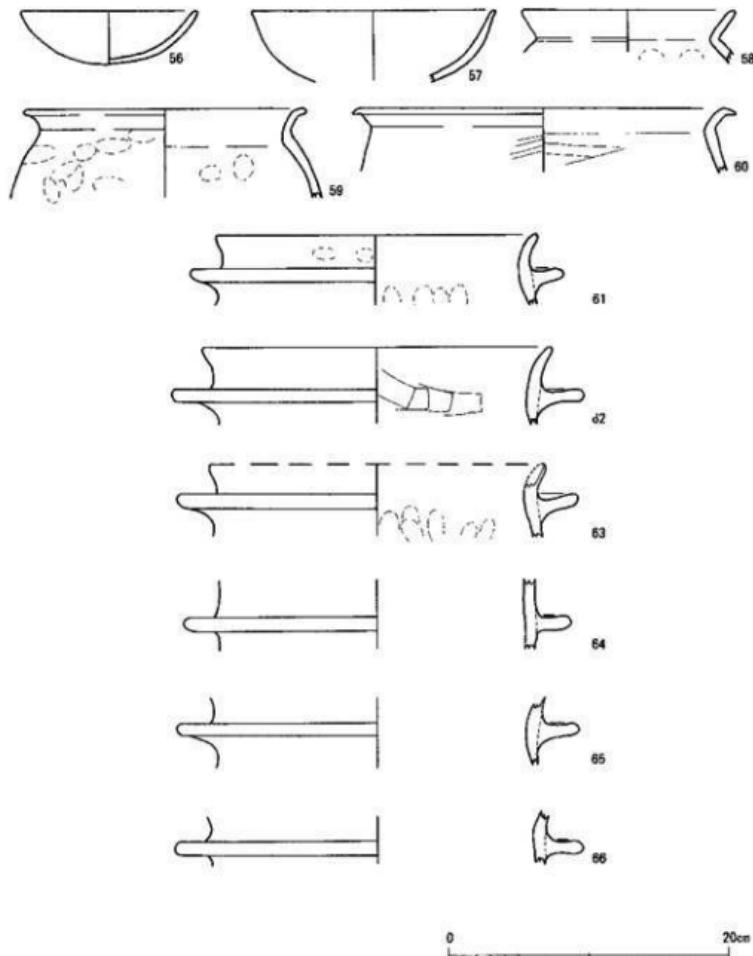
### SE-1

調査区中央北で検出した井戸側を備えた井戸である。平面の形状は、掘形が円形で径1.75m、井戸側の上部が方形で一边0.9mを測る。下部では南北に長い楕円形の曲物(1段目)、さらにその中に入り込んだようになったもう一つの円形の曲物(2段目)が備え付けていたのが確認

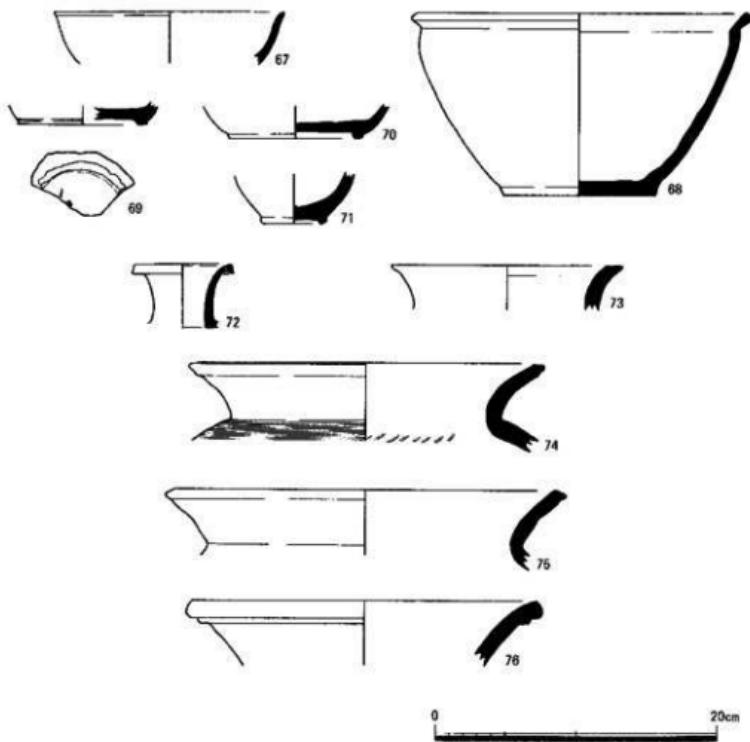


第22図 SE - 1 平断面図

された。遺物は、掘形内から古墳時代後期～奈良時代に比定される土師器の杯（56・57）・壺（58～60）・羽釜（61～66）・須恵器の杯（67・69・70）・鉢（71）・壺（72）・壺（73～76）破片、井戸側内から奈良～平安時代に比定される須恵器の鉢（68）1点、底付の出物（径30cm、高さ8cm）1点と、土器の小片、木片がごく少量出土している。また、井戸底から人頭大の石1点が出土している。



第23図 S E - 1 出土遺物実測図 1



第24図 SE-1 出土遺物実測図 2

## 小穴 (SP)

SP-1 ~ SP-138

調査区内で138個（掘立柱建物も含む）を検出した。平面の形状は、小さいもの（径20~40cm）には円形が多く、大きいもの（径50~100cm）には隅丸方形が多い。これらの小穴内には柱痕がみられ、多くのものは建物に関連する柱穴であると考えられる。ただ、調査面積の制約があり、調査区内での規則的な配列をもつものは前述した掘立柱建物5棟が確認されただけである。時期は、ほとんどが平安時代前期のものと考えられるが、整地層内には古墳時代後期～奈良時代のものが多く含まれており、小数の小穴には平安時代前期よりやや下るものもあると思われるが、調査では明確にできなかった。

遺物番号	法面(m)			平面形	断面形	堆積土	備考
	長	幅	深さ				
SP-1	38.0	38.0	14.0		逆凸形	に赤い黄褐色砂混粘土・深褐色粘土質土	西側は調査区外に至る。
SP-2	24.0	22.0	20.0	円形	逆台形	褐色砂混粘土・オリーブ褐色粘土質土	柱痕跡1有り。
SP-3	116.0	106.0	48.0	隅丸方形	皿状形	灰褐色砂混粘土質土・灰色砂混粘土質土	SP-17に切られる。柱痕跡1有り。
SP-4	106.0	74.0	48.0	隅丸方形	逆凸形	暗オリーブ褐色粘土質土(礫を若干含む)・深褐色砂混粘土・深褐色砂混粘土質土	SP-25に切られ、SP-26を切る。井戸跡跡2有り。
SP-5	81.0	74.0	50.0	椭円形	逆台形	に赤い黄褐色粘土質土(細かい礫を含む)・深褐色砂混粘土・深褐色砂混粘土質土	SP-2を切る。
SP-6	60.0	18.0	12.0		皿状形	黒褐色粘土質土	北部は調査区外に至る。
SP-7	31.0	31.0	10.0	円形	椭状形	深褐色粘土質土	
SP-8	16.0	15.0	13.0	円形	椭状形	黄褐色砂混粘土質土	
SP-9	42.0	34.0	16.0	円形	椭状形	明黄色砂混粘土質土・黄褐色砂混粘土質土	
SP-10	44.0	26.0	16.0	椭円形	椭状形	明黄色砂混粘土質土・灰黃褐色砂混粘土質土	
SP-11	55.0	43.0	19.0	隅丸方形	逆凸形	に赤い黄褐色砂混粘土質土・暗オリーブ褐色粘土質土	柱痕跡1有り。
SP-12	32.0	32.0	20.0	円形	逆凸形	に赤い黄褐色砂混粘土質土・暗褐色砂混粘土(礫を含む)	
SP-13	34.0	33.0	14.0	円形	椭状形	暗褐色粘土質土	SP-32を切る。
SP-14	50.0	30.0	26.0		逆凸形	オリーブ褐色粘土質土・暗褐色粘土質土	SP-25を切り、西側は調査区外に至る。
SP-15	46.0	22.0	32.0		逆凸形	灰褐色砂混粘土質土・オリーブ褐色粘土質土	SP-16を切り、西側は調査区外に至る。
SP-16	74.0	46.0	32.0		逆凸形	黄褐色砂混粘土質土・褐色砂混粘土質土・灰黃褐色砂混粘土質土・明黄色砂混粘土質土	SP-15を切られ、西側は調査区外に至る。
SP-17	64.0	56.0	26.0		椭状形	に赤い黄褐色砂混粘土質土・に赤い黄褐色砂混粘土質土・褐色砂混粘土質土・灰黃褐色砂混粘土質土	SP-3を切る。
SP-18	34.0	22.0	17.0	不定形	逆凸形	暗褐色砂混粘土質土	SP-19を切り、西側は調査区外に至る。
SP-19	52.0	30.0	14.0	椭円形	逆凸形	に赤い黄褐色砂混粘土質土・暗褐色砂混粘土質土	SP-19を切られる。
SP-20	26.0	22.0	17.0	円形	逆凸形	に赤い黄褐色砂混粘土質土・深褐色粘土質土	
SP-21	82.0	60.0	25.0		逆凸形	灰黃褐色砂混粘土質土	SP-23を切り、西側は調査区外に至る。
SP-22	226.0	132.0	-	不定形	-	-	
SP-23	36.0	27.0	-	不定形	-	-	SP-21に切られる。
SP-24	64.0	44.0	24.0	椭円形	逆凸形	に赤い黄褐色砂混粘土質土・に赤い黄褐色粘土質土	柱痕跡1有り。
SP-25	38.0	38.0	21.0	円形	逆台形	に赤い黄褐色砂混粘土質土・オリーブ褐色粘土質土	柱痕跡1有り。
SP-26	78.0	44.0	37.0	隅丸方形	逆台形	灰褐色砂混粘土質土・深褐色砂混粘土質土・に赤い黄褐色砂混粘土質土	SP-4に切られる。

造物番号	法基(cm)			平面形	断面形	堆積土	備考
	長軸	短軸	深さ				
S P - 27	60.0	42.0	23.0	横円形	逆内凸形	オリーブ褐色粘質土・泥褐色粘質土	柱痕1有り。
S P - 28	28.0	26.0	8.0	円形	直状形	にない黄褐色粘砂土	
S P - 29	60.0	60.0	8.0	隅丸方形	直状形	褐色粘砂土	S P - 30に切られる。
S P - 30	52.0	34.0	8.0	横円形	直状形	オリーブ褐色粘質土・粘砂土	S P - 29を切る。
S P - 31	60.0	42.0	8.0	横円形	直状形	にない黄褐色粘砂土	
S P - 32	70.0	66.0	12.0	隅丸方形	輪状形	暗褐色粘砂土	S P - 13・S P - 33に切られる。
S P - 33	41.0	34.0	13.0	円形	直状形	暗褐色粘砂土	S P - 32を切る。
S P - 34	36.0	24.0	10.0	-	逆台形	オリーブ褐色粘砂土	西部は調査区外に至る。
S P - 35	54.0	52.0	23.0	隅丸方形	逆凸形	褐色粘砂土・黒褐色粘質土	
S P - 36	40.0	18.0	20.0	-	輪状形	褐色砂粘質土・灰褐色砂泥粘質土	西部は調査区外に至る。
S P - 37	38.0	36.0	12.0	隅丸方形	直状形	褐色砂粘質土	
S P - 38	62.0	28.0	8.0	横円形	直状形	にない黄褐色粘砂土	S P - 39に切られる。
S P - 39	66.0	48.0	7.0	不定形	直状形	にない黄褐色粘砂土	S P - 38を切る。
S P - 40	60.0	46.0	22.0	不定形	逆内凸形	にない黄褐色粘砂土・泥褐色粘質土	
S P - 41	64.0	38.0	21.0	横円形	逆凸形	暗褐色粘砂土・黒褐色(砂混粘質土)	柱痕1有り。
S P - 42	54.0	30.0	20.0	隅丸方形	逆凸形	暗オリーブ褐色粘砂土・泥褐色	柱痕1有り。
S P - 43	38.0	28.0	10.0	-	直状形	暗褐色粘砂土・にない黄褐色粘質土	西部は調査区外に至る。
S P - 44	60.0	53.0	14.0	横円形	逆内凸形	暗褐色粘砂土(礁を含む)・暗褐色粘質土	S P - 45を切る。
S P - 45	32.0	20.0	8.0	-	逆台形	暗褐色粘砂土(礁を含む)	S P - 44に切られる。
S P - 46	130.0	68.0	33.0	横円形	逆凸形	暗褐色粘質土・暗オリーブ褐色粘質土・暗褐色砂泥粘質土	柱痕1有り。
S P - 47	17.0	13.0	7.0	円形	逆台形	にない黄褐色粘質土	
S P - 48	44.0	28.0	7.0	横円形	直状形	にない黄褐色砂泥粘質土	
S P - 49	100.0	96.0	18.0	横円形	逆凸形	暗灰黄色粘質土(砂底)	S P - 50を切る。
S P - 50	30.0	16.0	16.0	-	逆台形	暗褐色粘質土	S P - 49に切られる。
S P - 51	44.0	40.0	10.0	隅丸方形	直状形	にない黄褐色粘質土・黒褐色粘砂土(礁を含む)	
S P - 52	36.0	32.0	13.0	隅丸方形	逆凸形	にない黄褐色粘質土・褐色礁まじり粘質土	
S P - 53	20.0	18.0	8.0	円形	逆台形	褐色粘砂土	
S P - 54	22.0	21.0	10.0	円形	逆台形	褐色粘砂土	
S P - 55	80.0	34.0	8.0	-	直状形	暗褐色粘質土・黒褐色粘砂土	西部は調査区外に至る。
S P - 56	34.0	20.0	7.0	-	直状形	暗褐色粘質土・褐色礁まじり粘質土	西部は調査区外に至る。
S P - 57	30.0	22.0	12.0	円形	逆凸形	暗褐色粘質土・オーリーブ褐色粘質土	
S P - 58	79.0	54.0	8.0	隅丸方形	-	暗褐色粘質土(礁を含む)・黒褐色粘質土	S K - 4を切る。
S P - 59	17.0	15.0	5.0	円形	直状形	暗褐色砂泥粘質土	S K - 4を切る。

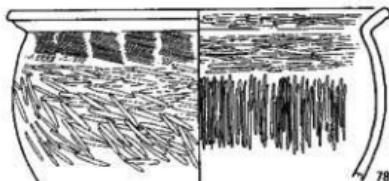
地物番号	法面(ox)			半曲形	直曲形	地 墓 土	備 考
	長	幅	高				
S P - 66	13.0	12.0	5.0	円 形	楕 圆 形	オリーブ褐色粘質土	S K - 4 を切る。
S P - 67	20.0	18.0	9.0	円 形	楕 圆 形	高褐色砂泥粘質土	S K - 5 を切る。
S P - 68	65.0	54.0	6.0	楕丸方形	直 地 形	にぶい黄褐色粘質土	S P - 63 を切る。
S P - 69	60.0	46.0	42.0	円 形	逆 台 形	黄褐色泥粘質土・灰黄褐色砂質	S P - 69 に切られる。
S P - 70	31.0	27.0	10.0	楕丸方形	逆 台 形	高褐色粘質土・暗オリーブ褐色粘質土(礁を含む)	
S P - 71	78.0	62.0	19.0	楕 圆 形	逆 凸 形	褐褐色砂土・暗褐色粘質土(礁を含む)	柱痕1有り。
S P - 72	54.0	48.0	14.0	円 形	逆 凸 形	暗オリーブ褐色粘質土・オリーブ褐色粘質土	柱痕1有り。
S P - 73	32.0	24.0	15.0	円 形	逆 凸 形	暗オリーブ褐色粘質土	
S P - 74	56.0	34.0	33.0	—	—	—	
S P - 75	66.0	46.0	44.0	不定形	逆 凸 形	にぶい黄褐色粘質土(礁を含む)・オリーブ褐色粘質土	
S P - 76	40.0	30.0	12.0	楕 圆 形	逆 台 形	灰黄褐色粘質土(礁を多く含む)・暗褐色粘質土	S P - 82 を切り、S P - 73 に切られる。
S P - 77	64.0	38.0	23.0	楕 圆 形	逆 凸 形	にぶい黄褐色砂土(沙混)・灰褐色粘質土	S K - 6 を切る。
S P - 78	36.0	36.0	7.0	楕丸方形	直 地 形	にぶい黄褐色砂土	S P - 70 • S P - 73 • S P - 82 を切る。
S P - 79	62.0	49.0	20.0	楕丸方形	逆 台 形	にぶい黄褐色砂土・黒褐色粘質土	S P - 72 に切られ、S P - 82 を切る。
S P - 80	50.0	36.0	8.0	椭 圆 形	直 地 形	褐褐色砂土	
S P - 81	17.0	12.0	4.0	円 形	楕 地 形	オリーブ褐色粘質土	
S P - 82	21.0	20.0	12.0	円 形	逆 台 形	褐褐色砂土	S K - 3 • S P - 77 を切る。
S P - 83	37.0	10.0	8.0	—	逆 台 形	オリーブ褐色砂土	S K - 3 を切り、S P - 76 に切られる。
S P - 84	26.0	25.0	9.0	円 形	逆 台 形	オリーブ褐色砂土	S K - 3 を切る。
S P - 85	38.0	37.0	25.0	楕丸方形	逆 凸 形	褐褐色粘質土(礁を含む)・オリーブ褐色粘質土	S K - 3 を切る。柱痕1有り。
S P - 86	24.0	20.0	10.0	楕 圆 形	楕 地 形	褐褐色粘質土	S K - 3 を切る。
S P - 87	64.0	57.0	13.0	不定形	逆 凸 形	にぶい黄褐色粘質土(礁を含む)・暗褐色粘質土	S K - 4 • S K - 5 • S P - 87 を切る。
S P - 88	62.0	42.0	18.0	—	逆 凸 形	褐褐色粘質土・オリーブ褐色砂泥粘質土	S P - 73 +
S P - 89	42.0	31.0	24.0	椭 圆 形	逆 台 形	にぶい黄褐色粘質土(礁を含む)・暗褐色粘質土	
S P - 90	80.0	62.0	13.0	楕丸方形	逆 台 形	オリーブ褐色	
S P - 91	68.0	66.0	33.0	楕丸方形	逆 凸 形	にぶい黄褐色粘質土(礁を含む)・黑褐色粘質土・黄褐色泥粘質土	
S P - 92	46.0	18.0	23.0	—	逆 台 形	黄褐色砂土・暗オリーブ褐色粘質土	
S P - 93	42.0	36.0	32.0	円 形	逆 台 形	にぶい黄褐色粘質土(礁を含む)・暗褐色粘質土	
S P - 94	30.0	30.0	24.0	椭 圆 形	逆 台 形	黄褐色泥粘質土	
S P - 95	140.0	63.0	19.0	不定形	直 地 形	にぶい黄褐色粘質土(礁を含む)	
S P - 96	66.0	60.0	26.0	円 形	逆 凸 形	にぶい黄褐色粘質土(礁を含む)・暗褐色粘質土	
S P - 97	30.0	30.0	30.0	円 形	逆 凸 形	黄褐色粘質土・暗オリーブ褐色	
S P - 98	22.0	21.0	10.0	円 形	椭 地 形	オリーブ褐色粘質土	
S P - 99	38.0	33.0	20.0	円 形	逆 台 形	暗オリーブ褐色粘質土	
S P - 100	18.0	16.0	12.0	円 形	椭 地 形	暗オリーブ褐色粘質土(沙まじり)	

遺物番号	法面(cm)			半圓形	断面形	堆積土	備考
	長	幅	高さ				
S P - 95	36.0	22.0	17.0	円 形	逆台形	暗褐色粘土質土(縫を含む)	S P - 6を切る。
S P - 96	26.0	22.0	10.0	円 形	輪状形	灰褐色粘土質土	
S P - 97	36.0	31.0	26.0	橢円形	逆台形	褐色粘土質土(縫を含む)	
S P - 98	34.0	24.0	10.0	橢円形	輪状形	褐色粘土質土(縫を含む)	
S P - 99	19.0	17.0	14.0	円 形	逆台形	暗褐色粘土質土	
S P - 100	26.0	24.0	11.0	円 形	輪状形	において黄褐色粘土質土	S P - 101を切る。
S P - 101	64.0	28.0	-	-	-	-	S P - 100・102に切られ東部は調査外。
S P - 102	70.0	68.0	31.0	橢丸方形	逆凸形	灰褐色粘土質土(縫を含む)・において黄褐色粘土質土・暗褐色粘土質土	S P - 101を切り、東部は調査外。
S P - 103	28.0	24.0	6.0	-	逆台形	において黄褐色粘土質土	S P - 104に切られる。
S P - 104	60.0	55.0	6.0	不定形	輪状形	において黄褐色粘土質土	S P - 103を切る。
S P - 105	68.0	59.0	29.0	橢丸方形	逆台形	オリーブ褐色砂土・黄褐色泥粘土質土	
S P - 106	45.0	44.0	47.0	橢丸方形	逆台形	オリーブ褐色砂土(縫を含む)	
S P - 107	34.0	16.0	11.0	橢円形	逆台形	において黄褐色砂土	
S P - 108	26.0	19.0	12.0	橢丸方形	逆台形	暗褐色粘土質土(縫を含む)	S P - 69に切られる。
S P - 109	42.0	23.0	14.0	橢円形	逆台形	において黄褐色砂土	
S P - 110	30.0	26.0	18.0	橢円形	逆台形	暗褐色粘土質土	S P - 111を切る。
S P - 111	26.0	18.0	6.0	-	逆台形	オリーブ褐色粘土質土(縫を多く含む)	S P - 110に切られる。
S P - 112	30.0	25.0	32.0	橢円形	逆台形	オリーブ褐色粘土質土(縫を多く含む)	
S P - 113	22.0	22.0	8.0	円 形	輪状形	明黄色泥粘土質土・黄褐色泥粘土質土	S P - 96に切られる。
S P - 114	33.0	25.0	21.0	-	逆台形	明黄色泥粘土質土・黄褐色泥粘土質土	中世以降の落込みで切られる。
S P - 115	34.0	34.0	21.0	橢円形	逆台形	-	
S P - 116	66.0	35.0	26.0	橢丸形	逆台形	暗褐色粘土質土(縫を含む)・オリーブ褐色粘土質土	S P - 84に切られる。
S P - 117	26.0	23.0	24.0	円 形	逆台形	暗褐色粘土質土・オリーブ褐色粘土質土	
S P - 118	24.0	19.0	19.0	円 形	逆台形	明黄色泥粘土質土	中世以降の落込みで切られる。
S P - 119	36.0	35.0	20.0	円 形	逆台形	黒褐色粘土質土	
S P - 120	30.0	26.0	11.0	円 形	逆台形	オリーブ褐色粘土質土	S P - 122に切られる。
S P - 121	46.0	26.0	24.0	円 形	逆台形	明オリーブ褐色粘土質土・暗赤色泥粘土質土・オリーブ褐色粘土質土	S P - 122に切られ、東部は調査外。
S P - 122	95.0	78.0	33.0	橢丸方形	逆凸形	暗オリーブ褐色粘土質土(縫を多く含む)・オリーブ褐色粘土質土・黄褐色泥粘土質土	S P - 120・121を切り、東部は調査外。
S P - 123	60.0	56.0	12.0	橢円形	逆台形	において黄褐色粘土質土(縫を含む)	
S P - 124	44.0	32.0	12.0	円 形	逆台形	オリーブ褐色粘土質土	
S P - 125	24.0	22.0	14.0	円 形	逆台形	黄褐色泥粘土質土	中世以降の落込みで切られる。
S P - 126	36.0	34.0	18.0	橢丸方形	逆台形	暗褐色泥粘土質土・明黄色泥粘土質土	
S P - 127	37.0	29.0	20.0	円 形	逆台形	明黄色泥粘土質土・黄褐色泥粘土質土	東部は調査外。
S P - 128	32.0	29.0	20.0	円 形	逆台形	黒褐色粘土質土	
S P - 129	36.0	36.0	12.0	円 形	輪状形	暗褐色粘土質土(縫を含む)	
S P - 130	80.0	74.0	20.0	円 形	逆台形	暗褐色粘土質土(縫を含む)	

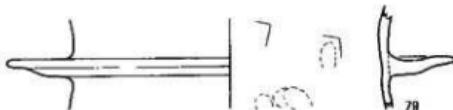
遺物番号	寸法(cm)			断面形	堆積土	備考
	反 転 部 幅	左 右 幅	深 さ			
S P - 131	30.0	30.0	18.0	円 形	逆 台 形	暗オリーブ褐色粘質土・黒褐色上 褐色泥粘質土・灰黃褐色帶
S P - 132	30.0	22.0	13.0	-	逆 台 形	褐色泥粘質土・灰黃褐色帶
S P - 133	60.0	40.0	33.0	椭 圆 形	逆 凸 形	暗褐色質土・黑褐色質土(砂まで あり)褐色を含む・黒褐色質土(砂まで あり)
S P - 134	49.0	46.0	22.0	円 形	逆 台 形	褐色質土・暗褐色粘質土(縦をわず かに凸む)
S P - 135	29.0	28.0	13.0	円 形	逆 台 形	に近い黃褐色泥粘質土
S P - 136	65.0	34.0	38.0	-	-	暗褐色泥粘質土・暗オリーブ褐色 質土
S P - 137	54.0	50.0	24.0	円 形	逆 台 形	に近い黃褐色沙質土・灰黃褐色 泥質土
S P - 138	48.0	40.0	18.0	円 形	椭 状 形	灰黃褐色沙質粘質土
						SB - 5
						東部は調査区外。SB - 5
						SB - 5
						SB - 5
						SB - 5



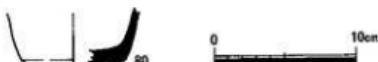
77



78



79



80

10cm

第25図 小穴内出土遺物実測図

鎌倉時代

溝（SD）

SD-1

調査区中央で検出した溝状の遺構である。方向は東-西方向で、幅約5mを測る。東壁付近では北方へ伸びる。切り込み面は第4層上面で、最深部では第7層まで切り込んでおり、弥生時代後期の遺構面を削平している。当調査地の北部で実施している第1次調査（TG80-1）・第13次調査（TG82-13）などの調査でもよくにた遺構が確認されている。

江戸時代

落込み状遺構（SO）

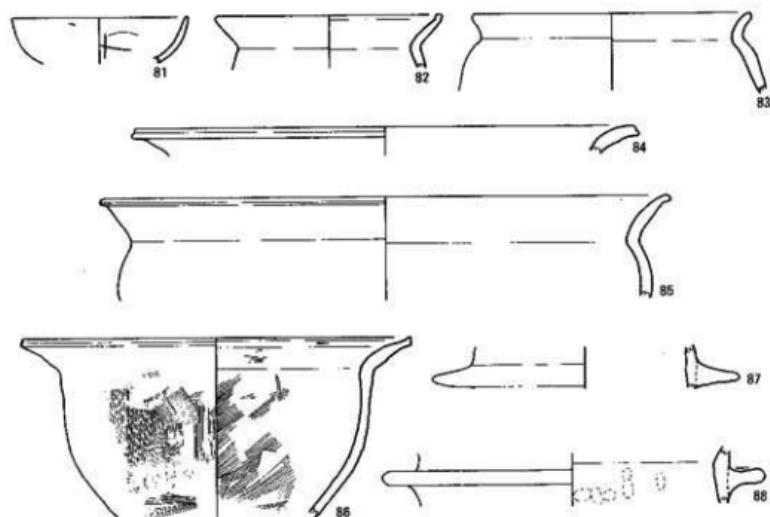
SO-1

調査区南部で検出した。第3層上面から第8層まで切り込んでいる落ち込み状遺構である。北側は東西方向に伸びるが、南側は調査区外に至り、不明である。この落ち込み状遺構は古地図からみると条里遺構に関連する区画溝ではないと予想される。

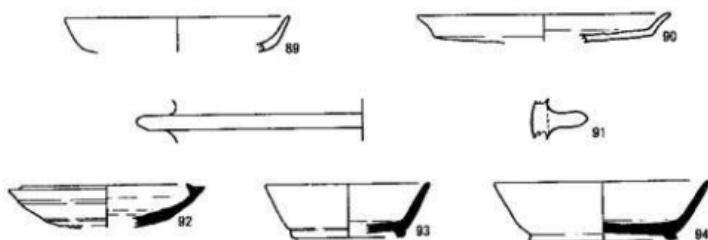
遺構に伴わない出土遺物

基本層序の第2層・第3層・第4層から古墳時代から鎌倉時代の遺物が出土している。遺物はコンテナ箱にして約9箱分出土したがほとんど細片化したものであった。その大半は中世の整地層である第4層内から出土した遺物である。

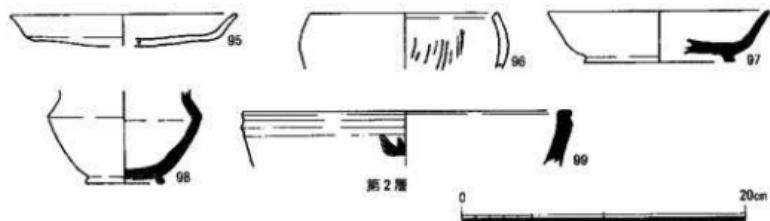
以下、図化できたものについて記す。第4層から出土したものは奈良時代に比定される土師器の杯（81）・甕（82～84）・鉢（85・86）・羽釜（87・98）である。第3層から出土したものは平安時代後期に比定される土師器の中皿（89・90）・羽釜（91）、古墳時代後期に比定される須恵器の杯身（～93）である。第2層から出土したものは平安時代後期に比定される中皿（99）、古墳時代後期の土師器の鉢（96）、須恵器の杯身（97）・小型甕（95）・器台（96）である。



第4層



第3層



第26図 遺構に伴わない出土遺物実測図

## 4) 出土遺物観察表

SW-1

遺物番号	名 種	口径 (cm)	高さ (cm)	測 長・径 法 等 の 特 殊	色 調	計 土	性 成	備 考
1 (秀生土器)	口徑 13.2	11	縫部外側ヨコナデ・ヘタミガキ、内面ナラ・接合線	に赤い褐色	2mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
2 同上	口径 13.8	11	口縫部内外面摩耗のため調整不明	褐色	2mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
3 同上	口径 13.6	11	口縫部内外面摩耗のため調整不明	に赤い褐色	2mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良		
4 同上	口径 16.2	12	口縫部内外面ヨコナデ・ハケナデ(2本/cm)、内面ナラ	外:に赤い褐色 内:赤褐色	5mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良		
5 同上	体部径 18.2 底径 4.8	12	体部の外側上部へ中間部分は摩耗のため不明、縫部ナラ、内面上部指ナラ、接合線	外:に赤い褐色 内:赤褐色	2mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良		
6 台形氣孔器 (秀生土器)	底径 12.8	12	口縫部内外面ヨコナデ、体部外側ヘタミガキ、内面指ナラ・接合線	外:に赤い褐色 内:赤褐色	6mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
7 蓋 (秀生土器)	口径 12.4	12	口縫部内外面ヨコナデ	外:淡青褐色～ 内:淡褐色	5mm以下の砂粒を含む	良好		
8 同上	口径 16.4	12	口縫部内外面ヨコナデ、体部外側ナラ ナラ、接合線、内面ナラ	外:に赤い褐色 内:赤褐色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
9 同上	口径 16.8	12	口縫部内外面ナラ、外側に接合線有り	外:赤褐色 内:褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良		
10 同上	口径 22.0	12	口縫部内外面タクナラヘタミガキ、内面ナラ	外:に赤い褐色 内:に赤い褐色	7mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
11 高杯 同版七	底径 4.6	12	体部外側摩耗のため調整不明、内面ナラナラ、接合線・接合部・接合部下端	外:淡青褐色 内:淡褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良		
12 同上	底径 4.2	12	底部外側ナラナラ、接合部・接合部下端、内面ナラナラ	外:に赤い褐色 内:に赤い褐色	2mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
13 同上	底径 5.2	12	底部外側タクナラ・しづり目、内面ナラナラ	外:に赤い褐色 内:に赤い褐色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良		
14 同上	底径 4.8	12	底部外側摩耗のため調整不明、内面ナラナラ	外:に赤い褐色 内:灰褐色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
15 盆台 (秀生土器)	口径 17.8	11	縫部外側ナラナラ、内面ハケナデ(3本/cm)、体部外側ヘタミガキナラ、内面ナラナラ	に赤い褐色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良		
16 脚 (秀生土器)	口径 38.0	12	口縫部外側ハラナラ、(9本/cm)内面ナラナラ、体部外側摩耗のため調整不明	外:淡褐色～に 内:赤褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
17 同上	底径 4.8	12	底部外側ナラナラ、内面ヘタミガキ	外:に赤い褐色 内:に赤い褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
18 同上	口径 16.4 底径 11.2 3.9	12	口縫部内外面ヨコナデ、体部内外面不 明、内面ナラナラ、底部外側ヘタミガキナラ、底部外側 に赤いもので押された痕	外:明褐色～ 内:赤褐色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を多く含む	良		
19 同上	口径 14.2	12	口縫部外側ヨコナデ、内面ヘタミガキナラ、体部外側ナラナラ	外:に赤い褐色 内:に赤い褐色	2mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好		
20 剣上 同版七	口径 14.4	12	口縫部内外面ヨコナデ、体部外側ナラナラ、内面ヘタミガキナラ	外:に赤い褐色 内:赤褐色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母・石英)を含む	良好		

遺物番号	器種	法基 道標番号	器高 (cm)	口径	調査・枝法等の特徴	色調	地土	成	備考
21	瓶	(秀生上端)	底径	4.2	底部内外面ナデ	外 内 にない褐色 にない褐色	2mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良	
22	同上		底径	5.0	底部外筋指痕底旋り、内面摩耗のた め調整不明	にない褐色	2mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良	
23	有孔鉢 (秀生上端)		口径	14.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、 内面脂層ナナダ	外 にない黃褐色 色 内 にない黃褐色 色	4mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良好	
24	瓶 圓版七	口縁 (秀生上端)	口縁 底径	15.8 10.9	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ(ラ ミガキ)、内面ヨコナダ後ハケナデ(10 本/cm)、底部内外面指痕(底旋)	外 にない黃褐色 色 内 にない黃褐色 色	3mm以下の砂粒(角 閃石・雲母)を含む	良	
25	同上		口径	14.9 12.6 11.8	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ ラミガキ、内面ヨコナダ、底部外面ナラミガ キ後ナダ、西方孔有り	外 にない褐色 色 内 にない黃褐色 色	5mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良	
26	同上		口径	22.8	摩耗のため調整不明	外 淡褐色 内 淡褐色	5mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良	
27	同上		口径	24.2	口縁部内外面ナデ	外 にない黃褐色 色 内 にない褐色	4mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良	
28	同上		口径	24.1	口縁部外面ヘラミガキ、内面ナデ	外 にない褐色 色 内 にない黃褐色	3mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良好	
29	同上		口径	27.6	口縁部外面摩耗のため調整不明、内面 ヘラミガキ	淡褐色	3mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良好	
30	同上		口径	27.8	口縁部内外面ヨコナデ	外 にない黃褐色 色 内 にない黃褐色～ にない褐色	2mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良好	
31	同上	圓版七	口径	31.8	口縁部外面ヘラミガキ、内面ナデ、 体部内外面ヘラミガキ	にない褐色	3mm以下の砂粒(角 閃石・雲母)を含む	良	
32	同上		口径	13.4	腹部外面ヘラミガキ、内面ナデ、四方 孔有り	外 にない褐色 内 にない褐色	2mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良好	
33	同上		底径	13.4	腹部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ(10 本/cm)、西方孔有り	外 にない黃褐色 内 にない褐色	3mm以下の砂粒(雲 母)を含む	良好	
34	同上		底径	15.8	腹部外面ヘラミガキ、内面ハケナデ、 (6本/cm)、四方孔有り	外 にない褐色 内 にない褐色	4mm以下の砂粒(長 石・角閃石・雲母) を含む	良好	
35	同上		口径	19.0	腹部外面ヘラミガキ、内面ナデ、四方 孔有り	外 にない黃褐色 内 にない褐色	5mm以上の砂粒(角 閃石・角閃石・雲母) を含む	良好	
36	同上		口径	13.6	腹部外面ナナダ後ヘラミガキ、内面ナデ 後ハケナデ(9本/cm)	外 淡褐色 内 にない褐色	4mm以下の砂粒(石 英・雲母)を含む	良好	
37	同上	圓版七	底径	12.4	体部外曲ヘラミガキ、内面ナデ、脚部 外面ナデ・ヨコナデ、内面ナデ。ヨコ ナデ・指痕压痕、三万孔有り	にない褐色～ にない褐色	4mm以下の砂粒(角 閃石・雲母)を含む	良好	

## 土壌

遺物番号	器種	底面 (cm)	高さ (cm)	形態・調査等の特徴	色調	胎土	焼成	備考
38 (土器)	口徑	12.0	1.0	脚部外側へタミガキ、内面しぼり回ナダ・接合部・指標正規、脚部内面ハケナダ	外 棕色 内 明褐色	1mm以下の砂粒(長石・雲母)を含む	良	
39	同上	口徑	17.8	口縁部外側ヨコナナテ後ヘタミガキ、内面ヨコナナ	外 黄褐色 内 黄褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良	
40	同上	口徑	23.2	口縁部内面ナナテ	外 棕色 内 に赤い褐色 ～に青い褐色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石)を含む	良	
41 同版八	同上	口徑	21.9 3.3	体部外側へタミガキと思われる表面剥落のため表面不明、内面ナナ、指標正規、接合部	外 棕色～淡褐色 内 に赤い褐色	4mm以下の砂粒(長石・雲母・チャート・赤褐色鉱化物)を含む	良	黒泥育り
42 (土器)	口徑	14.0	口縁部外側ナナ、内面ハケナダ(8本/cm)	外 に赤い褐色 内 に灰白色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良		
43	同上	口徑	14.8	口縁部内外面ヨコナナ、体部外側ハケナナ、内面ヘラナナ	外 棕褐色～灰褐色 内 棕褐色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母・石英)を多量に含む	良	
44 同版八	同上	口徑	12.6 13.0 16.2	口縁部内面ヨコナナ、体部外側タタキ後ハケナダ(10本/cm)、内面ヘラケナダ	外 に赤い褐色 内 に赤褐色～灰褐色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を多量に含む	良	
45	同上	底径	13.0	口縁部内外面ヨコナナ、体部外側ハケナダ(9本/cm)、内面ヘラケナダ	外 に赤い褐色 内 に赤褐色～淡褐色	2mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良	
46	同上	底径	12.8	口縁部外側ヨコナナ、内面ナナ、体部外側ヨコナナ、内面ヘラケナダ	外 淡褐色～赤茶褐色 内 淡褐色	2mm以下の砂粒(石英・角閃石・雲母)を含む	良	
47 同版八	同上	底径	14.0	口縁部内外面ヨコナナ、体部外側ナナ、内面ヘラケナダ	外 淡褐色～灰褐色 内 灰白色	3mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を少量に含む	良	
48	同上	口徑	9.8	口縁部外側ハケナダ(6本/cm)、内面ヨコナナ、体部外側ハケナダ(6本/cm)、内面ナナ、指標計賦	外 に赤い褐色～灰褐色 内 淡褐色	8mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良	
49	同上	口徑	11.0	口縁部内外ハケナダ(6本/cm)、内面ヘラナナ、体部外側ハケナダ(6本/cm)、内面無痕計賦	外 に赤い褐色～灰褐色 内 淡褐色～灰褐色	2mm以下の砂粒(長石・石英・雲母)を含む	良	
50 同版八	同上	口徑	12.4	口縁部外側ハケナダ(5本/cm)、内面ヘラナナ、体部外側ハケナダ(6本/cm)、内面無痕計賦	外 棕褐色～赤褐色 内 明褐色～に赤い褐色	8mm以下の砂粒(長石・石英・雲母)を含む	良	
51 同版八	小切丸底(土器)	口徑	11.1 5.8	口縁部内外ヘタミガキ、体部外側ヘタミガキ・ヘラケナダ、内面磨工具痕	外 棕褐色～赤褐色 内 明褐色～に赤い褐色	1mm以下の砂粒(長石・雲母)を含む	良	
52 同版八	同上	口徑	12.2 7.0	口縁部内外面、体部外側は摩耗のため剥離不規則、内面内面ナナ	外 棕褐色～灰褐色 内 明褐色～に赤い褐色	2.5mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良	
53	高杯(土器)	口徑	16.4	口縁部内外面摩耗のため剥離不明	外 棕色 内 淡黃褐色	2mm以下の砂粒(雲母)を含む	良	
54	有孔杯(土器)	口徑	5.2	底部外側タタキ、内面ナナ	外 に赤い褐色 内 に赤褐色	4mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を多量に含む	良	
55	瓶(泡平上唇)	口徑	16.4	口縁部外側ヨコナナ、内面ヨコナナ、ハケナダ、体部外側タタキ後ハケナダ、内面ヘラケナダ	外 に赤い褐色 内 に赤褐色	2mm以下の砂粒(長石・角閃石・雲母)を含む	良好	

遺物番号 回収番号	器種 (cm) 法量	形態・調査等の特徴	色調	新土成 分	備考
56 (土器類)	口径 11.5 高さ 4.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ナダ	外にぶい黄褐色～烟灰色 内 黑～深褐色	1 mm以下の砂粒を含む	良
57 同上	口径 17.6	口縁部外面摩耗のため調整不規則、内面ナデ、体部内面ナダ	外にぶい黄褐色～灰褐色 内 黑褐色	1 mm以下の砂粒を含む	良
58 (土器類)	口径 15.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面に指印有	外 刮削灰色 内 刮削灰色～烟灰色	2 mm以下の砂粒を含む	良
59 同上	口径 20.0	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面指印痕、内面ナダ、指印有	外 灰黄褐色～褐色 内 刮削灰色～灰褐色	4 mm以下の砂粒を含む	良
60 同上	口径 25.8	口縁部内外面ナデ、体部外面へラナデ、にぶい褐色 内面へラナデ	にぶい褐色	2 mm以下の砂粒を含む	良
61 (土器類)	口径 22.8	外側ナデ・擦合痕、内面摩擦圧痕	外にぶい褐色 内にぶい赤褐色～褐色	3 mm以下の砂粒を多量に含む	良
62 同上	口径 24.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ナデ、体部外面ヨコナデ、内面へラナデ	外 橙色～にぶい黄褐色 内 にぶい褐色～褐色	3 mm以下の砂粒を含む	良
63 同上	口径 24.0	外側ナデ、内面摩耗のため調整不規則	外 にぶい褐色 内 にぶい褐色～黒褐色	4 mm以下の砂粒を含む	良
64 同上	筒径 22.8	体部外面ヨコナデ、内面ナデ	外 刮削褐色 内 褐色	3 mm以下の砂粒を含む	良
65 同上	筒径 28.8	体部外面ヨコナデ、内面ナデ	褐色～明赤褐色	3 mm以下の砂粒を含む	良
66 同上	筒径 29.4	体部外面ヨコナデ、内面ナデ	外 橙色～褐色 内 にぶい褐色	2 mm以下の砂粒を含む	良
67 (土器類)	口径 16.4	内外面凹凸ナデ	灰白色	精良	良
68 (須恵器)	口径 12.0 高さ 10.8	内外面回転ナデ、底部附着高台・底部表面に墨色(剥離不規則)有り	外 灰白色～にぶい黄褐色 内 灰黃褐色～灰褐色	精良	良好
69 (須恵器)	底径 9.2	内外面回転ナデ、底部附着高台・底部表面に墨色(剥離不規則)有り	白灰色	精良	良好 黑斑有り
70 (須恵器)	底径 8.4	内外面回転ナデ、内面に静止ナデ	白灰色	精良	良好
71 (須恵器)	底径 4.4	内外面回転ナデ、体部外面回転ヘラケスリ	白灰色	精良	良好
72 (須恵器)	口径 6.8	内外面回転ナデ	外 赤褐色～明褐色 内 黑褐色	1 mm以上の砂粒をごく少含む	良好
73 同上	口径 16.4	内外面回転ナデ	白灰色	精良	良好
74 同上	口径 23.6	口縁部内外面回転ナデ、体部外面回転かき出し、内面凹凸凹凸キ	白灰色	精良	良好
75 同上	口径 27.0	内外面回転ナデ	外 淡褐色～暗褐色 内 黑褐色	精良	良好

## 4) 出土遺物観察表

遺物番号	基 標 (cm)	口徑 法寸	形 态・調 整 等 の 特 徴	色 調	精 工	燒 成	備 考
77 小型鉢 (土器)	口径 底面	12.1 2.8	外側ヨコナギ、内面ヨコナギ・トナギ	褐色	1mm以下の砂粒を含む	良	
78 鉢	口径	26.8	口縁部外側ヨコナギ、内面ヘラミガキ、体部外側ヘラミガキ、内面ヘラミガキ	外 内 に赤い黄褐色 に赤い黄褐色	4mm以下の砂粒を含む	良	
79 瓦釜 (土器)	口径	31.8	体部外側ヨコナギ、内面ナギ・ヘラナギ・指端圧痕	外 内 に赤い褐色 に褐色	3mm以下の砂粒を含む	良	
80 瓦釜 (土器)	底径	6.4	内外側山輪ナギ、横部凹凸ヘラケズリ	灰白色	精良	良好	
81 瓦 (土器)	口径	12.6	内外側ヨコナギ	褐色	1mm以下の砂粒を含む	良	
83 瓦釜 (土器)	口径	15.8	内外側ヨコナギ	褐色	1mm以下の砂粒を含む	良	
83 瓦上	口径	19.4	口縁部内外側ヨコナギ、体部内外側ナギ	外 内 に淡褐色 に褐色	4mm以下の砂粒を含む	良	
84 瓦上	口径	33.2	口縁部内外側ヨコナギ、外側ハケナギ、内側ヘラナギ	に赤い褐色	3mm以上の砂粒を含む	良	
85 瓦 (土器)	口径	39.6	口縁部内外側ヨコナギ、体部外側ナギ、内側ヘラナギ	褐色	2mm以下の砂粒を含む	良	
86 瓦上	口径	27.8	口縁部外側ヘラケナギ・ヨコナギ、内側ヨコナギ、体部外側ハケナギ(10本/cm)、内側ヘラナギ(8本/cm)	褐色	4mm以下の砂粒を少量含む	良	
87 瓦釜 (土器)	口径	21.8	体部外側ナギ	外 内 に明赤褐色	3mm以下の砂粒を含む	良	
88 瓦釜 (土器)	口径	21.2	体部内外側ナギ、内側ハケナギ・指端圧痕	に赤い赤褐色	4mm以下の砂粒を含む	良	
89 瓦 (土器)	口径	15.8	口縁部内外側ヨコナギ、底部外側指端圧痕	褐色	2mm以上の砂粒を含む	良	
90 瓦上	口径	18.0	口縁部内外側ヨコナギ、底部外側指端圧痕、内側ナギ	に赤い褐色	1mm以下の砂粒を含む	良好	
91 瓦釜 (土器)	口径	32.0	体部内外側ナギ	外 内 に明赤褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	
92 瓦釜 (土器)	口径	11.6	内外側山輪ナギ	外 内 に淡褐色 に褐色	精良	良好	
93 瓦上	口径 底面	13.9 3.8	内外側回転ナギ	灰白色	精良	良好	
94 瓦上	口径 底面	10.4 4.2	内外側山輪ナギ	灰白色	精良	良好	
95 瓦 (土器)	口径	16.0	口縁部内外側ヨコナギ、底部外側ヨコナギ、内側指端圧痕	に赤い褐色	3mm以下の砂粒を含む	良好 遮光有り	
96 瓦 (土器)	口径	13.4	口縁部内外側ヨコナギ、体部外側ヨコナギ、内側ヘラミガキ	褐色	2mm以下の砂粒を含む	良好	
97 瓦 (土器)	口径 底面	15.6 3.6	内外側回転ナギ	灰白色	精良	良好	
98 瓦上	底径	3.5	内外側回転ナギ反転	灰白色	精良	良好	
99 瓦上	口径	23.4	内外側回転ナギ・外側に波状文	灰色	精良	良好	

### 3. まとめ

今回の調査地は東郷遺跡推定範囲の東部に位置する。隣接する既往調査では当調査地と同様、弥生時代後期～江戸時代に至る遺構・遺物が検出されている。以下、調査の成果について各時代ごとに記す。

#### 弥生時代後期

調査区で確認された基本層序第6層がこの時期の包含層にあたる。調査区内では土器の集積が見られただけで、集落造構は検出できなかったが、当調査区の北部（約150m）に位置する第13次（昭和56年度市教委）調査・第23次（TG88-23）調査でも検出しており、広範囲に存在していることが明らかになった。

#### 古墳時代前期（布留式古相）

第6層上面（標高6.9m）から切り込む土坑7基（SK-1～SK-7）を検出している。この時期の遺構としては隣接する第7次（市教委）調査・第22次（TG87-22）・第23次（TG88-23）調査でも検出しており、その広がりが確認された。

#### 奈良時代～平安時代前期

当調査区の北東部（約150m）に位置する第1次（市教委）調査では柱穴・井戸の集落遺構が検出されている。さらに当調査地の東部約100mの所で八尾市教育委員会が平成3年度に実施した遺構確認調査で寺院関連の遺物（瓦等）が多量に出土している。今回の調査地では寺院に関連する瓦片は出土しなかったが、調査区内に多数の柱穴が密集して検出しており、その寺院関連の建物ないしはその周囲に居住していた建物群ではないかと想定される。

#### 平安時代末～鎌倉時代

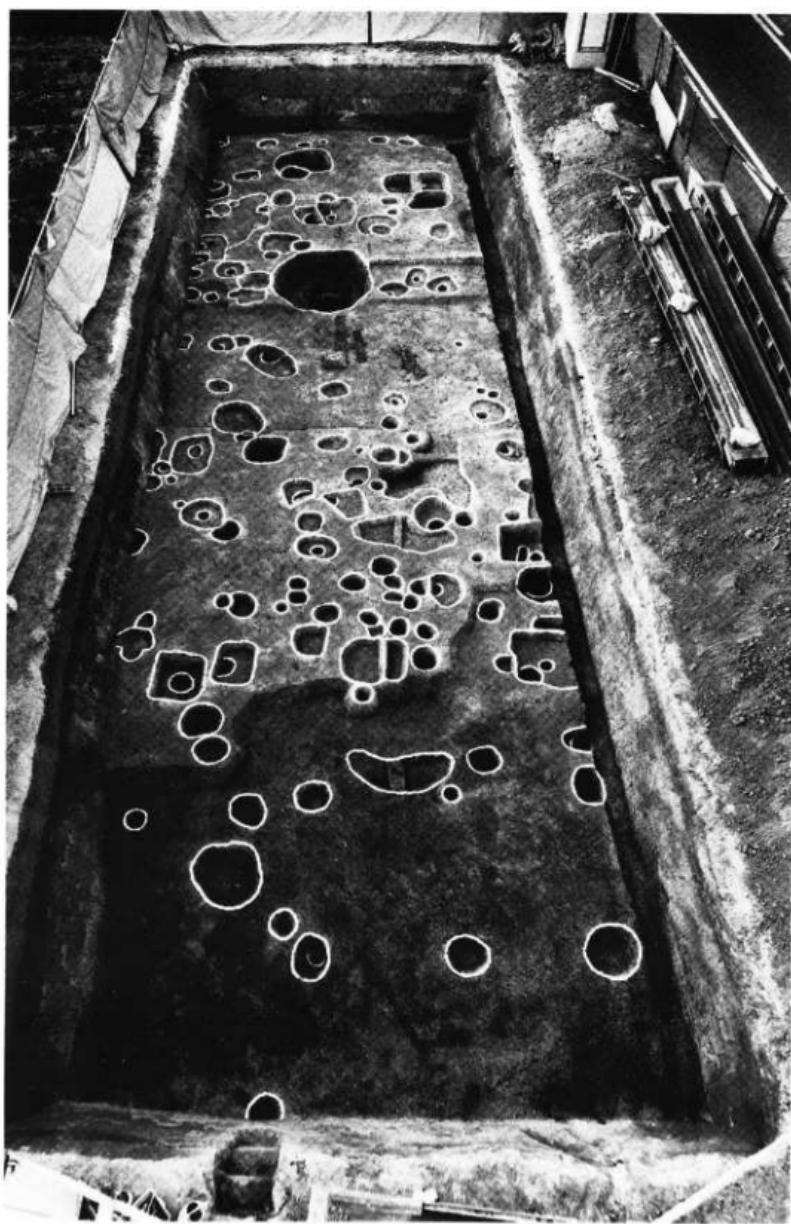
既往調査の結果から当調査地周辺では、この時期に大規模な開発により整地された層が確認されている。今回の調査地でも同様の土層が確認できた。

以上、今回の発掘調査の成果である。調査区では各時代の遺構が高密度に重複しており、今後、周辺で調査を実施に際して、充分注意をしなければならないであろう。

#### 参考文献

- 勅八尾市文化財調査研究会「第8章 東郷遺跡発掘調査概要報告」「八尾市埋蔵文化財発掘調査概報 1980・1981年度」勅八尾市文化財調査研究会報告2 1983. 8
- 勅八尾市教育委員会「東郷遺跡」「東郷遺跡・資振遺跡」勅八尾市文化財調査研究会報告17
- 八尾市教育委員会「9. 東郷廃寺（90-531）の調査」「八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書I」八尾市文化財調査報告25 平成3年度国庫補助事業 1992. 3

図 版



調査区全景（南から）